
遥かなる唄声

有須 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる唄声

【Nコード】

N0177M

【作者名】

有須 薫

【あらすじ】

ごく平凡な高生である佐久間倫太郎。彼には実は秘密があった。一族代々《唄人》と呼ばれる能力者なのだ。そんな特殊な家系に生まれついたとはいえ、一族の中では凡庸だった倫太郎だが、ある日、地下鉄の駅にいるときに、大きな災害に巻き込まれてしまう。そして、次に意識が戻ったとき、彼は……。「うわあ、すげえおっぱい」思わず自分の胸を揉んでいた。

異世界トリップものです。特殊な事情から、主人公は口説かれまくりです。ですが、本人ドン引きで、最後までラブな感じに

ははりませんので念のため（笑

1 落ちる1（前書き）

注意 作者は女性ですので、青年誌にありがちなエロっぽい話にはなりません。どちらかと言うとむさい設定かも（笑

1 落ちる1

実は内緒なのだが、佐久間倫太郎は魔法使いである。

「……大声で言っただとしても、誰もが「はいはい」と聞き流すだろうが。」

佐久間の家は、先祖代々由緒正しい魔法使いの家系だ。

そのことは、家訓として血族以外に話すことは禁じられている。

大昔、時の殿様などに迫害されてきた歴史があるかららしいが、実際のところ、変人扱いされるのが嫌だから、というのが最も大きいような気がする。

少なくとも、倫太郎が友人に話さないのは、そういう理由だ。

いまだき時代錯誤で、不要な能力だと思っただが、後世に伝えることを使命のように考えているジジババともに尻を蹴飛ばされて、17歳の今日まで毎日訓練に訓練を重ねてきた。

具体的には聞かないで欲しい。

あまり……聞かれたくない。

倫太郎は本家の長男なのだが、一族の中では能力的に中程度。

覚えもイマイチだし、根本的な能力からして平凡だ。

今日もまた、師匠の大叔父に溜息をつかれて、「申し訳ありません」を連発してきた。

すいませんね。力のバランスが悪くて。

そんな高い声なんて出ないですって。

年取ってんのに馬鹿みたいに高音連発できる師匠のこと、心底尊敬します。

夕暮れ時の街を、とぼとぼ歩きながら、倫太郎は溜息をついた。言い忘れたが、佐久間家の魔法は《声》を由来とする。

正確には、《唄》だ。旋律と音程と、力ある《真の言葉》により、森羅万象を操る能力で、自らを《唄人》と呼んできた。

声変わり期以前は、倫太郎も一族の次期後継者として目を掛けら

れてきたが、すでにその座は弟に譲った。

弟の章太郎は、声変わりしてもあまり声質が変わらず、むしろボリームが増したように思う。

音のとり方も、即座に組み上げる《旋律》も、軽く倫太郎をしのぐ。……多分、天才なんだろう。

そんな倫太郎にも、得手はあるのだ。

なかなか上達しない技の習得に明け暮れた結果、知識だけが膨大な量に膨れ上がった。

多分、《言葉》の数だと弟には負けない。

しかし、それでは駄目なのだ。

《真の言葉》は、正しい音と旋律に乗せられてこそ、初めて力を発揮するのだから。

考えると考えるだけ落ち込みそうで、倫太郎は軽く首を振った。

「あー、やめたやめた」

悩んでも仕方がないではないか。

人間、もって生まれた能力というのは、決まっている。

努力ではどうしようもないものがある。

そんなことで足掻いても、無駄なのだ。

見たこともないほど見事な夕焼け雲を見上げて、倫太郎はもう一度、溜息をついた。

夕方の街は、オレンジ色に染まっていた。

一瞬それを、血の色のようにだと思ったが……

倫太郎は力なく目を背け、地下鉄の階段を降り始めた。

駅ホームは結構混雑していた。

学校帰りの高校生や、5時きっかりに仕事を終えたサラリーマンやOLなどが、キレイに並んで電車を待っている。

倫太郎もその最後尾に並びながら、明日の模試の事に頭を切り替えようとした。

倫太郎が通っているのは、県内屈指の進学校で、もうすぐ志望大学を提出しなくてはならない。

幸いにも成績は悪くないので、けっこういい大学を狙えそうだが、行きたい所がかなり遠方なのだ。

正直に言つと、これを機会に、一族から少し距離を置きたいと思つている。

問題は、許可が下りるかどうかなのだが……

倫太郎は、のほほんとした両親の顔を思い出した。

両親ともに、類まれなる能力者なのだが、平凡に落ち着いてしまつた上の息子のことを気に病む様子はない。

案外、簡単に許してくれるかもしれない。

倫太郎は、淡い期待で胸を膨らませた。

そのときは、まったく思つてもいなかった。

自分がすぐに、望むとおり一族から隔絶されるということに。それどころか、両親や弟とすら会えなくなるということに。

ぐらり、と足元が揺れた気がした。

しかしここは地下鉄の駅で、その程度の揺れは良くあることだ。誰も、気にしなかった。

そして数分後、惨事は起こつた。

人間、とつさには何も出来ない生き物なのだ。

倫太郎は崩れ落ちるコンクリートの柱を見ながら、ぼんやりと思つた。

ああ、章太郎だったら、なんとかしたのかもしれない。

とつさに、技を繰り出そうと右手が動いていた。

しかし、声を出す間もなかった。

気づいたときには、狭い瓦礫にはさまれて、身動きが取れない状態だった。

死ぬのかな……

恐怖より先に、痛みが来た。

手足の骨が砕けているのがわかつた。

ドロリとしたものが、額から流れていく。

「・・・・・・最悪」

肺に血がたまっているせいか、喉はゴロゴロ鳴るだけで、満足に声が出ない。

これでは、何も出来ない。

倫太郎は、ゆっくりと目を閉じた。

自らの人生を、ろくでもない思いながら。

もう少しなんとか出来たのではと、悔みながら。

最後の力を振り絞って、体内に《唄》を響かせてみる。

ハミングしようとする、激しく咳き込んだ。

どばつとあふれたのは、よく見えなくともわかる、真っ赤な血だった。

次第に薄れていく意識の中、倫太郎は懸命に《真の言葉》を捜した。

もはや助かるうとは思わなかったが。

周囲から聞こえてくる、凄まじい量の悲鳴と苦痛の声を、なんとかしようとして。

―― 赦し給え

―― 救い給え

シンプルな《言葉》が、かすかな息の中にこぼれた。

それは、キラキラと光を帯び。

やがて普通の者の目には見えない、大いなる力の波となって発動したのだが・・・・・・倫太郎がそれを知ることにはもはやない。

佐久間倫太郎、享年１７歳。

彼の肉体は、ここで滅した。

1 落ちる1（後書き）

主人公、いきなり死亡（笑

2 落ちる2

「・・・・・・・・あれ」

倫太郎は、不意に覚醒した。

それはもう唐突に。

気づいたときには、そこにいた感じだった。

「え？」

手が動く。

身体も自由だ。

いやそれどころか・・・・・・・・立っている。

思わず足元を見下ろして、ぎよつとした。

「・・・・・・・・」

脛毛は一体どこに行った？

見えるのは、すらりと細い、美しい脚。

「えええええっ?!」

しかも、見下ろした先に大事なモノがない。

ない！ ない！ ないぞ!!

思わずスルリと触ってみて、指に触れた柔らかな陰毛の感覚にぎよつとした。

——金色だ。

同時に、肩からぱさりと長い髪が落ちてきた。

それも、目を疑うほどに豪華な金色だった。

うなるその輝きは、薄暗いところのわずかな光すら弾いて、目に眩しいほどだ。

まるで、本物の金であるかのように。

しかもその量！

髪を伸ばした経験のない倫太郎にとって、文字通り全身を覆い隠さんばかりの大量の髪など、想像の範疇を超えるものだった。

そして、その隙間から垣間見えるもの・・・・・・・・

「うわあ、すげえおっぱい」

思わず両手で驚？みにし、揉んでしまった。

薄い色素の頂を持ち、たっぷりとした量感を感じさせる、まさに「男の夢！」なふくらみ。

それはもう、「たわわ」としか表現しようがないほどに、デン！と立派な胸は、下着を着けていないにも関わらず立派な曲線を描き、重力に反してツンと上を向いていた。

しばしモミモミとしてみて、その柔らかさに感動すると同時に、このでっかい胸が、リアルに自分のものだという衝撃的な事実を悟らされ……………

「……………ウソだろ」

倫太郎は、両手で胸を掴んだまま、立ち尽くした。

ここがどこだとか、あの地下鉄はどうなったとか、そんなことよりも。

下半身の大事な部分がないことと、突如として現れた巨大なおっぱいのほうが彼にとっては大問題だった。

がちゃん！

不意に、横から大きな物音がした。陶器のようなものが割れる音。家に骨董品が大量にあり、幼い頃はそれを壊してひどく怒られたこともある倫太郎は、本能で身をすくめた。

「……………神よ」

太い、響きのいい声が、日本語ではない言葉で囁いた。

何故かその意味がすぐにわかってしまった倫太郎だが、その言葉を無意識のうちに「神」ではなく「髪」と変換した。

とっさに胸から手を離し、無駄に大量な髪を握る。

「……………」

「……………」

古びた暗い石造りの室内に、無言のまま立ち尽くす二人。

入り口で呆然と立っているのは、たぶん制服なんだろう装飾の少ない服をきつちりと着込んだ、体格のいい男だった。

手には、盆。

先ほどの大きな音は、湯のみのようなものがその上からすべり落ちたせいだ。

「・・・・・・・・大変失礼致しました」

倫太郎が、後から思えばかなりのへっぴり腰で固まっていると、

男はその体格からは想像もできない優雅さでその場に両膝を着いた。

「ご降臨の僥倖に篤く御礼申し上げます」

「・・・・・・・・・・は？」

「わたくし如きに立会いをお許しくださり、望外の喜びと誉れにございます」

いや、何を言っているのかさっぱりだし！

「現神人さまにおかれましては、今日のよき日に聖地バーシャに降り立たれましたこと・・・・・・・・・・」

——あらかみびと？

倫太郎は、たぶん定められているのであろう口上を延々と述べている男を、じろじろと観察した。

口上が長すぎるので、そうする余裕も出てきたわけだが・・・・・・・・

男は若かった。とはいえ、倫太郎よりはかなり年上だろう。

肌は淡い褐色。髪は黒。マントを羽織っていてもわかるほど鍛えられた身体をしていて、もやしっ子の倫太郎にはうらやましい限りだ。

そこで改めて、自分が裸足で裸だと思い出した。

下着はおるか、なにひとつ身にまとっていないのだ。

さすがに肌寒さを感じ、ぶるりと身震いした。少なくとも、何も着ずにいられるような気温ではない。

「・・・・・・・・・・あのう」

つらつらと長い口上を述べていた男が、ピタリと黙った。

それでも視線を床から離さないのをいぶかしみながら、倫太郎は恐る恐る口を開いた。

「できれば何か……着るものを」

そして、己の喉が発した声に、度肝を抜かれてしまった。

男の登場に気をとられ、忘れていた。

自分のこの肉体が、もはや男性とは呼べない代物であることを。

こぼれおちた声は、鈴を転がすように可憐で、可愛らしかった。

凄まじい違和感。

倫太郎は自分でもわかるほど顔色を青ざめさせた。

喉に手をやる。

感じるのは、普段の彼が覚えている触感ではない。ごつごつした喉仏などは当然のように消え失せ、あるのは滑らかな薄い皮膚。

その上、自分の喉を触っているのだという感覚はあるのに、指が触れるこの細さは何だ。

ぐらり、と視界が揺れた。

情けなくも腰を抜かしてしまったのだ。

少し離れた場所にいた男が、素早く動いた。

感覚的には、瞬きひとつする間に、瞬間移動してそばに来たような感じ。

倫太郎は、ショックを受けた。

見上げる男が、自分と比べてあまりにも大きかったからだ。

視覚的には、それほどにも思わなかった。ということはつまり、現在の肉体がよほどに小柄だということか。

「このような駄布で失礼致します」

——だふってなんだろう……

倫太郎は、そつと丁寧に大きな布でくるまれた。肌に当たる触感は硬いが、男の体温がいくらか残っていて温かった。

「……………抱かせていただいても？」

はい？

いまいち状況が理解できず、はっきり言ってしまうえば口から意識が浮遊しそうだった倫太郎は、ものすごい低音でそう囁かれ、ギクリとした。

「こんなに冷え切っておられては、尊い御身体に障ります。すぐに部屋を用意させますので……」

もし倫太郎が女だったら、黄色かピンクの悲鳴を上げたかもしれない。

ただ男である倫太郎が、同じ男に耳元で囁かれ、さらには大切そうに横抱き……いわゆるお姫様だっこ……をされたとして、コメントに困るとしか言いようがない。

「あ、歩けます！ 重いでしょうし」

「いえ、まったく」

男は平然とそういつて、じつと倫太郎を見つめた。

「羽根のように軽いですよ、美しい方」

ぐらり、とまた脳みそが揺れた。

2 落ちる2（後書き）

うーん、やっぱり女性向けっぽい？

3 落ちる3

居たたまれない、とはこういう気分を言うのか。

倫太郎は、男の腕の中で身を固くしていた。

男は大股に、しかし倫太郎を揺らさないよう気を使って歩いてくれている。快適かと問われれば・・・微妙だが。

何しろ、道が悪い。

一体どここの秘境だ！と言いたくなるほど、岩とコケの世界が一面に広がっていて、周囲は巨大な木々の枝葉で満ちあふれているのだ。靴を履いていない足で歩けば、酷いことになっただろう。

しかも、すれ違う男たちが皆、倫太郎を見てぎよっとする。

こんな場所に・・・と、疑問に感じるほどの大勢の男たちが行き来していて、すれ違う者すれ違う者 皆が一斉に倫太郎を見て、目を極限まで見開き、即座に額づく。

膝を付く、というレベルではない。文字通り、その場に全てを投げ出してひれ伏すのだ。

・・・居たたまれない。

かといって、男の胸に顔を埋めるのは沽券にかかわるような気がして、倫太郎はただひたすら固まっていた。

お願いだから、説明してほしい。

何がどうして、こんな事になっているのか・・・

「・・・ご気分でも？」

それに止めてほしいのだ。

無駄にいい声で囁くのを。

相手は倫太郎を女性だと思っているのだろうか、実際の中身は男だ。

低音で囁かれて、頬を染めるような趣味はない。

「ご不便をお掛けして申し訳ありません。ここは魔法が使えませんので、どうかご辛抱を。・・・あと15分ほどで神殿に着き

ます」

今、魔法と言わなかったか？

倫太郎は、はっとして顔を上げた。

すぐに目が合った。

男の目は、青みがかった灰色だった。

足元を見ずに、ずっと倫太郎を見ていたのではないか……
そう思ってしまうほどに直線的な視線。

倫太郎はモゾモゾと居心地の悪い思いで、目をそらした。

それから15分は、これまで以上に苦行だった。

自分の足で歩きたい。

それはもう、切実に。

この岩とコケだらけの急勾配を、靴もなしに歩ける自信はまったくないが、何度か「お願い」はしてみたのだ。即座に、丁重に、お断りされてしまったが。

しかも、下のほうに行けば行くほど、どんどん人が多くなる。その全員が、残らず膝を付き、額を岩に押し付けていくものだから、ますますお尻が落ち着かず、そわそわしてしまうのだ。

「……おお神よ」

まるで倫太郎が神そのものであるかのように、崇められ、拝まれても困る。

そんな男たちのざわめく声は聞こえてくるのに、誰とも目はあわなかった。

全員が、即座に額ずいてしまうからだ。

楽して斜面を降りているにもかかわらず、全身を倦怠感が包んでいった。

揺れに多少酔ったせいもあるだろう。

「ご不快ですか？」

軽く目を伏せた倫太郎に、低い美声が問うて来た。

倫太郎の小さな表情の変化を即座に読み取るこの男は、一体何者なんだろう。

あまりにも大勢の見知らぬ連中にひれ伏されてしまうと、一応は立って目を合わせてくれる男の存在が近いものを感じてくる。

「やっぱり、自分で歩いたほうが……」

「もう着きましたので」

即座に答えが返ってきたが、やはりこれは「否」なんだろう。

倫太郎はぎゅっと眉間にしわを寄せ、その着いたという場所を見ようとした。

したのだが……目が回った。

ぐったりと力を抜いてしまった倫太郎を、責めないでほしい。

そこは、切り立った崖の上だったのだ。

いや、崖といってもいいのが、定かではない。

ちらりと見下した斜面の端は、確かに崖のように切り立っているのだが、その下の地面は遥か遠く、木なども豆粒ほどにしか見えないう高さなのだ。

まるで、宙に浮かんでいるかのような情景。

あまりの高さに眩暈を覚え、視線をずらすと、またも信じがたいものが視界に飛び込んできた。

大きな翼に、優雅に風をはらんで飛んでいるのは……竜。ざっと見ただけでも数十匹、いや百匹以上はいる。

その、想像上の生き物であるはずの彼らが、崖っぷちに立った倫太郎のほうを見て、一斉に方向転換した、ように見えた。

いや、「見えた」ではない。

優雅にすいすいと風に乗っていた竜たちが、バタバタと多少不恰好にその場で羽ばたき、ぐりと尖った頭をこちらに向けたのだ。

一瞬、凄まじく『見られている感』に苛まれ、肝が冷えた。

しかも、近づいてくる。

視界に入る全ての竜たちが迫ってくる情景は、まさに圧巻だった。圧巻すぎて、ここだけの話、ちびりそうになっただけだ。

迫ってくる空飛ぶトカゲに泣きそうになっていた倫太郎は、その恐ろしい情景に視線を釘付けにされたまま、無意識のうちに男の服

を握っていた。

「……………ご心配には及びません。竜族はあなた様の忠実な僕です」

——しもべ?! しもべってアレか? ペットとかか?? 爬虫類はノーサンキューなんだが!!

名誉のために言っておく。ちびりそうにはなつたし、そりゃあちよつとは涙が滲んだかもしれないが、泣いてはいない。もちろん、男にしがみついたりもしていない!

「あなた様のご降臨を喜び、祝福を得んと馳せ参じているのです。どうか、微笑をお与えください。そして、ご命令を」

——意味がわからん!!

倫太郎が頭の中を真っ白にしているうちに、視界は巨大な竜たちの身体で埋め尽くされた。

近くに来て分かったのだが、竜たちはそれはそれは巨大だった。

小さいものでもセスナぐらいのサイズはあるし、大きいものだとその何倍もで、比較の対象も想像できないほどだ。

そんな大量の竜たちに、期待の込めた目で見つめられて、正直びびった。

目が合う前に拝跪されるのも引くが、ここまで視線が集中するのにも心臓に悪い。

まるで、捕食動物にでもなつた気分だ。いや実際、食べられるのではないかと心臓がバクバク鳴っていた。

そして、事なかれ主義な日本男児である倫太郎はつい……………にへら、と。

大地が、空気が、取り巻く全てのものが、ビリビリと震えた。「ひいっ」

倫太郎は、愛想笑いの表情のまま、ひくりと喉を鳴らした。

竜が、吼えている。

喉をむき出しにして、天高く、誇らしげに。

力が溢れていた。

漲っていた。

竜たちの咆哮により、大地が震える。風が、空気が、帯電しているかのようにバチバチと力を放出する。

それは、倫太郎が知るどんな力の発露より強く、凄まじく。

肝が冷える、などのレベルを遥かに凌駕するものだった。

世界が、割れるのではないかと思った。

少なくとも、倫太郎が教え込まれてきた常識では、地球が真つ二つになってもおかしくない状況だった。

「なんと……すばらしい。これほどの^{いやさか}弥栄を聞く日がこようとは」

男が耳元で、感に堪えかねたように何かを言ったが、まったくもって聞こえない。

「世界は、まことに素晴らしき現神人を賜りました」

ぼたり、と温かいものが頬に落ちた。

あまりの状況に凍り付いていた倫太郎が、ふと自分を抱いている男を見上げると、青灰色の瞳からボロボロと涙が零れ落ちるのが見えた。

ぎよつとした。

というか、「げ」と思った。

いい年をした野郎が泣くのを見るなど、早々ある経験ではない。

男はすぐに倫太郎の視線に気付き、はつとした。

「申し訳ございません、御顔に……」

大きな手が、そつと、倫太郎の頬を拭った。

相変わらず、何を言っているのか聞こえないのだが、その状況はなんとなくヤバイ気がした。

片手で軽々と抱かれ、もう片方の手で濡れている部分をそつと擦られ。

いつの間にか顔が近くに来ていた。

男の色素の薄い目が、ぎゅうと瞳孔を広げるのが分かった。

——や、やばいぞこれは。

チュウされそうな体勢だった。

とつさに、両手を前に突き出していた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

真っ白な小さな両手が、頼りなげに男の顔を押ししている。

倫太郎は改めて、己の肉体の変わりようにぎよつとした。

確かに、男は普通よりかは体格も良く、平和な日本人から思えば無骨なのかもしれない。

だが、その顔を押ししている指の華奢さは何だ。

貝殻のような小さな爪は、何だ。

この目で見えるものが信じがたく、倫太郎は呆然と己の手と思しきものを見上げた。

「・・・・・・・・お手ずから慰めていただけたとは、望外の幸せ」

——え、慰めてなんかないし？

「恥ずかしいところをお見せしました。さあ・・・・・・・・参りましようか」

低くてよく響く声が、幾分震えながら言った。

倫太郎はそこで始めて、周囲がシーンと静まり返っていることに気付いた。

いつの間にか、竜たちの咆哮は収まっていた。

彼らは器用にも宙に浮かんだまま、従順をあらわすように頭を垂れている。

しかも、今気付いたのだが・・・・・・・・

男の背後にいる、大量の人間たちは何だ？

それは異常な光景だった。

そこには軽く500人を超すであろう人間がいるのだが、立っているのは質素な身なりの男と、彼に抱き上げられた倫太郎のみ。

さほど広くはない空間に、びっしりと人間がひしめいていて、しかもその全員が両膝と両肘と額までをも岩の上に押し付け、ひれ伏している。

これまですれ違ったすべての者が、そこにいるようだった。

つまりは、倫太郎たちが通るのを額ずいて見送った後、その背後から付き従って来ていたというのだろうか。

やがて倫太郎は、考えるのを放棄した。というよりも、あまりの事態に、気が遠くなりそうだった。

どう考えてもこの状況は尋常ではなく、論理的な説明など成り立つわけがない。

いやそもそも、今の状況について、説明できるひとはいるのだろうか。

………いることを切に願った。

4 落ちる4

巨大な竜の、なかでも一際体格の良いヤツが、崖っぷちから少し飛び出た足場のような場所に降り立った。

意外にもふわりと身軽そうに岩に爪を立て、この巨体を浮遊させるのに必要な、舞台の緞帳並に大きな羽根をバサリと一度、大きく振るう。

「・・・・・・・・・・っ」

その風圧に、身体がすくんだ。

まるでヘリでも降りてきたみたいだ。

そしてその長い首が、ぐりんと曲がり、こちらに巨大な顔を・・・

・・・

軽く、意識が飛んでしまった。

・・・・・・・・すまん、嘘だ。

倫太郎は目を開けたまま、すっかり十秒間ほど気絶していた。

だって竜だぞ！ でかいんだぞ！！

巨大な顔が、更にぐぐつと寄ってくる。

その鼻息は、はつきり言って暴風だ。

生臭いとかそういうことよりも、男の腕の中にいなければ吹き飛んでいたに違いない。

倫太郎は再び、自分が『お姫様だっこ』されているという事実を思い知り、どつぷりと落ち込んだ。

しかしもはや、男の腕から降りようとは思わなかった。

だって・・・・・・・・怖いじゃないかっ！！

なおも擦り寄ってくる巨大な顔から、出来るだけ逃れようとしてみる。

すると、竜の巨大な目が悲しそうな色合いを帯びたのに気付いた。ぐるん、と大きなガラス玉のようなものが、回る。

瞼の下に、もうひとつ膜のようなものがあって、それがせわしな

く上下した。

—— あ、泣くのかも。

そう思った瞬間、ひどく悪いことをしたような気がして。

「ご、ごめん？」

弱気な倫太郎は、とつさに謝罪していた。

大きな目玉はまたもぐりんと回転し、なにやら考えている様子だったが。

やがてもう一度、すりりと顔を寄せてきた。

倫太郎は、「ひいつ」と声をこぼしそうになった。

寸前でこらえた勇気を誰か褒めてくれ！！

あまりにもあからさまに寄せられる好意に、仕方なくそつと、手を伸ばす。

その大きな生き物に触るのには、勇気と度胸と根性が要った。

何しろ巨大なのだ。

しかも、時折見えるのは、見るからに肉食獣の大きな牙。その使い込まれた感のある尖った歯で、バリバリ頭から食べられてしまうのではと、思わずにいられない。

どこまでも草食系な倫太郎は、巨大アリゲーターを撫でることを強要されたタレントのように、盛大に顔を引きつらせた。

いや、見たこともない巨大生物が相手なのだ、絶対にこっちのほうに怖い。

やがて意を決した。

おずおずと、鼻の辺りに手のひらを乗せてみた。

その皮膚は、見た目どおりにごつごつと硬い。

しかし、意外にも温かった。

爬虫類的な冷たさを想像していた倫太郎は、予想外なその温度に、もう一度確かめるように触れてみる。

なでなでなで。

ぐるるるるるる……

凄まじい重低音の、地鳴りのような音がした。

倫太郎はびつくりして手を引いた。
べろん。

離れていく手を惜しむかのように、紫色の長い舌が追ってきた。
ぐるるるるるるるん

べろん。

幾分湿った舌先が、再度倫太郎の白い手を舐めた。

どうやら気に入ってくれたらしいと安堵しつつも、この地鳴りがよもや竜の喉を鳴らす音などとは知らず、すわ地震？と挙動不審にキョロキョロしてしまった。

改めて見回すと、ひれ伏している人たちはともかく、この場所自体も少し周囲とは違っていた。

まるで世界の淵のように、突如として地面が切れている。その端に、こぶの様にボコリと飛び出した岩場があつて、そこにつかまる様にして竜がいた。

他の場所には青々と木々が茂り、森というかジャングルのような感じなのに、ここだけ岩についたコケすらない。

あとで知ったのだが、この場所は竜たちが着地する専用地らしい。竜が降り立つことが許可されている場所は限られていて、そこですべての人員と物資を積み下ろししているので、若干だが人の手が入った作りになっているようだ。

「そこまでだ、挨拶はいいから早く乗せてくれ。姫はお疲れだ」

——の、乗るのか？

舐められて湿った手を上げたまま、倫太郎はさあああつと顔面から血の気を失せさせた。

自分を抱き上げている男の『姫』という台詞に、引っかかりは覚えたが後回しだ。

子供用のジェットコースターにすら乗れない倫太郎には、あまりにもハードルが高い。

——いやいやいやいや、待ってくれ！

太い足を折り曲げ、おそらくは人が乗れるようにとの配慮なのだ

ろっ、身体を低くする竜。

見れば、その首の付け根附近に、人間が騎乗するための装備が装着されていた。

—— そそそそそんなところに乗れるかあっ！！

それは、どこからどう見ても鞍だった。

何人かが乗れるようなサイズではあるが、馬の背中に置かれているものと大差ない。

あぶみ 鎧はあったが、手綱はなかった。

ただ、それぞれの座る部分の前に、つかまる為の棒のようなものがある。

安全装置の肩あてなどは当然なく、倫太郎の目には凄まじく危なっかしいものにしか見えなかった。

「お顔の色が………ご気分が優れないのですね？ 急ぎましよう」

男は倫太郎を抱いたまま、地面が遙か下方に見える岩場をひよいと渡っていった。

幸いなのは、ずっと抱き上げられているので、自分で動く必要がなかったことだ。それもはや男としてどうかと思うが、大勢が見守る前で、恐怖で身動きできずに失禁してしまうよりはマシだろう。いや、マジで高いんだって！

特に高所恐怖症だと思ったことはないのだが、トラウマになりそうだった。

想像してみてもほしい。東京スカイツリーが一番高いところに立ち、命綱もなにもなしに、平均台（それよりは幅がある足場だが）を歩いていくのだ。

若干人の手が入っているとはいえ最小限で、いつ崩れ落ちるか心配なほど頼りない足元。

風は吹くし、男が歩いているので揺れているし、竜の巨体はますます近づいてくるし……！

倫太郎は、とっさに目を閉じた。

ぎゅつと瞼に力を入れて、ついなので、男の服に額を押し当てておいた。

出来るだけ小さく丸くなっていると、ふわりと身体が持ち上がる感覚がした。

何度聞いても馴染めない美声が、低く耳元で聞こえた。

「しっかりつかまっていますください」

倫太郎は、もはや自分が男だとかそういうことは考えもせず、促されるままにぎゅうつと男の胴回りにしがみついた。

腕を大きく広げても、男の身体を一周させることはできなかった。しかしこの時ばかりは、揺らぎないその逞しさに安堵した。

その安心感も数秒後までだった。

竜が人間を乗せ終え、身体を起こしたかと思うと、助走もなく宙を舞ったのだ。

ひ
い
い
い
い
い
い
い
い
い
つ
!
!
!
!

だから！ ジェットコースターは嫌なんだってええええええええええ

え・・・っ

人間、本当に怖いと声など出ないのだ。

倫太郎は、びゅうびゅうと肌を切っていく風に、ますます恐怖を覚えて震えた。

頼みの綱の男の身体に、それはもう必死ですがり付いて。

頑として、目を開けなかった。

もし開けていれば、素晴らしいこの景色に感動しただろう。

今竜が飛び立ったのは、宙に突如とそびえ立つ、孤高の聖地だった。

天空に浮かんでいるわけではない。

地面から、シャンパンガラスのような形で、見るからに不自然な形状の岩がそそり立っている。

下から登ってくるなど不可能な、まさに鉄壁と呼ぶに相応しい斜面。

その上に緑豊かな森がこんもりと茂り、ところどころに石造りの祠のような、神殿のような建物が見えた。

竜は、気流に乗るようにして、ぐるりと大きく聖地を周回した。

なるほど、この地にかかる為には、竜の翼が必要なのだろう。

どんなに熟練した登山家とて、人力のみで登るのは不可能だ。

そして竜は、螺旋を描くようにしてゆっくり降下していく。

巨大な翼が風をはらみ、優雅で力強い滑空だった。

男が言う神殿とは、その聖地の真下に広がる白亜の宮殿のことだろう。

次第にその威容がはつきりと見えてくる。

白い石で建てられたその建物は、さながら中世ヨーロッパか中近東のお城のようだった。

「神殿」と呼ぶには豪華で、煌びやかな。

しかも、とてつもない広大さだ。

竜は、その中央付近にある、ぽっかりと開いた庭をめがけて降下した。

遠くで、城壁に立つ兵士が大きく旗を振る。

グオオオオオーン！

倫太郎を乗せた竜が、雄々しく喉を震わせて吼えた。

周囲から、同じく猛々しい咆哮が響いた。

それは、吉兆。

悦びを告げる声。

新たなる神殿の主を。

奇跡の現神人の降臨を知らしめる声。

にわかに、眼下が慌しくなるのがわかった。

そして竜が、優雅に大地に降り立つ。

ばさり、と数度、バランスを取る為に翼を上下させ。倫太郎と男を乗せた竜は、大勢の白衣の神官たち前でゆっくりと膝を折った。

しかし倫太郎はその先のことは知らない。

何故なら、無事地面に到着した安堵のあまり、失神してしまったのだ。

・・・・・悪かったな!!

5 落ちた先1

意識が戻ってきたとき、「ああ、妙な夢をみたなあ」とぼんやり思った。

しかし素肌に感じるのは、触ったこともないシーツの柔らかさと、絡みつく鬱陶しい髪。

それらに例えようもない違和感を覚えて、倫太郎は目を開けた。視界に飛び込んできたのは、楕円形にカーテンのようなもので閉ざされた空間。

薄い光沢のある布が幾重にもドレープを作っていて、それがいわゆる天蓋つきのベッドなるものだと思いついたのは、上半身を起こした後だった。

「お目覚めです」

どこかで、囁くような声が聞こえた気がした。

数秒を待たず来客があったことからみて、気のせいではなかったのだろう。

「おはようございます。主上さま」

それは、柔らかな女性の声だった。

「わたくしはあなた様の使徒、エルーザと申します」

さすがにベッドの上はまずかろうと、居住まいを正そうとして、倫太郎は「うわあっ」と悲鳴を上げた。

「ど、どうなさいまし・・・ああ」

ドレープの波を掻き分け、姿を見せたのは、倫太郎の母よりもいくらか年上そうな、美しい銀髪の女性だった。

テレビで見る女優のように、年齢を経て得る色気のようなものがかもし出し、遙か年下のガキですらドキマキしてしまうような、とてもキレイな人だ。

しかしそのときの倫太郎は、それ所ではなかった。

再びその存在感ある胸に、きらきらと渦を巻く髪に、真っ白で華

奢な四肢に気付き、パニックを起こしたのだ。

「お慣れになるまでは、お困りでしょう。ですが、すぐにもとの御身体同様になりますよ」

倫太郎は、素早くその女性のほうを向いた。

それはもう、急いで。

目が合つて、につこりと微笑まれて、その安心できる雰囲気になつて、ようやく何かする物が出来た気がして、倫太郎はゆっくりと肩の力を抜いた。

「その……何が起こつてるのか、説明してくれませんか」

「ええ、もちろん」

エルーザは力強く頷いて、「ですが……」と小首を傾げた。
「先にお召し替えを。……わたくしの目が潰れてしまいそうですわ。美しい方」

「は？」

ごく生真面目そうな口調なのに、いやに含みのある眼差しだった。
「あまりにお美しいので、触れてしまいそうになります。ワールドもよく理性が持ちましたこと」

かなり年上だが、その流し目にくらりときた。

それなりに女性経験のある倫太郎には、彼女の視線の意味はすぐにわかった。

ここまで色っぽい女性に、全身くまなく見つめられ、居たたまれないというか、もっとそれ以上の、危うい気分になりそうになる。

と、そこでまたも気付くのだ。

自分の本来の姿とのギャップに。

あからさまに言うと、あるべき場所に起つものがないショック。
次いで、あるはずのない胸のふくらみが否応もなく視界に入り、ダメージは倍増だ。

もそもそと、その辺にあつた布で、とりあえず下半身を隠した。
少し考えて、更にその布を上のほうへ引っ張る。

そんな倫太郎の様子をじっと見ていたエルーザは、暖かな表情を

目に浮かべ、にこりと笑った。

「安心致しました」

「・・・・・・はい？」

「あなたは、まこと完全なる現神人ですね」

「・・・・・・はあ」

——だから、何なのよアラカミビトって・・・・・・

本音を言えば、そう突っ込みたくてたまらないのだが、この人を相手に不躰すぎるような気がして。

疑問をすべて飲み込んで、あいまいな表情を浮かべる。

「先の御方は、御霊も女性で、依代たる御身体も女性体でございました。これはとても異例なことです。おかげで、世界は均衡を崩してしまいました」

にっこりと笑った彼女が、手に薄絹を持ってベッドに膝を付いた。

——え？　ちょ、ちよつと・・・・・・

にじり寄つてこられて、ドキドキする。

視覚的には極めて卑猥なのだが、客観的に考えると、向こうも女、こっちも女・・・・・・そう考えたところで凄まじく違和感を覚え、鳥肌が立った。

「生まれてくる男女比が、狂ってしまったのです」

——うわあっ

身体を隠していた布に手を掛けられる。

倫太郎はかるうじて声を上げるのをこらえたが、顔は盛大に引きつっているだろう。

「女性の身体で生まれてくるのは、10人にひとり。しかも子供を産む能力があるのはその半数です」

気分は、美人マダムにベッドで迫られる少年である。

エルーザのほうも、絶対にわざとであろう微妙さで身体を寄せてくる。

「わわわっ」

すばっと見事に布を取り上げられ、焦った。

「女性の数が減つてくると、どうなると思いますか？」

もはや鼻と鼻とが触れ合うほどの近さに、彼女の顔があつた。

「……良い匂いがした。」

エルーザは素早く薄絹を倫太郎の頭にかぶせ、てきぱきと子供にするような手際よさでシンプルなワンピースのような服を着せてくれた。

「最初の15年ほどはいいのですが、すぐに人口そのものが減り始めます」

とりあえず素裸ではないことに安堵の息をついていると、急に彼女の口調が深刻なものになった。

これまでの話を聞いていなかったわけではないのだが、倫太郎はその急な声色の変化に戸惑った。

「先の御方が崩御されて、はや50数年。在位の時代を含めると、100年以上です。事態はもはや、身動きできないほどに、本当に深刻な状況でした」

「そ、それは………大変ですね」

じつと見つめられて、返答に困り、つい当たり障りのない返事をしてしまう。

そんな人類存亡の危機的な話をされても、普通の高校生に過ぎない倫太郎には遠い話なのだ。

「ええ、大変です。初潮を迎えた女性は、少なくとも5人の夫を持たねばならず、産めるうちは毎年でも子供を作る義務を負いますから」

堕胎などありえないことだし、避妊ですら重大な罪だ………と言う。

数少ない女性は、人類の貴重な財産で、とても大切にされる一方、籠の鳥のような生涯をおくらねばならない。

子供を産めない女性の末路は悲惨なことが多いし、女性にあぶれた男性の本能的なストレスも大きく、世界は大きく乱れている。

聞けば聞くほど憂鬱な内容に、次第に倫太郎の表情も曇ってきた。

今、自分の肉体は女性である。

まさかとは思うが、複数の夫を持たなければいけないのだろうか？
そして、何人も孕まされるような状況になるのだろうか？

「……………想像するだけで、ぞつと吐き気がした。」

身体は女性でも、本質的なところは生来の男である。

自分が子供を産むなど想像もできないし、それ以前に、男と寝るなど問題外だ！

「ですから、お礼を申し上げたいのです」

「……………はあ」

再び急に明るい口調になったので、倫太郎はきよんとした。

「美しい方、かわいらしい方……………我々はあなた様の御出でを、本当に本当に、心からお待ちしていたのです」

意味がわからない。

はつきりと疑問の表情を顔に浮かべる倫太郎に、彼女はにっこりと、ほんとうに晴れやかな笑顔を浮かべた。

「新たな現神人の出現で、生まれてくる赤子のバランスが戻るでしょう」

「……………？」

「何世代か経るうちに、また世界はもとの、平和な状態に回帰すると思います」

「……………あのう」

まったく理解不能な話をされて、倫太郎は困惑していた。

「ですからその……………俺は元の所に戻るんでしょうか」

聞きたかったのは、このことだ。

「男に、戻るんでしょうか」

大切な、肝心な話だ。

エルーザは、この身体の中身に居るのが男であることは分かっているようだが、元に戻りたいという当たり前の感情をスルーしているように思う。

案の定、彼女は少し意表を突かれたような顔をして、それからポ

ン！と両手を叩いた。

「ああ、申し訳ございません。根本的なご説明がまだでした」

「はあ………」

「現神人は、神代の世界から落ちてこられた御霊が、新たな神の依代に宿り、血肉を成す存在です」

「………」

「落ちてこられたということは、神代の世界で儚くなられたということ。戻られても、もとの御身体は亡きものと思われます」

そんな気はしていたのだ。あちらでの最後の記憶が、あの悲惨な崩落現場なのだから。

だが万が一にも救助が来て、助かってはいないか。

この夢のような状況から覚めると、ベッドの上に居はしないかと、ささやかな望みに掛けていたのだ。

「有史以来、数多くの現神人のご降臨が記録に残っておりますが、元の世界に戻られた現神人はいらっしやいませんし、落ちてこられてから性別を替えられた方もおられません」

はつきり告げられた言葉は、まるで死亡宣告のようだった。

「ご困惑はお察しします。」

恐らくは真つ青な顔をして黙り込んでしまった倫太郎に、彼女は優しく、労わるように言った。

「我々にとって、あなた様は希望です。待ちに待った至高の方です。ですからどうか、お嘆きくださいますな」

幾分ひんやりとした両手が、倫太郎の頬を包んだ。

「あなた様が悲しめば、すべての精霊が涙し、お仕える我らも辛いのです」

エルーザの、キレイな宝石のような青い目が、ゆっくりと微笑みの形に弧を描いた。

「どうか、お心安らかに。その美しいお顔に微笑みをお浮かべくさいませ」

柔らかな唇が、左右の目じりに触れた。

それは先ほどまでの色めいた雰囲気ではなく、まるで母のように、
慈しみに満ちたものだった。

倫太郎は滲んだ涙を、なんとかこぼさずにこらえた。

ここで泣くなんて男じゃない。……………そうだろう？

5 落ちた先1（後書き）

若干解説的な内容ですが^^^；

6 落ちた先2

倫太郎は憂鬱だった。

元の世界に戻れないどころか、生涯女であり続けなければならないなど、冗談じゃない！

かといって、どうしようもないのは明白で、考えれば考えるほど思考は低迷し、陰鬱な気分は深まっていく。

しかも、倫太郎が塞ぎ込んでからずっと連日の雨で。

ジメジメとした気候が、ますます気分を低下させるのだ。

広大な庭を縦断する回廊を歩きながら、ちらり……と後を見てみた。

10人以上の護衛の兵士たちが、倫太郎の足にあわせてゆっくりとした速度で歩いている。

その先頭にいるのは、白衣の腰に剣を佩いた、長身の男。

聖地にはいかなる武器も持ち込めないそうで、あの時は丸腰だったが、本来の彼は武官である。

周囲には慇懃無礼なほど堅苦しい男だが、倫太郎と目が合うとわずかに微笑みかけてくれる。

その、ちよつと特別？ みたいな態度が……寒い。

いや、別に彼が嫌いだとか、そういう事は断じてない。

ただ考えてみてほしい。同性にそんな態度を取られても、困るだけじゃないか！

「ラーグ隊長」

「……はっ」

困惑しながら名前を呼ぶと、ウェルド・ラーグ護衛隊長は素早く傍まで来て片膝を付き、相変わらず響きのいい低音で応えた。

「少し、独りになりたいんですけど……」

生まれも育ちも小市民な倫太郎は、こんなにも大勢の目にさらされて生活した事などなかった。

そりゃあ多少は特殊な家庭だったし、妙な能力を持つてはいたが、こんな……殿さま階級的な扱いなど受けたこともないのだ。

——いや、違うか。『姫さま』だもんなあ……

自分で考えたことに思いっきり傷つき、目じりを下げる。

とたんに、ざああつと雨足が強くなった。

「……分かりました。あちらの東屋でお寛ぎください」

随分束縛された感のある環境だが、これまで倫太郎が希望したことでかなわなかったことは何もない。

周囲は、それはもう我先にと倫太郎の望みをかなえようとするのだ。

恐らくは相当な我俣だつて通つてしまうのだろう。

雨音の激しい東屋で、そのしぶきを肌で感じながら、倫太郎は自嘲気味に思った。

何しろ、存在しなければ困るのだから。

居なくなると、困るのだから。

しかし反面それは、ここに居ればいい……というだけのもの。

つまり、倫太郎には何かしなくてはいけない事や、するべき事が何もないのだ。

ずっとこのまま、ただここに「在る」だけの存在でいなくてはならないのだろうか。

それはちよつと、……いや、かなり寂しい事だった。

これまでは、時期総領にはなれずとも、それなりに次の世代に知識をつなぐ存在になるべく、努力してきた。

一生懸命勉強をすれば、そこそこのいい大学にもいけて、一族の求める道ではないかもしれないが、それなりの大人になれると思ってきたのだ。

それが、全部なかったことになるのか。

そう思うと、情けないが泣けてくる。

実力のある弟にコンプレックスを抱きつつも、自分を慕ってくれ

る相手を可愛く思っていた。

両親も、出来の悪い兄をひと言も責めず、自分のペースでやればいいと、いつも見守ってくれていた。

全部、全部、ここにはない。

もと居た世界に、置いてきてしまった。

倫太郎は、そつと両手で顔を覆った。

．．．．．女々しいな。

姿が変わると、心まで女っぽくなるのだろうか。いや、そもそも自分は、女々しい男だったのかもしれない。

考えれば考えるほど、思考は下向きになる。

跳ねた飛沫がさらりとした生地服の服にかかり、肌に張り付き、濡れていた。

このままずぶ濡れになってしまいたい。

そんな欲求に苛まれ、倫太郎はふらり．．．．．と庭へ降りる階段に踏み出した。

独りになりたいといっても、遠巻きに護衛たちがこちらを見ているのは知っている。

乱心したとか、思われるんだろうな．．．．．

倫太郎はますます自虐的になりながら、美しく整えられた庭に降り立った。

靴越しに感じる、土の感触。

肌に直接当たる、雨の雫。

そつと空を見上げた。

倫太郎の心そのもののようにな、どんよりと重い雲。

ほろり、と涙が頬に伝った。

泣くまい、と思う。

だが反面、死んでしまった自分に、泣いてやってもいいじゃないか．．．．．とも思ふのだ。

無意識のうちに、唇が音を取っていた。

ハミングは、小さく。

雨音に紛れるほどに、小さく。

意外なほどすんなりと、黄金律を掴む感覚があった。

これまでは、かなり長い時間を掛けて音程を探さなければ出来なかったのに。

喉が、静かに膨らむ。

第一声は、自分自身にも聞こえないほどの発露だった。

しかし……倫太郎は、ぽかんと小さく口を開けたまま、立ち尽くした。

——— 今のは何だ？

そつと、喉に手を当ててみる。

瞬間、指先がピリリとするような力の残滓が、確かにそこにあった。

——— まさか……まさか

倫太郎は、震える指を、握り締める。

今になって……一族から、こんなにも遠くに離されて。今頃、どうしてこんな力がここにある？

もちろんそれは、新たな肉体がもたらすものだ。

細く、小さく、か弱く……でかいのは胸と目だけだと思っていた。

まさかこんな力が潜んでいたとは……
確かめなければ。

倫太郎は、ゆっくりと空を見上げた。

——— 沈んでる場合じゃないぞ、俺。

たとえ世界が変わっても。

伝え残すものが、自分にはあるのかもしれない……
それは、ささやかな希望。

元の世界と己とを繋ぐ、小さな絆。

倫太郎は沈んでいた自分に、渴を入れた。

そして、晴れ始めた空を見上げ、遠く引き離された家族を思った。

「あれがそう？」

その少し遠くで、倫太郎を見つめる人影があつた。

「・・・・・・・・はい、間違いありません」

「ふうん・・・・・・・・可愛い子じゃないか」

茶色の髪の毛、整った顔立ちの青年が薄く笑つた。

「偉大なる神の愛し子だなんて・・・・・・・・余の妻に相應しいと思わないか？」

「まさに」

青年の後ろに立つのは、白亜の神殿からは浮きまくっている、黒衣の男。

「何人子供を産んでくれるかな」

「望めば、おそらくは望むだけ」

「・・・・・・・・ふふふ」

ふたりの視線の先で、屈強な神官兵が小柄な娘をくるみ込むようにマントで覆っている。

少女の美しい金色の髪が、差し込んだ太陽の光を浴びてきらきらと輝いていた。

少女は振り仰ぐように神官兵を見上げ、何かを言い。

神官兵が、困惑したように動きを止める。

「あの男、邪魔だ」

「・・・・・・・・はい」

「今夜、引き止めておけ」

「かしこまりました・・・・・・・・皇帝陛下」

青年は、さらりとマントの裾を払い、歩き始めた。

今日は、神殿の最高責任者である神官長との面倒な折衝があつた。これまでは、食えない女狐の相手するのが面倒でたまらなかつたが・・・・・・・・。

一見優しそうな口元が、酷薄に弧を描く。

ようやく具現した神の愛しい子を、教会だけに秘匿させておく気

は全くなかった。

あの美しい少女は、自分のものだ。

自分の傍で微笑み、神の加護の色濃い後継者を産んでもらう。

そうすれば、不穏な動きをみせる各国の抑えにもなるし、いまだにしつこく帝位を狙ってくる異母兄たちへの牽制にもなるだろう。

青年は、くすくすと笑った。

こんなに楽しいのは久しぶりだ、と思いながら……………

6 落ちた先2（後書き）

シリ阿斯？

いや作者的には笑える人の登場なんですが・・・（笑

7 落ちた先3

その夜。

倫太郎は、窓の外を見ていた。

この世界には月がふたつもあって、大きいほうが若干青っぽく、もう片方は白い。

どちらも、倫太郎の見知った月ほどに輝きは強くないが、夜空を大きく切り取った姿は幻想的で、とても美しかった。

ここへ来てから連日の雨だったので、双月を目にするのはこれが初めてだ。

異世界なのだと実感せざるを得ない、見知らぬ月に、見知らぬ星座。

夜空をキャンパスに広がるその情景は、どれだけ見ても見飽きない、心の琴線に触れるものだった。

倫太郎は吸い込まれるような夜空を見上げて、窓に軽く手を押し当てた。

どうして気付かなかったのだろう。

視界を切り替えると、この世界がまとう力の波動が見えてくる。

それはとても強く、ずっと見ていたら酔ってしまいそうなほど。

もといった世界では、感じ取れる力はもっと希薄で、例えるなら消えかかったドライアイスの煙のようなものだった。

それがどうだ。

この、醗酵しそうなほどに濃厚な、世界の力。

引き寄せれば、思うがままに両手の中でたわみ、《言葉》や《律》がなくとも無を有にできそうだ。

倫太郎は、ソクリと背筋を振るわせた。

目の前にある、あまりにも無尽蔵に強大な力は、小市民な彼には過ぎたるものだ。

触れてしまえば、引き返せないような気がする。

いや、むやみに触れてはいけないのかもしれない。

倫太郎はそれでも、誘惑に勝てなかった。

もはや己に残されているのは、佐久間倫太郎としての記憶と、一族伝来の技のみ。

その、わずかに残された絆を、試さずにはいられなかったのだ。ゆっくりと、窓を押す。

カーテンがさあつと揺れて、夜風が室内に吹き込んできた。

世界はこんなにも違うものになってしまつて、いまここに在る肉体ですら借り物なのに。

聞こえてくる小さな虫の声だけは、遠い故郷と同じだった。

倫太郎はそつと、月明かりに照らされたテラスを見回した。

警護の兵士が部屋の外にもいることは分かっている。

だが、邪魔をされたくない。

「くんばんは」

目を凝らすまでもなく、静かに膝をつき、頭を垂れているふたりの兵士の姿が見えた。

「遅くまでご苦労様です」

恐縮したように、更に頭を下げる彼らに向かって、ほんとうに申し訳なく思いながら《技》を仕掛けた。

目くらまし。

元いた世界では唯一得意だといえたものだ。

恐る恐る力を手繰り寄せて、囁くように《言葉》を刻む。

――隠せ、隠せ、隠せ

しかし、本来の《言葉》を刻み終えるより先に、力が発動したのが分かった。

倫太郎は、はつと息を詰め、続く《言葉》を飲み込んだ。

力の残滓が、喉の奥にあった。

癖になりそうな、甘い味がした。

倫太郎は、開いた窓にそつと身体を滑り込ませ、そして後ろ手にパタンと閉める。

心配はしていなかった。

己の身体をとりまいている力が、はつきりと分かるのだ。

そう、兵士たちは倫太郎がそこにいることに気付いていなかった。再び立ち上がり、警護を続ける兵士たちの間を通り抜けて、申しわけない思いで一度、振り返った。

「すぐもどりますから」

もちろん遠出をするつもりはない。

神殿の外の世界のことなど、ほとんどなにも知らないし、この人形のような肉体がどのような目で見られるかなど、元男として分かりすぎるほど分かっていたから。

自分で自分の身を守れると確信できるまで、ここから出て行く度胸はない。

そつとテラスを走り、少し先の階段を降りようとして、倫太郎はようやく、自分が裸足だということに思い至った。

準備の甘い自分に苦笑しながら、構わずそのまま土の上に足を踏み出した。

「…………お出かけですか？」

まさか、思いもしなかった。

発動した術をかくぐって、倫太郎を見ることができる人間が存在するなど。

はっとして振り返ると、テラスにひとりの男がいた。

すぐに、気付いた。

その男の、目に宿る魔力に。

「とても面白いイタズラをなさっていますね？」

もと居た世界でも、ごく少数ではあるが、佐久間の力と似たような異能を持つ一族はいた。

しかし、お互いに極力関わらないようにしてきたから、こうやって一族以外の能力者と鉢合わせするのは初めてだった。

ラーグが言っていた、「魔法」という言葉を思い出す。

そうか、この世界では、一族のような存在は珍しいものではない

のか。

倫太郎は、今さらながらに己の認識の甘さを悟った。
だがまだ間に合う。

出てきた部屋は、すぐそこ。

全速力で走れば、あの安全な空間に戻る。

倫太郎は、無意識のうちに数歩、後ろに下がった。

肌でひしひしと感じるのだ。

この男の、危険さを。

月明かりの下で微笑む顔は、すこぶる整っている。

ジャニーズ系とも言おうか、朗らかな笑みが秀麗な貌をますます魅力的に彩り、さぞ女性受けがいいのだろうと、妬み半分で思わざるを得ない、男前。

だが、その目が。

—— ななな何だよ。

じっと、瞬きもせずに見つめられ、穴が開きそうだった。

優しい風貌にまず視線が行くが、その双眸は見るからに笑っていないくて、魔力を含んでますます得体が知れない、恐ろしい雰囲気をかもし出す。

—— こ、怖いって！

草食動物の本能的なセンサーが、危ない相手を察知して、しきりと警報を鳴らしていた。

そんな倫太郎に向かって、男はもう一度、にっこりと笑った。

「本当に、とても美しい……私の薔薇」

倫太郎は、甘くとろけるような男の声に、目をますます大きく見開いた。

「すぐにも手折って、我がものにしてみたいですね……美しいひと」

—— ひいっ！

思わず、倫太郎の喉が鳴った。

さわやか系男子から、思いもかけぬ濃厚フェロモンを投げつけら

れ、蛇に睨まれた蛙のように動けなくなる。

「その白磁の如き麗しい素肌に、黄金の髪が落ちるさまを見てみたい。我が腕の中で、かわいらしく啼く貴女を、存分に愛したい」

—— いやいやいやいや！

思いつきり、首を左右に振った。

それだけでは誤解されるかもしれないので、両手もつけて。

—— 遠慮します！ それはもう、全力で！！！！

「恥ずかしがらないでください、美しいひと」

「美しいひと」という言葉は、この世界では女性に対する基本的な呼称らしいのだが、今ほどそこに、セクシャルな意味を感じたことはなかった。

「その柔らかな肌に、私の刻印を刻ませて」

—— いやーだあ~~~~っ！！

思いつきり、鳥肌が立った。

これまで、正面切って男に口説かれたことなどなかったが、こんなに心身にダメージを感じるものだとは思ってもいなかった。

全身の毛穴がブツブツになるほど震え上がっていると、いつの間にか、そいつはテラスを降りてきていた。

ち、近い！

数歩の距離まで迫られて、無意識に身体が逃げようとした。

「……怖いのですか？」

腕を掴まれて、距離が更に縮まる。

「私は優しい男ですよ、愛しいひと」

間近に迫った男の双眸が、うつすらと弧を描いた。

琥珀色の、目。

魔力を帯びたその瞳が、一際強く輝きを増した。

—— うあ、ヤバっ！

身を守るべく、防御の術を形成する間もなかった。
とたんに暗転する意識。

倫太郎はガクリと、膝を折った。

7 落ちた先3（後書き）

お間抜け主人公。

8 落ちた先4

崩れ落ちた華奢な身体を、抱きとめる。

腕にこぢんまりと収まる身体は、夜着越しにほんのりと温かく。

青年は、瞼を閉ざした美しい貌にじつと見入った。

手のひらで覆えそうなほど小さな顔に、寸分たがわぬシンメトリ
―で目鼻口が配されている。

その、奇跡のように、可憐な造形。

腕にさらりと掛かる黄金色の髪は、月明かりを反射して眩しいほどで。

どのような天才的芸術家であっても、これほどの美を表現するのは難しいだろう。

「……………陛下」

背後から、腹心の魔道士の声がする。

気配はまったくくないが、その影が足元に長く伸びていた。

「これ以上の足止めは無理です。早く立ち去らねば厄介なことに……………」

そしてその影も、美しい乙女の姿を目にして息を飲んだ。

黒衣をまとっているとはいえ、魔道士の力も神を抛り所に行っている。

大いなる主神の愛し子を間近にして、畏れを抱かずにはいられない。

「御子は、力を使っていた。姿を精霊の間に紛らわせるような……………余の目にも、幾分ばやけて見えるほどだ。やはり連れて行くのはあそこしかない」

「……………しかし」

「ああ、すぐにはれるだろうな。あの女なら、正面切って返せと言つて来るだろう。その前に……………御子を籠絡するぞ」

これまで主の言葉に絶対服従を貫いてき腹心が、闇の中で言葉に

詰まった。それは、とても珍しいことだった。

「ですが、神の愛し子に無理強いをすれば……………」

「美しい絹を着せ、湯と香油で磨きたて……………夜毎に寵愛を授ければ、女の心など他愛無いもの」

青年は、にいつと唇を歪め、腕の中の少女に向かって艶やかに微笑みかけた。

「正式な妻にすれば、問題はなかるう？」

魔道士の戸惑いなど知らぬ氣に、青年は歩き始めた。

迷いのない足取り。

やがて、青年の行く先に、人の手による抜け道が刻まれる。

それは、神殿の内部に入り込んだ者にしか作れない、外部へと続くピンポイントの抜け穴だった。

時間にして、数秒。

青年は、すり抜けるようにその空間に入った。

彼のマントが冷えた風に靡くのが見え……………同時に、道は閉ざされた。

見送った魔道士は、なおもしばらくその場所に立ち尽くしていたが、やがて小さく首を振った。

「……………すべては陛下の御心のままに」

まるで、自分自身に言い聞かせるようなつぶやきだった。

あの方が、いない。

氣が付いた瞬間、全身から血の氣が引いた。

ウェルド・ラーグは無人の室内を見回し、その事実を噛み締め。同じく真っ青になっている護衛の責任者に向き直った。

「……………どういうことだ」

「も、もうしわけ」

「何があった」

結論を言えば、何もなかった。

物音も、声も。護衛たちが心配するようなことは、まったく聞こえてこなかったのだ。

それどころか、事態が発覚してもなお、部屋の主が不在だということが信じられない。

護衛たちは、確かめるように室内を探した。

あの小さく美しい方は、どこを探してもいなかった。
消えてしまった。

法术を駆使して幾重にも張られた守りには、何の異変もないというのに……

「ウエルド・ラーグ！」

「………猊下」

法衣をはためかせながら、彼女らしくない荒い足取りで駆けて来る。

深夜にもかかわらず仕事をしていたのだろう、傍には典儀長の姿まであった。

「いらつしやらないというのは本当か？」

ラーグと同じく、無言のまま室内を見てまわる神官長に代わって、気難しい顔のラインサム典儀長が問うて来た。

そして彼自身も、眉間のしわを更に深くしながらあちこち見回している。

「………おかしいわ。痕跡がまるでない」

戻って来たエルーザ・ラセラン神官長が、血の気の薄い顔で言った。

「まさか、天に還られたなどということは………」

「だったら良いのです。あの方に危険が及ぶのでなければ」

その場に居るものは、皆一斉に、あの美しい方に襲い掛かる「危険」を予測した。

ラーグは、全身から脂汗がにじむのを感じた。

これほどの恐怖を覚えたことは、かつてなかった。

見上げてくる、無垢で、穏やかで、美しい翠色をした大きな双眸。

淡く色づいた、小さな唇。

抜けるように白い肌、黄金そのもののような、豪奢な御髪。

あの、小さく、かわいらしく、奇跡のように美しい方が……

・不敬にも、無残に男に散らされる姿を想像してしまったのだ。

全身の華奢さに反して、女性らしい豊かなふくらみを驚？みにさ

れ、あの白くすらりと伸びた細い足を強引に開かされて……

あつてはならないその事態に、思考が沸き立った。

誰もが同じような想像をしたことは、全員の気配が一気に粟立つ

たことから明白だ。

「……心当たりはあるわ」

神官長が、額に青筋を浮かべながら言った。

「一刻を争います。すぐに手を打ちましょう」

普段は温厚で、にこやかな笑みを絶やさぬ女性なのだが。

こんなにも毅然とした声を上げるのを、久しぶりに聞いた。

「ウエルド・ラーグ。貴方を今ただいまを持って將軍位に復職させ

ます……苦情は聞きません。あのお方の守護者の地位を、ほ

かの者に譲る気はないでしょう？」

「……は」

「各軍から200名ずつの尖鋭を出し、あの方の禁軍とします」

ラーグは静かに胸に手を置き、承諾の意を込め頭を垂れた・

「動かせる全軍を、トルタ帝国の王宮へ」

この大陸で、もつとも強大な軍事を有する覇王の国。

普通なら、絶対に敵には回したくはない大国だ。

治外法権である神殿にさえ、多大な発言力と影響力を有し、下手

をすると神官長の首ごと挿げ替えることすら可能かもしれない。

そんな、巨大な国の、本拠地とも言える王の御座所。

しかしラセラン神官長は、矛先を向けることを躊躇わなかった。

「……あの方を、取り戻します」

恐らくは、わかつていたのだ。

帝国の若き皇帝が、あの方を欲することぐらい……

真っ白な法衣を翻し、足早に執務室へと戻り始めたラセラン神官長のあとに、こちらも怒りを露にしたラインサム典儀長が続く。

ラーグはゆっくりと顔を上げ、細かな話を詰めるべく、ふたりの後に従った。

時間がない。

一秒とて惜しい。

あの美しい花を、守るために。

皆の思いは、ひとつだった。

8 落ちた先4（後書き）

入れるかどうか迷ったシーンです。
もともとは、前回の続きは次回分でした。
飛ばされても全く問題なし^^;

9 じじ、どじ？1

いい匂いがした。

花のような、甘い匂い。

ちやぷりと水が動く音。

全身を撫でる、優しい感覚。

「本当にかわいらしい方」

「そうね、磨き甲斐があるわ」

遠くで、若い女の声が聞こえた。

倫太郎はそれを、従姉妹たちの声だと認識した。

「見て、この御髪」

「それに、このお肌！」

優しい手が、そつと髪を梳る。

背中を撫でていた手が、うつぶせの身体の下に潜り込む。

他人の手が、身体のきわどいところに触れた。

「・・・・・・・・ん」

「いや〜ん、なんだか食べちゃいたい感じ？」

「こんなに美しいかた、陛下はどこから見つけていらしたんでしょうね」

「きつと今夜は・・・・・・・・ふふふっ」

「たぶん今夜だけじゃないわよ。御方々が地団駄踏んで悔しがる姿が目に見えちゃう」

とろり・・・・・・・・としたものが背中に落とされた。

複数の手が、ゆっくりと全身にそれを塗り広げていく。

花のような匂いはますます濃厚に、甘く香りたった。

「最近、陛下のお渡りがないから荒れちゃって・・・・・・・・怖いのよね」

「この方、大丈夫かしら」

「・・・・・・・・なんだか、お守りしなくっちゃって感じしない？」

「するする」

背中をなでまわり、腕に、足に、遠慮のない触り方で、触れられていく。

その濡れたような、滑るような感覚は、倫太郎の深層心理によからぬ……そう、若い男性としては当然の、性的な影響を及ぼしていた。

ただし、それが明確な形を持っていたわけではない。

何しろ今の倫太郎には男性としての機能はないのだ。

しかし、意識が浮上してくるにつれ、どうにもモゾモゾと、違和感というか、くすぐったさというか、膝と膝とを擦り付けたい気分になってきて……

「……お目覚めですか？」

小さく身じろぐと、耳元で息を飲む気配がして、やがて丁寧な言葉で話し掛けられた。

倫太郎はまだ幾分ぼんやりとした目を瞬かせ、視界の中で優雅に礼をとる二人をじっと見た。

そこにいるのは、幼い頃から良く見知った、賑やかで容赦ない従姉妹たちではなかった。

見知らぬ人物だと認識するのと同時に、彼女たちが、素っ裸といってもいいほどの格好だということにはじめて気付いた。

「……わっ！」

慌てて飛び起き、身構えようとして、お尻の下がヌルリと滑る異様な感覚に凍りついた。

「なっ、な、な、な……」

なんだこりゃあっ！！

心情的にはそう叫びたいところだった。

倫太郎が寝転んでいたのは、しつとりと温かい一枚岩の上。

顔が映るほどに磨かれた平らな部分には、倫太郎の身体にくまなく塗られた、ぬるぬるとする液体がしとどに零れ落ちている。

しかも、全裸。

呆然と見下ろした身体は、あろうことか一枚の下着すらも身に着けていなかったのだ。

健全な男子高校生である倫太郎の脳裏には、即座に工口的あれやこれやが過ぎったが、不思議そうに小首を傾げる二人の少女を目の前にして、さすがにそれを口にするのは躊躇われた。

彼女たちは、倫太郎よりもずっとずっと年下だった。

スケスケの薄絹一枚をまとい、足も手もむき出しで、目のやり場に困るほどしどけなく襟元を広げているが、その胸はまだほとんど平らで、肩も腰も子供の華奢さを色濃く残している。

恐らくは、小学校の3・4年生といった年頃だろう。

「もう少し、横になっていてください」

「美しいお肌を更にもっと、光り輝かんばかりに磨かせて頂きますわ。きつと陛下にもご満足頂けます」

「御寵愛を授かり、きつと健やかな御子に恵まれますよ」

「さあ、わたくしたちにお任せください」

「さあ、こちらに横になって」

「香油をもっと足しましょうね」

「おみ足にはペディキュアをしましょう。きつと赤い色がお似合いです」

「駄目よ、ピンクよ」

「あの薔薇色はどうかしら」

「ちよ、ちよっと待って！」

小さな女の子に押し倒されて、倫太郎はすってん！と後ろ向きに転がった。

身体の下ヌルヌルした液体のすべりも借りて、頭が半分ほど岩の寝台から飛び出す。

拳句の果ては、足首をつかまれて、持ち上げられた。

そうすると、素っ裸なので必然的に足の付け根が開かれる形になつて……

倫太郎は、呆然と目を見開いた。

まさか、年端の行かぬ少女たちに、局部を見られるとは思って
いなかった。

髪と同じ黄金色の下生えが、ろっそくの淡い輝きにテラテラと光
っている。

もちろん光っているのは自分の陰毛だ。何かよくわからない液体
が、少し縮れた柔らかい毛に絡み、淫靡な色に染まっていた。

なんというか………エロい。

エロ過ぎるだろう!!

倫太郎は、カーツと全身を朱色に染め上げた。

恥ずかしい!

恥ずかし過ぎるぞっ!!

そこには、本能であるはずだと思うモノはない。

しかしもしあったなら、もっと恥ずかしくて居たたまれない気持
ちになっただろう。

それほどに、きょとんとした二人の少女はいたい気に見えた。

オトナな状態にある男の股間など、見せていい年ではない。

……いや、そういうえば男じゃなかったよな。

局部を空気にさらしたまま、倫太郎は現実逃避した。

同時にガツカリしたのを大急ぎで拒否して、慌てて太ももを閉ざ
す。

「あ、あの!」

「はい?」

「は、恥ずかしいので何か着るものを……!」

足首をつかまれたまま、倫太郎は何とか膝と膝とをあわせ、上半
身を起こした。

「………? ですが、お手入れの途中ですよ」

「香油がお肌に馴染むまで、まだ………」

「だ、駄目!」

「………??」

不思議そうな少女たちは、二人ともそろって同じ向きに小首を傾

げた。

よく見れば、双子のようによく似た容姿をしていた。

二人とも耳の下でパツリと切りそろえた髪型で、薄絹も首飾りも何もかもお揃い、年齢の割に濃い目の化粧が、ますます類似性を強調している。

「も、もういいです」

倫太郎は、その先に続けるべき言葉を思いつけず、情けなくもモジモジと口ごもり、そろそろと手で隠すべきところを隠そうとした。
「……………」

「か？」

「かわいいいいいっ！！！」

「ひいっ」

倫太郎は、二人の少女たちに一斉に飛び掛られ、ひきつった悲鳴を上げた。

「なにこれ！ ヤバイ！ めちゃカワイイっ」

岩の寝台の上で、ヌルヌルした身体に、柔らかい少女たちの肉体がこれでもかとしがみついて来る。

「どうしようっ！ 食べちゃいたいっ！！」

「いやーん」

ぐりぐりと、擦り寄ってくる身体は確かに幼い。

しかし、ぬるぬると滑る感触や、時折見えるほのかな膨らみ、間近で上気した愛らしい顔立ちが、正常な男子である倫太郎をイケナイ気分にするに十分なものだった。

「いやいや駄目だって、自分っ！！！」

倫太郎は、慌てて二人を引き剥がそうとした。

その手がぬるりと滑って、あらぬところに触れそうになり、慌てて万歳の形で固まる。

「もう全部全部磨いちゃいます！！」

「つつつつるのぴかっぴかにしちゃいますっ！」

一瞬ふたりが離れた隙を狙って、倫太郎は急いで身体の向きを変

え、逃げようとした。

その腕を、亜麻色の髪の少女が掴み。

ばたついた足を、焦げ茶の髪の方が引っ張る。

頭半分飛び出していた身体を、岩の寝台の真ん中まで引き戻されて。

倫太郎は、人生最大の試練を迎えた。

文字通り、身体の隅々まであの液体を塗りたくられ、もみ回され。
……その詳細は、泣きたくなるので秘密だ。

9 じゃ、どっ？1（後書き）

更新遅くなってスイマセン！>< 肺炎で寝込んでおりました。今回の更新分、なんだかアヤシイ雰囲気ですが、あくまでもお話の一片ですので勘弁を。

あの湯殿のような、岩盤浴場のような場所からようやく出ることを許され、長い長い廊下を歩く。

身にまとっているのは、男の夢！のようなスケスケの服。

ひとりで着ると言われても絶対に無理だが、着ている意味があるのかと疑問に感じるほどに、見事にシースルーだ。

ほとんど透け放題な衣服に、居心地悪いことこの上ない気持ちで、倫太郎は溜息を付いた。

足は素足だ。

床は柔らかいカーペットのようなものが敷かれているので問題はないが、左右の少女たちはきちんと履いているところを見ると、本来は靴で歩くものなのだろう。

良くない予感がしていた。

というより、それ以外ないだろう？

これから連れて行かれる先を思って、再び溜息をついた。

ここは恐らく、後宮だ。

回廊のあちらこちらから値踏みするような視線と、憎悪の眼差しを感じる。

いや、マジ勘弁してって。

倫太郎は、どうにかここから逃げ出せないかと、隙をうかがっていた。

しかし、左右を少女に固められ、こうも多数の目にさらされると、隙以前の問題で、行動ひとつとっても制限される。

落ちてきた髪を後に払うと、ざわざわわ……

広がってきた襟元を整えようとすると、ひそひそひそ……

一挙一動を口やかましく見張られているようで、どうにも居心地が悪い。

「ご心配なく、麗しき黄金の姫君。皆、嫉妬しているだけです」

「そうですね、姫さまがあまりにもお美しいので、目がつぶれそうなのに違いありません」

「……いや、煽るのはヤメテほしいんだけども。

たちまち、視線が刺すように険しくなり、倫太郎は溜息をついた。問題は、友好的とはとてもいえない視線だけではない。

この場所は、おかしいのだ。

周囲にあの、濃厚な気配がない。

ねっとり重いほどの、溢れる力を感じない。

それが、神殿の外にいるからなのか、この場所の特異性なのかはわからない。

倫太郎にとっては、むしろかつての世界を思わせる、希薄な空気。試しに小声で〈真の言葉〉を唱えてみても、明り取りのろうそくはわずかに揺らぐだけだった。

ただし、完全に無効というわけではない。

簡単に黄金律を掴むこの喉が、わずかに音を手繰り寄せるだけで、左右の少女たちは知らず動きを止めた。

このことを気付かれる前にと呪縛を解いたが、なんの不審も抱かれなかったようだ。

倫太郎は、その間に入手した刃物に、こつそりと思いを馳せた。

先に待っているのが想像通りの場所ならば、周囲の視線を気にすることなく、行動を起こせるだろう。

いくら力の気配が希薄だとはいえ、このナイフを媒介にすれば、術のひとつぐらい行使できる。

倫太郎は樂觀していたのだ。

一対一ならなんとかなる………と。

恐らくは、この後宮の主の寝所に連れて行かれるのだろう。

元々男である倫太郎には、まだ自分が女であるという認識、性的に何かをされるという認識が甘い。

男に抱かれるなど想像外で、予想はできても実感ができないのだ。ただ、監視の目が減るだろう………と思っていた。

逃げ出す隙があるとすれば、その時だ……と。

「さあ、あちらです」

「陛下が首を長くしてお待ちです」

左右でステレオのように少女たちが言う。

倫太郎はもう一度溜息をついて、たえわずかなチャンスでも逃すまいと、目を眇めた。

そして、真つ赤な緞帳のようなカーテンの向うに、巨大な巨大な扉が見えた。

女の細腕では、とても開けそうにない、金属製の扉。そのカーテンの陰に、4体の巨大な鎧が立っていた。

博物館でも見たこともないような、中世の西洋を思わせる全身鎧。少女たちの合図で一斉に動き出すまで、倫太郎はそれらが飾り物だと思っていた。

音もなく滑らかな動きで、巨大な鎧が動く。

倫太郎はぎょつと足を止め、彼らが4人がかりで押し開いた扉の前で立ち尽くした。

「……さあ、姫さま」

「王妃の間へのご招聘、おめでとうございます」

「首尾よく子種を頂戴してくださいね」

「ご幸運を……」

「……え？ちよつと」

そつと背中を押され、よろよろと足を踏み出し。

2、3歩行つた先で振り返ると、巨大な扉は再び閉ざされようとしていた。

「あ、あのー！」

廊下で深々と頭を下げている二人に、置いていかれる心細さで声を掛けたが、少女たちは視線ひとつよこさず、そのまま扉は閉まつてしまった。

「あ……」

「こちらへ」

ズシン、と重い音を立てて閉まった扉を呆然と見てみると、背後から艶やかな声がした。

飛び上がらんばかりに驚いて振り返ると、背の高い、見たこともないほど美しいひとが立っていた。

——うわ

自分がチビ過ぎるのか、首が痛くなるほど見上げなくてはならない。

その一点をのぞけば、ありえないほどの美貌だった。

——き、キレイなひとだ。

呆然と見上げていると、彼女は「おや？」という風に小首を傾げ、その角度にまたうつとりする。

自分があからさま過ぎる凝視をしていたことに気付き、ときまぎと視線を逸らすと、小さく笑う声がした。

「かわいらしい方ですね」

その声に、ちよつと違和感があった。

まさか？　と思いおずおずと顔を上げると、緩やかに弧を描く灰色の双眸とぶつかった。

確かに、背が高い。

女性にしては、がっしりしているかもしれない。

その服装はドレスと違っていいもので、化粧もしているし、長い髪を複雑に結つてもいる。

簡素だが趣味の良い装飾品に飾られ、たおやかに微笑む姿は、ひとつの完成された美に他ならず……

「お、お」

びっくりした。

あまりに驚いたので、思ったことをそのまま口にしそうになった。慌てて両手で唇を押さえると、くすりと笑われた。

このひとは、男性だ。

なのにどうして女の格好をしているのだろう。

骨格もしっかり男のもの。垣間見える白い喉元には、喉仏も見え

る。

それを隠そうとしているわけではなく、女性の格好をしているのが当たり前のような顔をしていた。

倫太郎は、知らなかったのだ。

女性の数が全人口の10分の1だという、その実態を……そう、後宮にいる「女性」の多くは、生まれたときは男として生を受けていた。

妻として子を産むことを期待される者……つまりはお手つきになる可能性のある者以外は、ほとんどが見目麗しい男性なのだ。

もちろんここは後宮なので、彼らの男性機能があつては血統問題が起こりかねない。

なので、後宮に入る前に去勢される。

男子として背筋がぞつとするような言葉だが、倫太郎が考えるような、ナニを切り落とすとかいう野蛮なものではなく、薬とかちよつとした外科手術とか魔法とかで処置をするらしい。

後宮に入る前に子種がなくなる処置を受け、職を辞するときには元に戻るらしいので、良心的といえば良心的なのかもしれないが……あまり詳しいことは知りたくない。

「さあ、こちらです」

彼女？……いや、彼が滑らかな動作で倫太郎の手を取った。ゆつくりと、しかし確実な強さで腕を引かれて、倫太郎はよろめくように足を進めた。

そこは、広大な部屋だった。

いや、はたして部屋といえるのか？

学校の教室3つ4つ分はありそうな、だだっ広い空間は、部屋というより広間だ。

身体が軽く沈むほどの分厚い絨毯と、きらびやかな内装。カーテンの金糸交じりの刺繍や、壁の細工の細やかさなど、どれを取ってみても豪華絢爛。

しかし、ここまで広いと閑散とした印象は拭えず、倫太郎は「一族で宴会ができそう……」などと、間抜けなことを考えていた。

腕を引かれ、どこに行くのかと思っていたら、部屋の真ん中に薄いカーテンで覆われた一角があった。

この世界では、天蓋付きのベッドというのが標準なのか？

倫太郎は、どうにも拭えない違和感とともに思う。

そもそも、生まれてからずっと布団派なので、柔らかいベッドそのものが好きではないのだ。

更に、睡眠をとるためにカーテンの襞を掻き分けていくなど、合理的とは到底思えない。

そんな余計なことを考えていた倫太郎だが、気配も無く膝を折った女官たちカーテンを横に避け、内部の臥所を露にすると、さすがに生々しいものを感じて足が止まった。

思わず表情が強張る。

予想はしていた。

この後宮の主の閨に、招かれるのだろうか。

しかし、その漠然とした想像と、目の前にある現実とは大いに別ものだった。

「やあ、ようこそ」

臥所には、男が居た。

バスローブのようなものを身にまとい………というか、前をあわせていないので殆ど全裸と変わらない状態で、にこりと笑うのはあのときの青年。

「……………」

無意識のうちに、その全身をざっと眺め、最後にはしっかりと股間まで見てしまった。

いやだって……………ねえ。

さっと視線をあさつての方向に向けると、くすくすと笑う声が聞こえた。

「ほんとうに・・・可愛らしい方だ」

うちの家族全員でも寝れそうな巨大なベッドの中央から、青年は優美な手を伸ばした。

「さあ・・・いらっしやい」

と、言われても、どうすればいいのかわからなかった。

いや、彼が言っていることはわかる。何を望まれているのかも。

しかし、従順にそれを聞いてやる義理はないだろう？

どうしよう・・・と、立ち尽くしていると、あのドレスを着た綺麗な男に肩を掴まれた。

「・・・ごゆるりと」

しつとりと艶のある声が、耳元で響いた。

と、思った瞬間、そのままベッドの上に放り投げられた。

ら、乱暴な！！

顔に似合わぬ強引さで押されて、倫太郎は顔からシーツの中にダイブした。

文句を言おうとしたのだが、あまりにもふかふかのベッドに腕を取られ、身体を起こすのに手間取った。

そうするうちに、カーテンは綺麗に閉ざされてしまう。

ふっと、ベッドの周囲の明かりが消えた。

しかし、どこが光源かわからないが、天蓋の内側はダウンライト風に明るい。

こ、これはムードある演出とかいうやつなんだろうか・・・馬鹿なことを考えながらも、背中に冷や汗が流れた。ゆつくりと、青年が近づいてくる。

倫太郎は、その気配にギクリと身体を強張らせた。

言葉は無くとも、伝わってくる気配が濃厚にオスの色を発している。

小柄な今の身体では、優男の体躯ですら大きく感じた。覆いかぶさるように、にこやかで優しげな表情の青年が身体を寄せてくる。

オレンジ色のライトに、琥珀色の双眸がきらりと光った。それは、あまりお近づきになりたくない獰猛な色だった。

一瞬、その淫気をまとった眼差しに吞まれ、次にするべき行動を忘れた。

ええっと、どうするんだったか……そうか。

一瞬迷って、腹の部分に隠しておいたナイフの柄を握った。

実際のところ、この細腕でできることは少ない。

男女の力の差もあるだろうが、もともと倫太郎は、他人を傷つけることがあまり得意ではないのだ。

ウチの鬼の従姉妹たちだったら、容赦なく腸はわたかつさばきそうだけど……

倫太郎が、胸元の合わせからゆっくりと取り出したナイフを見て、青年は「おやおや」と眉を上げた。

「どこからそんなものを……お怪我をしますよ、愛しいひと」

「いや、俺はあんたの愛しいひとじゃないし」

可愛らしい唇の、可愛らしい声で紡ぐのは、やっぱり男言葉。

それを聞いた青年は少し首をかしげたが、深くは悩まず薄く笑った。

「そんなナイフ一本で、何ができます？」

「……うん、やったことないし、やりたくもないんだけど」

ぶつぶつ呟きながら、倫太郎はその細い眉を下げた。

やり方はわかってる。

やれるだろう、とも思う。

問題は……度胸だ。

「さあ、そんな無粋なものは貴女の腕には不似合いですよ」

「ああああ、やっぱり痛いのだよなあ」

でもなあ。

仕方ないよなあ。

倫太郎は、淡いオレンジ色の明かりの中で、申し訳なく思いながら青年と対した。

「……………」

「ほんと、悪いな」

「は？」

「うーん、俺も一応元男だからさ、わかるよ……その気にな
ってるのにできないって、結構つらいよなあ」

「……………」

青年の琥珀色の眼差しが、若干の困惑を浮かべた。

「……………ごめんな？」

しゅっと、ナイフの切っ先が動いた。

「何を！」

青年が動けなかったのは、最初にナイフが切り裂いたのが倫太郎
自身の手のひらだったからだ。

銀色の弧を描き、ナイフが踊る。

「……………ッ」

次の瞬間、青年の喉仏に、ナイフの先が食い込んでいた。

「あ、間違えた」

倫太郎の血まみれの白い指が、青年の首の後ろを掴む。

「違うだろ、俺」

喉を浅く切り裂いていた切っ先が、今度は正確に心臓の真上を横
切った。

「いや、ごめんごめん。余計な傷つくっちゃって」

耳元で、小さな声で囁く。

まるで、睦言のように。

カーテンの向うに誰かが控えていれば、さすがに邪魔がはいるだ
ろう。

その、寸前のタイミングで。

鮮血の滴る手のひらを首からするりと外して、横一文字に赤い筋
の入った青年の胸に押し当てた。

天蓋の向うから、尋常ではない雰囲気慌てる気配がする。

何人もの手が、幾重にも重なったカーテンを掻き分ける。

だから、ベッドに天蓋なんて邪魔なだけだろ？

倫太郎は、小さく笑った。

目の前の琥珀色の双眸が、驚愕の色を受けて見開かれる。
その奥の深い部分に向かって、喉の奥で言霊を練った。

「――従属せよ」

ピシリ。

空気が、凍った。

12 じゃ、どう？4

「陛下っ！」

左右に捌かれたカーテンから、あの女装の男が飛び込んできた。手には、剥き出しの長い剣。

恐らく彼は、倫太郎が抱きついている男の護衛なのだろう。

先ほどベッドの横に控えていた女官の二人も、短い刀を油断無く構えて切っ先をこちらに向けている。

白いシャツの上に散る鮮血に、息を飲み。

彼らは一斉に、倫太郎に向かって刀を振り上げた。

「……ッ！！」

まったくもって荒事が苦手な倫太郎は、とっさに目を閉じて身を硬くした。

いや、マジで殺されるかと思った。

多少特殊な技能を持つてはいたが、平和な日本で生まれ育った、典型的ないまどきの若者なのだ。

武術の心得などないし、殴り合いの喧嘩だつてしたことはない。冷静であれば、少しは防御の陣を纏えたかもしれないが、とつさのことに身を守る術はなかった。

「………？」

しかし、いくら待っても怖れていた衝撃はなく。

気が付けば、男の腕に抱きこまれ、ベッドの上に仰向けに寝転がっていた。

「あれ？」

目を開けると、青年の整った顔が間近にあった。

長めの茶色い髪が、倫太郎の頬に当たっていた。

その顔は倫太郎ではなく、宿敵を見据えるように真正面を向き。

琥珀色の双眸が、オレンジ色の明かりを受けて油断なく底光りしている。

「…………陛下？」

しばらくして、低い男の声が訝しげに問うた。

倫太郎が持っていたナイフは、いつのまにか青年の腕にあり。

彼は、己を助けに来たはずのお付きたちに、その銀色の刃を向けていたのだ。

「…………下がれ、無礼者が」

青年の琥珀色の目は、紛うことなき怒りを込めて、倫太郎ではなく、彼を排除しようとした者たちを睨み据えていた。

「し、しかし陛下、お怪我を……………」

「無用」

青年は、周囲の目から倫太郎をかばうように身体的位置を変え、それはもう、明瞭な激怒の雰囲気を書き換えながら言い放った。

「ようも我が姫に剣を向けたな、慮外者」

しばらく、状況がわからず固まっていた倫太郎だが、どうやらすぐに殺されることはなさそうだと、ほっと安堵の息を吐き出した。

「今すぐここで腹を掻け。死んで詫びろ」

「……………って、待てよ」

しかし安心するのはまだ早く、青年は怒りのままにナイフを振り上げ、あの女装した男に切り付けようとしていた。

薄い水色のドレスを纏った男は、長い無骨な剣を握り締めたまま、身を守るそぶりもせず呆然としている。

「待てつて!!」

倫太郎は、無防備にこちらを向いていた青年の背中を、思いっきり素足で蹴った。

「……………」

「……………あ、ごめん」

……………つい？

唖然とした一同の視線が、倫太郎に集まった。

そのあまりにも「驚愕^{びっくり}！」という感じの凝視に、小心者の日本男児は思わず「へらり」と愛想笑いをしながら、上目遣いに小首を傾げ

てみた。

男のままだと微妙な感じだが、今の容姿ならちよつとは有効かと思つたのだが……

あまりにも長い間、沈黙が続いた。

倫太郎は、振り上げたままの足を、そろそろと下ろした。

足を上げたことにより、スケスケの服の裾が大きく乱れている。

今さらだがそれに羞恥を覚え、隠そうとして。

素早く振り返つた青年が、ぎよつとするほど丁寧に整えてくれた。

倫太郎は思わず息を詰め、整つた青年の顔を見上げた。

何故なら、素足に触れそうで触れない彼の指は、かすかに震えていたのだ。

白いシャツに散る血の色に気付き、ますます顔色を悪くして。

青年は整つた唇をきつく噛み締め、そつと、まるで壊れ物を扱うように倫太郎の手を取つた。

「匙を呼べ」

「……は？」

「匙だ！」

「は、はいっ」

倫太郎は、細かく震える青年の様子を、じつくりと観察した。

従属の呪が正しく行使されると、対象者は術者に敵対したいとは思わなくなる。

正確には、命令に背きたくない。こちらに害になる行為をしたくない。

絶対服従を強いるものではないので、逆らえないということはないのだが、無意識がそれを否とするのだ。

だが、目の前の青年の態度は、倫太郎が期待したものを大きく凌駕した。

顔色が悪い。

震えが止まらない。

これは、彼の本能と呪が拮抗しているためだろうか？ ……

いや。

「ごめんね？」

高そうなシャツで、まだ血が止まらない手のひらの傷を押さえていた青年が、倫太郎の言葉にギクリとした。

「うん、本当に……ごめん」

あんなにも恐ろしげだった彼が、倫太郎の顔をまっすぐに見ることもできない。

呪が、強すぎるのだ。

目の奥を見据えて掛けた術が、青年の精神をひどく圧迫している。きつと恐慌状態にちがいなかった。

倫太郎は、やんわりと青年の手を押した。

いくらなんでも、これはやりすぎだった。

「こつちを見て？ そう……大丈夫。もう痛くないから」
言っていて、周囲の女官が声も無く悲鳴を上げたのがわかった。

倫太郎は、内心「あれ？」と思いながらも、青年の柔らかい髪を漉くようにして、その耳を塞いだ。

「痛い、嫌いだよ。うん」

琥珀色の美しい双眸の奥に、その精神を狭める銀色の枷が見えた。それはキラキラと光りながら、螺旋を描いて琥珀色の輝きを締め上げている。

とても美しいとは思ったが、聞こえてくる悲鳴は耳を塞ぎたくないほどで。

倫太郎は慎重に、その枷の締め付けを緩めた。

「完全には、消さない。……少なくとも、半日は」

「余を……どうするつもりだ」

しっかりと手綱を握りながらも、息がつける程度には呪縛を緩めて。

ようやく、青年は倫太郎の顔を見た。

その目に暗く輝くのは、憎悪か？

何者にも膝を折らない帝王の、果てしなく高いプライドを傷つけ

てしまった倫太郎は、まったくそんなことに気付きもせず、琥珀色の目の奥に苦痛が無くなったことを確認し、ほっと安堵の息をつく。「どうって……どうするんだろっ」

とりあえず貞操の危機は回避したぞ、と安心していただけだが、事はそんな単純なものではない。

皇帝の住まいの最奥で、その皇帝自身に傷を負わせてしまったのだ。本来ならば、即刻首をはねられていてもおかしくは無い。

「とりあえず……ゴメンナサイ」

小心者は繰り返しした謝罪をもう一度しておいて、さて、どうしよう……と首を傾げた。

本能的には素早く考えを巡らせたつもりだったが、実際は周囲をなおいつそう戸惑わせただけだった。

女装の男は、長い剣をむき出しにしたまま、その切っ先をどうすればいいのかわからない様子で固まっている。

数人いる女官も、護衛用の刃物を上げたり下げたりしながら困惑の色も甚だしい。

そして何より、倫太郎の一番近くにいる青年。

前が完全にはだけたままで、首には小さな刃物の傷と、倫太郎の血。意外と筋肉質の白い肌に横切る浅い傷。

なんというか……卑猥だ。

倫太郎はさり気なく視線をあさつての方向に向け、手元の肌掛けをパサリと青年に投げかけた。

「……俺は」

しかし、その言葉は最後まで続かなかった。

急に周囲が騒然として、慌しく大勢が部屋に突入してきたからだ。「へ、陛下……」

倫太郎は、その大勢が自分を捕らえにきたものかもしれないと、怯えた。

それほど彼らは慌てた様子で、しかも剣やら鎧やらの重装備だったのだ。

「神軍が！」

「翼竜の騎士団が」

丁度倫太郎が差し出した肌掛けが、青年の身体の傷を隠していた。さもなくば、問答無用で敵だと認識されたかもしれない。

しかし、皇帝の後宮に踏み込んだ忠義の騎士たちが見たものは、至高の頂に座る彼らの主と、しどけない服装の美しい少女。

少女は皇帝に抱きつくように身体を寄せていて、そのほっそりとした指が主の肩に掛かった布をはだけようとしているように見えたのだ。

「……こ、これはご無礼を」

倫太郎はさつと、手を離れた。

本能的に、青年の後ろに隠れようと、身をすくめる。

先頭で駆け込んできた赤毛のオジさんが、視線を微妙にそらせながらその場で膝を折った。

「陛下……」

「わかった」

青年は、倫太郎を騎士たちの視線から遮るように立ち上がり、ずっと天蓋のカーテンを下ろした。

「姫はこちらで待たれよ。すぐに典医を呼びます」

ひとり、天蓋付きベッドの中央に残された倫太郎は、呆然とその場に座り込んだ。

次第に騒ぎが遠くなり、やがて気配を感じなくなる。

完全にひとりになったと確信すると、急に全身から力が抜けた。

「……痛い」

倫太郎は、ようやく血が止まりそうな手のひらを見下ろして、へにやり、と眉を下げた。

13 逃げる1

倫太郎は一息ついて周囲を見回した。

天蓋で覆われたベッドから、室内の様子はうかがえない。

しかし、どんなに耳をすませてみても、人の気配は感じられず・

・

そろり、とカーテンをめくってみた。

細目に開いた隙間から見えるのは、豪華な装飾を施された壁と、

遠方に巨大な窓。入り口とは反対側なので、誰の姿も見えなかった。

再びカーテンを元に戻し、ベッドの上を四つんばいでジリジリと後に下がる。

反対側も同じようにのぞいてみると、あの女装した男の後姿が見えた。

ただし、こちらを見てはいない。

巨大な扉が開け放たれていて、その中央で腰に手を当て廊下の先を睨んでいる。

・・・・・折角のドレスに長剣、しかも仁王立ちというのはどうかと思うが。

とても綺麗なその男の、女性と通用しなくもないほっそりとした背中をしばらく眺めて、倫太郎は再びそろそろと布から手を離れた。やはり、逃げるなら反対側だ。

とりあえず、あの窓から外に出られるのか調べなくては・・・・・

・

ベッドから降りようとして、むき出しの膝や手足に気付いた。

たとえ逃げ出すとしても、下着よりエロいこんな格好だと行く先々で面倒事が発生しそうだ。

かといって、着替えがあるわけもなく、仕方がないのでフカフカの枕を手を取った。

ファスナーなどはなく、柔らかな触感の布を筒状に縫ってあり、

軽く上に引つ張つてみるとスルリと抜けた。

ダウンライト調の明かりの中で、細やかな刺繍の施されたその布は、白っぽく艶やかな光沢があった。

広げてみると、丁度いいサイズ。

試しに頭から被つてみると、小柄な身体に沿ってするりと腰まで落ちた。

丈は、やけに短く膝より上だが……。

倫太郎は枕カバーの端をぎゅっと寄せて、胸の上で堅結びにしたみた。

なかなかいいのではないだろうか？

ちよつと見たただけだと、枕カバーだとばれないかも。

スケスケの布地が肩と腕、それから足首まで被つていて、肝心の恥ずかしい部分はしっかりと布で隠されている。

動くたびに邪魔に感じる巨大な胸も、堅結びにした布がりボンのように広がって、若干主張を抑えていた。

あとは、靴があればいいんだけど。

男子高校生だった頃でも、素足で外を歩くことなどなかった。

今はこんな華奢な女の子の身体なのだ、ますますその柔肌がもつのか心配だ。

だが、いつまでもここに居ても、次にチャンスが巡ってくるとは限らない。

今、この瞬間。

きつと、この時を逃せばチャンスの神様はどこかへ去ってしまう。

倫太郎は、この世界の神様とやらのことをチラリと考えた。

男である魂が女の身体に宿るといふ、このありない状況が世界の意思であるとしても。

せめてもつと、強靱な身体が良かった。

柔らかな皮膚。

いかにも、非力な二の腕。

この、走る前に蹴躓きそうな脚は、きつと長い距離を素足で走る

などできないだろう。

背中流れる髪にしてもそうだ。

逃走者には相応しくない、目立つ色と長さ。扱いに困るほどの量。逃げるなら、この先いろいろ考えなければならぬことが多そうだった。

だが、とりあえず、この部屋からこっそり抜け出すことが第一だ。倫太郎は意を決して、天蓋のカーテンから外に滑り出た。

素足に感じる、ふつくらとした絨毯の感覚。

柔らかな足裏にも優しい、その厚みを踏みしめながら、素早く窓まで走った。

しかし何故、こんなにも距離があるのか。

足早に二十歩以上進んで、ようやく壁際まで辿りつく。早く、早く。

急く気持ち指先を震わせ、喉がカラカラに渴く。

取っ手らしき場所を探して、手を伸ばした。

しかし、あまりにも巨大すぎる窓には鍵が掛かっていて、それは届かないほどの高さにあった。

倫太郎は、今度は踏み台を探して左右を見回す。

窓際に、細かな装飾の施された白い椅子があった。

なんとかそれを持ち上げようとしてみるが、意外なほど重くて動かず、仕方がないのでズルズルと引く張る。

何とか踏み台になる場所まで移動させ、その上に乗って手を伸ばしてみるが、まだほんの少しだけ高さが足りなかった。

必死に、手を伸ばす。

指先が、鍵に触れる。

「何をしているんですか！」

背後から、険しい男の声がした。

その声の響きにぎよっとするより早く、指先でカチリ、と力キが回った。

同時に、ぐらり……と身体が傾く。

「姫っ！」

真後ろに向けて落ちそうになり、慌てて手をばたつかせた。
ボタンー！！

大きな音と共に、勢いよく風が吹き込んできた。

目の前に広がるのは、真っ暗な空。

「……………うああああっ」

椅子から落ちる！と身体をよじった結果、何も無い窓の外へとバ
ランスを崩した。

夜なので外の様子がわからないのだと思っていたが、事実は違う。
この部屋はどこよりも高い場所にあり、しかも海に面していたの
だ。

下は、断崖絶壁。

岩だらけの、落ちたら痛そうな入り江が遠くに見える。

突風が、長い髪をさらった。

ぐん！と背中を押されたような気がした。

窓から内側へ吹き込んできた風は、いつのまにか逆方向に進路を
変え、ウエイトの軽い倫太郎をいとも簡単に巻き込んでしまった。

「姫！！！！」

ぐるり……………と視線がまわり、身体が不自然な方向に飛ぶ。

呼ばれて、視線が窓の方向を向き、必死の形相で駆け寄ってくる
美人さんが見えた。

彼の手から、長剣が滑り落ちる。

長い両手が、倫太郎に向かって伸ばされて……………

「危ないって！」

既に窓の外に飛び出していた人間の台詞ではないが、美貌の青年
が命を顧みず己へ手を伸ばしてくるのにぎよつとした。

何故だろう。

どうしてこんなにゆっくりと、彼が窓に駆け寄ってくる瞬間が見
えるのだろう。

ああ、足が窓枠を蹴った。

ドレスを身にまとった長身が、まるで背中に翼があるかのように、

もちろん窓から飛び出したら、普通人間は落下する。

・
・
・
・
・
普通はね。

「……………」

倫太郎は、見た目よりずっとがっしりと太い青年の腕を握り締め、顔を歪めた。

「お、重い」

何故か倫太郎は宙に浮いていた。

そして、自分よりかなり体重の重い青年を、両手にぶら下げていた。

「いやああああ、ダイエツトしろよ！重いつて！！！」

「す、すいませ」

ぶわあつと、風が舞った。

倫太郎の薄絹を巻き上げ、青年のドレスの裾をはためかせ。

傍から見たら、映画のワンシーンのようだったかもしれないが・・

…当の本人には、走馬灯が過ぎりそうな数秒間だった。

ひめ、ひめ
・
・
・
・
・

ひめさま

頭上から、巨大な影が降ってきた。

それが何か確認するより先に、降ってきた影が落下寸前の2人の真下に回りこんだ。

うひいいいいっ！！！！！！

それが何かを認識するのを、理性が拒んだ。

ぬあああああつ！！！勘弁してえええええええつ

!!!!

内臓が喉から飛び出しそうな落下感と、もはやトラウマになりそうな巨大な獣への恐怖に、倫太郎は絶叫した。……声にはならなかったが。

いつのまにか、筋肉質の長い腕に抱きこまれていた。

そのいい匂いのする服に顔を押し付け、身体の反対側は、意外と体温の高いうねる鱗肌にべたりとくっつき。

風が、容赦なく全身を切りつける。

ほぼ垂直落下で、錐揉みするようにぐるぐると回る。

限界は、すぐに来た。

というよりも、あっという間に恐怖が理性を上回った。

結果、何が起こったかというと・・・・・・まあ、あれだ。

覚えていないと言ったら分かるか？

倫太郎は、白目をむいて卒倒した。

13 逃げる1（後書き）

男の子に、ダイエツトしろとか重いとか言われたら、多分サツクリ殺したくなります♪

14 逃げる2

カルエラは、必死だった。

腕の中で震える少女を抱きしめ。

もはや死ぬとしか思えないような、垂直落下に息を止め。

片手で、ごわごわとした鬘たてがみを握り締める。

絶対に、離さない。

たとえ手がもげようが、二度と剣が握れぬほど指がねじまがろうが。

決して目は閉ざさない。

たとえこの凄まじい風に、眼球が乾いて干からびようとも。

何かを諦めた瞬間、この奇跡のような少女を失ってしまうとわかっていた。

薄暗い回廊の明かりを背に、美しい黄金の髪をきらめかせて現れた瞬間の衝撃が、今もなおカルエラの胸にある。

振り上げた剣の下で、震える翠色の目に怯えを見た時、たとえ陛下に止められずとも、己の胸を切り裂いてやりたくなった。

小さな、小さな、温かい身体。

存在するのが奇跡のような、美しい少女。

今、守らずになんとする。

きつと、自分のろくでもない人生は、このときの為にあったのだ。彼女を。

震えながら丸くなる小さなひとを。

今この瞬間に、守りきることこそが、神が自分に与えたもった使命なのだ。

振り落とされそうな落下は、時間にしてみれば数秒のことだったのだろう。

しかしそれは、カルエラにとっては永遠で。

忠実な皇帝の剣であった彼を、根本から違う生き物に変えてしま

った瞬間だった。

ぐん……と、太ももで挟んだ翼竜の身体がしなる。

少年だった頃、多大なる憧れをもって見上げた、神殿兵の騎獣。

よもやこんなにも穢れた身で、それに乗る日が来るとは思ってもいなかった。

ドレスのお陰で、しっかりとまたがれないのが不本意だ。

安定した騎乗ではないので、バランスが悪く、彼女を落としてしまわないよう必死で竜に抱きついていいるしかなかった。

優雅な動きで、巨大な翼が夜空を掻く。

しなる竜の筋肉が、背後に凄まじい勢いで飛んでいく風が、まるで現実とは遠く離れた、御伽噺に出てくる一幕のようだった。

どれぐらいそうしていただろう。

翼竜が、よく冷えた夜の空を、滑らかに滑空し始めて。

カルエラは、ようやく身体を起こした。

腕の中に閉じ込めていた至玉を、よもや抱きつぶしてしまったのではと、一瞬の恐怖に見舞われたが。

彼女が、気絶しているだけだとすぐに気付いた。

風に揺れる黄金の髪は、二つの月の明かりを浴びて、それ自体が光っているかのように美しくきらめいていた。

青白い、華奢な頬。

ほんのりと開いた、淡く紅を刷いた唇。

浅く上下する胸に、彼女が確かに生きていて、息をしているのだと知る。

自然と、目に涙が滲んだ。

この、罪と穢れにまみれた身で、まだそんなものを浮かべる事ができるとは。

涙など、初めて赤子を手にかけた瞬間に、干からびたと思っていた。

幾人もの命を闇に葬っていくうちに、魂まで凍りついたと思い込んでいた。

カルエラは、とうとう耐えることが出来ずに、声を上げて泣き出した。

さながら、迷子になった、幼子のように。
母を恋う、子供のように。

「・・・・・・・・ん」

腕の中で、少女が身じろいだ。

ゆっくりと、金色のまつげが震える。

大きな目を縁取る、長いまつげが揺れて・・・・・・・・

カルエラは、今さら涙をこらえることが出来ず、必死で声を押し殺して咽び泣いていた。

ゆっくりと開いた美しい翠石が、ぼんやりと不思議そうに彼を見上げる。

「・・・・・・・・？」

ぼたり、と涙が白い頬に落ちた。

彼女はゆっくりと、華奢な腕を上げて、それを指先で拭った。

「・・・・・・・・」

カルエラは、そのまっすぐな視線に凄まじいまでの羞恥を覚えて、顔を背けた。

支えていないと彼女が海に落ちてしまうのでなければ、一目散に逃げ出したいところだった。

「ええつと・・・・・・・・つ」

何か言おうとした少女が、急にびくりと身体を固くしたのに驚いた。

一瞬後、小さく温かな肢体が、飛び込むように胸元にしがみついてきて。

心臓が止まりそうなほどのショックに、ようやく壊れていた涙腺が閉まる。

「たったたたたたた」

「はい？」

小柄な彼女に強く抱き付かれても、痛みなどは感じなかったが。

細い腕が、それはもう、必死にぎゅうぎゅうと胴回りを締め付けてくるので、こちらまで妙に慌て浮き足立った。

「高い……」

聞き取れないほどに小さな彼女の呟きは、一瞬、カルエラの耳を素通りしそうになった。

14 逃げる2（後書き）

ふたりの温度差をコミカルに表現したいのですが・・・難しい
^ ;

主人公視点のみにしたほうがよかったでしょうか。

15 逃げる3

雨だと思った。

おまけに風まで強くて、台風か嵐に巻き込まれたのかと。ぼんやりと目を開けた先に、灰色の二重の瞳があった。

—— まっげ長え……………

そんなことを考えた直後、そこからあふれ出る液体に気付く。

—— うげ

それが涙だとわかり、倫太郎は思いつき顔をしかめた。

何が嬉しくて、起き抜けに野郎の泣き顔を見なくちゃならん！

しかも至近距離。

いくら見たこともないほどの美貌とはいえ、相手は男。

そんなものにトキメクなどという、可愛らしい感情が起こるわけも無く、とつさに非常に嫌そうな顔をしてしまった。

しかし幸いにも、相手は視線をそらしていたので、気付かなかったようだ。

己の見た目がアレだということに多少の自覚が出てきたので、急いで表情筋に指令を出した。

笑うのは無理。しかし、げんなりした表情は、即座に消しておく。

「ええつと……………」

話を逸らせるためにも、どうしてこんなに近い距離で向き合っているのかと尋ねようとして。

—— うひひひひひ

一気に、余裕をかましていた意識が冷えた。

ここがどこかなど、理解したくもなかった。

風が冷たい。薄絹もあるかなしかの、ほぼむき出しの腕が、ざつと鳥肌になる。

—— 駄目駄目駄目駄目！！！！

何が駄目って、すべてがだ。

背中当たる、生暖かい獣の身体とか。青年の背後に見える、冴え冴えとした二つの丸い月とか。

強い風が、髪をなぶっていく。

一刻一秒、手足から熱を奪っていく。

何より、両手が空いているのが問題だった。

——怖いじゃないか！ 落ちたらどうするんだ！！！

とっさに、目の前のものにしがみついた。

このときの倫太郎には、男に抱きついていてという意識はない。

筋張った身体を、むしろ頼みとばかりに腕を回す。

「たったたたたたた」

見るな！と脳に言い聞かせる。

しかし、恐怖はまっとうなその忠告を何も考えずに無視して。

「高いい……」

つい、見てしまった。顔を少し、横に向けて。

優雅に滑空する、竜の翼の向うにあるものを。

夜の海が、美しくきらきらと光っていた。

月がふたつもあるので、倫太郎が見知ったものよりも明るく、ゴ

ージャスな輝き。

それ、単体だと見られるほどの景觀に違いないのだが……

——どうして、こんな！ 高い所にいいいい！！！！

せめて、意識を失っている間に下ろして欲しかった。

もしくは、もう一度気絶してしまいたかった。

そつと背中に回ってきた腕が、おずおずと髪を撫でた。

倫太郎はぶるぶると震えながら、涙目になってあえいだ。

「……も、駄目」

——死ぬ。絶対に死ぬ。

腹の底からこみ上げてくる恐怖が、声を震わせる。

情けない！とか、弱音を吐くな！！とか。

気が強い従姉妹あたりだと、倫太郎の背中を蹴飛ばして罵声を浴びせてきそつだが……

もちろん、青年はそんな鬼畜ではなかった。

「…………ご安心ください」

低い、柔らかな声が、聞こえた。

「必ず、お守りいたします」

怖いのだと、しがみつく背中を宥めるように、大きな手のひらがそつと動く。

「目は開けないでください。そのまま、じっとして」

倫太郎は声も出せずに、ただガクガクと頷いた。

「竜は、あなたに従っています」

「……………」

「着地せよと、ひと言ご命令なされば、竜はあなたの意思に従います」

——無理！

と一刀両断に言つてやりたいところだったが、そうしなければ、なおいつそうの長い間、この責め苦にさらされるのだと、わかっていた。

今居る場所を想像するだけで血の気が失せそうだった。

腰が抜けてしまつて、身動きもできなくて。

倫太郎は、すぐるように青年にしがみついたまま、しばらくの間ただ震えていた。

「姫」

なだめるような低い声。

「私を信じてください」

「……………」

幾度か青年に励まされて、なんとかかかすれた声をひねり出した。切羽詰れば、術で操ろうなどという余裕はなく。

「頼むよ、ええと…………緑の竜」

ただひたすら、情けないまでの懇願。

「た、確かに落ちそうなところ助かったけど」

自然と眉毛が下がり、ぎゅっと閉ざしたままの目に、涙が滲んだ。

「お願い……降りて？」
うゝるるる……

低音の甘い声が、跨った身体の下から響いてきた。
それはとても美しく、唄うような響きで。
るるるるるゝん

唄人としての琴線に触れる、穏やかにも情熱的な、一節のメロデ
イだった。

もちろん歌詞はない。

しかし、圧倒的なまでに濃厚な、原始の力そのものの。
美しくも力強い、愛の歌。

そう、この竜が唄うのは、愛だ。

この世界への。

取り巻く全てのものへの。

そして……倫太郎への。

「……あ」

それに気付いた倫太郎は、思わず目を開けていた。

しなやかに翼を動かせ滑空する姿を、寸前とは別の目で捉える。
明るい夜空を背景に、力強くうねる竜の首筋。

猛々しい鬣を纏わせた後頭部が、まっすぐに丸い月の方を向き。
なめらかな喉元が、軽く空気をはらんで膨らんでいる。

きらめく鱗を、逞しい四肢を。

間違いなく凶器になるであろう、巨大な翼ですらも。

素直に、美しいと思った。

この、力に満ちあふれる生き物を、愛おしいと思った。

……一瞬だけだった。

わあああああつ！！

だから！ 急降下は嫌なんだつて！！！！

あつという間に高度を下げ始めた翼竜は、倫太郎の心の声など知
らぬ気に、満ち足りた声で唄い続けた。

愛しい、愛しいと。

魂が震えるような、甘い声で。

いつしか、巨大な入り江スレスレのところまで降下していた。

再びぎゅうと目を閉ざした倫太郎には、どこまでも落ちていくような恐怖しか感じられなかったが。

ごつごつとした岸壁が、目前まで迫る。

この巨体、しかもこの速度ではありえない事に、翼竜はまったく重力を無視したかのような優雅さで、唐突に空中で停止した。

止まった、と感じた直後に、ふわりと浮遊感に襲われて。

倫太郎が固まっているうちに、竜はその大きな鍵爪を、入り江の先端にある岩に食い込ませていた。

16 逃げる4

「ありがとう」

安定した地面に降りてしまえば、こっちのものだった。

倫太郎はこみ上げてくる安堵に、惜しげも無い満面の笑みを浮かべた。

「ほんとうに、ありがとう」

助かったのだと思えば、笑顔だって愛想だって感謝だって安いものだ。

地鳴りように喉を鳴らしている竜ですらも、可愛らしく見える。

そつと頬を寄せると、ふん．．．と生臭い息が掛かった。

うん、たしかにちよつと臭うけど、肉食の動物なんだから仕方がないよね？

現金にも目をつぶることにして、大きな顔に手を回す。

「君が居なければ、死んでいた．．．．．命の恩人だね」

その温かい鱗肌にすり．．．．．と頬を擦り付ける。

お行儀よく倫太郎の感謝を受け入れて、深緑色の優美な翼竜は、ぐるりん．．．．．と巨大な目玉を揺らめかせた。

笑ったようだ、と思った。

巨大すぎる生き物だが、ここまで従順だと愛らしい．．．．．のかもしれない。

「群れに戻ってね？ できれば．．．．．神殿の誰かを連れてきてくれると嬉しいんだけど」

ぐゝるるん

太く低く、まあるい声が、甘やかに響いた。

倫太郎は、最後にもう一度ナデナデと竜の顔をさすってから、一歩後ろに下がった。

ばさり．．．．．と巨大な翼が広がる。

明るい月と満天の星空を背に、ゆつたりと双翼を広げる姿は、ま

さにファンタジーな世界で、たとえようも無く幻想的だった。

その一度の羽ばたきがもたらす風圧やら、視界に入りきららないほどの体躯やら、いろいろなものに目をつぶったら……だが、
——うひいっ！

風圧に負けて仰け反り、そのまま仰向けにひっくり返りそうになった。

どこからか出てきた腕が、がっちりと背中を支えてくれなければ、コメディ漫画のワンシーンように吹き飛んでいたかもしれない。

しかし被害は完全に抑えられたわけではなく、吹きすさぶ砂塵が目に入った。

とつさに顔をゆがめて、瞼を覆う。

——痛てえ………

ぼろり………と大粒の涙がこぼれた。

よほど大量に入ってしまったらしく、しばらくの間とめどなく涙が頬を伝った。

「………姫」

人間、他に氣をとられているときに回りは見えないものだ。

倫太郎はいつの間にか、女装した長身の男の胸に抱きこまれていた。

「どうか、泣かないでください」

何を誤解しているのか、腫れ物をさわるようにそっと、ぎこちなく。

おずおずと背中を撫でられて初めて、「おや？」と今の状況に気付いた。

目の前にある、水色のドレス。

レースとタックで繊細なラインを作る胸部には、細かな銀系の刺繍があった。

甘い、花のようないいにおい。

………確かに、パーツ的には女性のものなのだが。

少し目線を上げると、色白の首に尖った喉仏が見えた。

肩幅も、女性というにはがっしりしている。

そして何より、抱きしめられた倫太郎の頭が、胸の真ん中あたりにくるといふ身長差。

びっくりして目を見開くと、大粒の涙がポトポトと頬に滴った。

女装の彼は、とても痛ましげな表情をして、そつと……それこそ壊れやすいガラス細工にでも触れるかのような仕草で、倫太郎の目の下を拭った。

「恐ろしい目に遭わせてしまい、申しわけございません」

囁かれる声はとても低く、甘やかなものだった。

触れるか触れないかの指先が、頬からゆつくりと目じりに移る。

「もう大丈夫です。わたくしがお守りします。ですから……
……泣かないでください」

相手もドレスを着ているからか、貞操の危機のようなものは感じなかった。

しかし、男性の筋張った腕に抱きしめられているのは事実で。

倫太郎にしてみれば、女装した野郎がふたりしてハグしているという、実に微妙な感覚なのだが、おそらくそれは目の前の彼には通じないのだろう。

あまりにも居心地が悪いので身じろぐと、彼はそれを恥じらいと取ったようだった。

あつさりと腕を解かれ、若干の安堵と気まずさに俯く。

すると青年は、映画とかでしか見たことが無い優美な仕草でその場に膝を折り、倫太郎の顔を下から覗きこんだ。

「お怪我は、ありませんか？」

確かに、彼は男だ。

しかし、これまでに会ったこともないほどの美貌で。

その芸術作品のように整った顔を心配そうに歪められると、小市民な倫太郎は、こちらが悪いことをしたような、申し訳ないような気分になった。

「……ないです」

「はい」

「だ、大丈夫」

「はい、よかった」

ほっと、ほろんだその表情は、ソツチの気のない男でもコロリといっってしまうようなほど美しく、魅惑的なものだった。

——こ、こいつは……

倫太郎は、背中にじんわりと汗を滲ませた。

——こいつは絶対タラシだー！

「？」

目を白黒して、急に口元を押さえた倫太郎に、青年は訝しげな表情をした。

「どうされましたか？ ご気分でも？」

鼻血が出そうだったとは言えない。

なんでもないと首を振つても、彼の気遣わしげ……なのだろうが、妙に迫力のある美貌が遠くに行ってくれるわけではなかった。

「ああ、どうか……そんなお顔をなさらないでください」

低い声はドレス姿にそぐわないはずなのに、若干かすれた具合とか、柔らかく優しい口調だとかが、妙にマツチしていて怖い。

「わたくしが必ず、姫さまを神殿にお返しします」

甘い声色はそのままに、何かを決意したような台詞。

それを耳にした倫太郎は、あさつての方向に向けていた視線を、素早く目の前の青年に戻した。

彼は、あの後宮の主人の家臣のはずだ。

寝所にまで剣を持ち込むことを許された、忠義の者。

少なくとも、倫太郎が主人の臥所でナイフを握った時、問答無用に切り捨てようとするほどには、彼の主人に忠実だったはずだ。

そんな彼が、倫太郎を神殿に戻すという。

そこに、あの琥珀色の目をしたひとの意思がないのは確かだった。どうして急にそんなことを言い出したのか、彼が今どういっても

りでいるのかなど、倫太郎にはわからない。

しかし、今のところ悪意は感じなかった。

触れてくれる手も、丁寧で。

倫太郎を安心させようと、気を使ってくれているのが良くわかる。良くわかるのだが………

ドレス姿の青年が、岩場の上に跪き。

倫太郎の両手を、まるで宝物を押し抱くように、握り締め。

そっと、祈るように頭を垂れる。

繊細に結い上げられていた髪が乱れ、しなやかな首筋に黒い後れ毛が落ち。

黒く長いまつげが落とす影が、ますます彼の容貌をミステリアスに、魅惑的に彩る。

なんというか………コメントに困るのだが。

というよりも、どう反応すればいいのかさっぱり分からないのだが。

恐らくは、本人に倫太郎を困惑させるつもりなど毛頭ないのだろう。

しかし倫太郎は、じっと立っているのさえ居たたまれない気分で、再び視線をしあさつての方角に反らせた。

16 逃げる4（後書き）

どこまでも温度の違うふたり。

彼の存在に違和感を覚えても、仕方がないと思う。

確かに美人だ。顔だけ見れば、ミスユニバースにでも余裕でなれそうな美貌。

しかし、どこからどう見ても男で。

しかも、それを隠そうとはしていない。

体格のことは仕方がないとしても、本気で女を装いたいなら、もっと身体のラインを誤魔化すデザインを選ぶべきだし、少なくとも目立つ喉仏ぐらいは隠すだろう。

流れるような仕草は、女性的と言えなくもない。

しかし、岩場を跨ぐのに邪魔だと判断すれば、ためらいも無くドレスの裾を膝までまくる。

素足でヨロヨロしている倫太郎を抱き上げて運んでくれたり、さりげなくエスコートしてくれたり、その行動は紳士的で。

元の世界に、ニューハーフバーで働く友人がいるのだが、2人並べてみれば確実にそいつのほうがゴツく、男性的な外見をしているが、それでももっと「女の子」だった。

必死で歩いていると、庇われる。守られる。

女の子と一緒にいるという感じではなく、リーグ隊長やその部下の騎士さんが控えているような、そんな安心感。

彼はきつと、「男性」なのだろう。

出会ってから一時間と経っていないが、倫太郎はそう結論付けた。この世界の事情は良くわからないが、心が「女」だからドレスを着ているわけではないのだ。

だとすれば、貞操の心配をしなければいけないのか？といえばそういう感じでもない。

カルエラと名乗った彼を、さり気なく観察しながら、倫太郎は小さく首を傾げた。

魅惑的な彼はきつと、男女問わずモテる。

あの目でじつと見つめられたら、その気のない倫太郎ですらドキドキするのだ。

セクシャルな魅力を充分に持ち合わせていながらも、それとは正反対に、「きちんと感」があるとも言おうか。

—— たぶんそれを乱してやりたいってエロばあとかエロ親父とかがいるんだろうなあ……

しばらく無言で彼の横顔を見てから、倫太郎は全く失礼なことを考えた。

「……やはり、そのお御足で歩くのは無理です」

尖った岩の角に息を詰めた倫太郎を見下ろして、カルエラは言った。

「お抱きします」

「いいよ」

ラーグ隊長と違って控えめなカルエラには、合意なく抱き上げようという強引さはない。

足は痛い、抱かれて運ばれるなど恥ずかしくてたまらない。

もちろん丁重にお断りし続ける。

「どうしても歩けなくなったら、お願いするから」

「……はい」

カルエラは、今すぐでもまったく問題ないという雰囲気だったが、渋々と同意した。

倫太郎たちは今、海沿いに街道に向かって進んでいた。

カルエラは竜が高度を下げたときに、小さな村がある方角を確認していたらしい。

「村へはまず私が参ります。着替えと靴を見繕ってきますので」

「一緒に行こうよ」

一人にされる不安からそう言ってみると、カルエラは困ったように笑った。

「いえ、私ひとりで。リン様のそんなお姿を、誰かの目に触れさ

せるわけにまいりません」

「・・・・・・・・ええ」

「どこぞの不埒ものが不相応な真似をしてくるとも限りませんので」
倫太郎は、改めて自分の身なりを確認した。

手足を覆うのは、スケスケの薄布。

胴体部分はかるうじて隠れているが、元々が枕カバーだ。

上から見ると、ぶつкраした胸のふくらみが窮屈そうに収まっていた。

「・・・・・・・・あんのスケベ皇帝」

「・・・・・・・・っ」

枕カバーが無ければ、真っ裸より恥ずかしい格好なのだ。

つい恨みを込めて後宮の主を罵ると、カルエラがゴホゴホと咳き込んだ。

彼はさつくりと、あの場所について話してくれていた。

強大な軍事力を持つ国のこと、そこを治める若い皇帝のこと。

琥珀色の瞳の彼がその皇帝で、巨大な後宮の主であり、倫太郎を正妃に迎えようとしていたということ。

何も知らない倫太郎を訝しく思っただろうが、カルエラは丁寧に教えてくれた。

倫太郎を神殿に戻すと約束してくれたとはいえ、彼が皇帝への忠義を忘れていないのは良くわかった。

強大な帝国のことを話す口調は、とても誇らしげで。

倫太郎はあえて、反論せずにいた。

こちらの意向など無視して誘拐されたのだとか、迷惑だし、嫌だし、そもそも子供を身ごもるようなコトを男とするつもりはないとか。

説明したら長くなるし、説明してもわかってくれなさそうだった。

この世界で、妊娠するということはとても尊いことなのだ。

強く優秀な男の種を身ごもることこそが、女の幸せだと考えられている。

その価値観の違いを埋めることが出来るとは思えなかった。
女もひとりの人間で。

子供を産むも産まないも、結婚するもしないも自由。

それが当たり前なところからきた倫太郎には、ここはとても奇妙で、歪で、居心地の悪い世界だった。

「でも、こんな格好で一人でいるのも……ちよつと怖いというか」

「結界を張っておきます。誰も、あなたのお姿を見ることは出来ません」

結界。

倫太郎はその言葉に、ぽかんと口を開けた。

「大丈夫ですよ。腕のいい魔道士が作った道具ですから、危険はありません」

「………そうか」

ぽん！と手を叩いた。

いや、まったくすっかり忘れていた。

「リイン様？」

この世界で、自分は術が使えるのだ。

生まれ育ったところよりも、強大で濃厚な力の気配。それを、上手に使うことが出来たら………

「………あー、そっかあ」

急に、不安が薄らいだ。

ふつとこみ上げてきた安堵感に、無意識のうちに笑っていた。

カルエラが自分を見て息を飲んだこととか、風もないのに、踊るように黄金色の髪が揺れたこととか。

倫太郎は気付かなかった。

翠色の目が、ゆつくりと弧を描く。

淡く赤い唇がほころんで、白い真珠のような歯がのぞき。

「忘れてた」

笑うと、風が起こった。

傍の森が、大きくざわめいた。

「……俺、唄人だった」

「うた、びと」

「うんそう」

何故かわずかに上気したカルエラの顔を見上げて、倫太郎はにっこりと微笑んだ。

「唄には呪がある。言葉には法がある。そしてこの世界には……
・力が」

倫太郎はゆっくりと海に目を向けた。

まだ夜明けも遠い黒い海原に、寄せては返す力強い波。

白く泡立つ波打ち際に、キラキラと瞬く銀色の光。

空を見ると、明るいふたつの満月。

きらめく星たち。

吹き付ける風は少し冷たかったが、優しくて。

背後の森は木の葉を揺らし、木々の隙間からこちらを見ているのは、精霊たちだろう。

うっとりするほど濃厚な、この星が持つ力。

強く。

優しく。

……甘い。

倫太郎は、大きく息を吸った。

肺に届いた呼気に、心臓がドクリと波打った。

酔いそうだった。

酒よりももっと。

まるで、麻薬でもあるかのように。

思考が、緩む。

肉体も、精神も。

ふう……と息を吐く。

うっとり長く。

まるで……情事の後のように。

「リン様！」

ぐいつと腕をつかまれた。

引き寄せられ、美麗な顔が至近距離に迫る。

両肩を痛いほど握られて、ガクガクと揺さぶられた。

「……………え」

それは、これまでのカルエラからは想像もつかない乱暴さだった。

「ちょ、ちよつとま」

待つてと、言うよりも先に、抱きしめられた。

長い腕が、がっちり。

これまでの控えめさなどかなぐり捨てて。

ぎゅうぎゅうと、力の限りに締め付けられて、苦しい。

「リン様！」

カルエラは必死に倫太郎を抱きしめ、叫んだ。

ここに、引き止めるかのように。

倫太郎が、消えてしまうのを怖れるかのように。

——え、えっと……………

ドクドクドクと、自分以外の人間の鼓動が聞こえる。

とても早い。

駆け足の心臓の音は、かえって倫太郎の気分を落ち着かせた。

ぱふぱふ、と細身の背中を叩く。

触つてみると、意外と筋肉質だった。

「大丈夫」

倫太郎の声に、ビクリと背中が揺れた。

「なんでもないよ」

たちまち理性を取り戻したらしいカルエラの、困惑する様子が手に取るように伝わってきた。

「唄を編む前段階の作業だから、危険は無いし、何も問題はない」

おずおずと、身体が離れた。

たちまちスウツと冷えた空気が2人の間をかすめ、倫太郎はそれに肌寒さを感じて苦笑した。

「まず、見てもらったほうが早いよね」

そつと、カルエラの胸に、両手を置く。

少し大きくなった彼の目が、戸惑うように、不安そうに揺れた。

――隠せ、隠せ、隠せ

喉の奥が、緩やかな音を紡ぐ。

風に、大地に。

そつと、唄う。

まるで……睦言のように。

17 唄う1（後書き）

お問い合わせというか、感想があったのですが、倫太郎は最強・無敵ではありません。性格的には温和系で、戦いに向いていないし、ドンくさいです。

新しい身体は貧弱で、体力もないし、大きな胸が邪魔で動きが鈍かったりします。

この先も、急に無敵魔法使いになっちゃうわけではありません。

……なんだか色々すいません的な残念キャラです（笑

18 唄う2

変った方だと思う。

まるで奇跡のような美しさ。

屈託のない、少年のような無邪気さ。

その両手に握る、尋常ではない祝福の力。

ふっくらと柔らかそうな唇が、ほころぶ。

後宮勤めの長いカルエラですら、その魅力に引き寄せられ、捕らわれて。

目が離せない。

ずっと、ずっと、見つめていたい。

思わず伸ばしてしまった手を、きょとんとした翠の双眸で見返された。

そして、なんの疑いもなく、笑いかけられる。

果たして己に、そんな価値があるのだろうか。

あまりにも穢れの無い美しさが、カルエラの目を焼き尽くしてしまいそうだった。

その手がゆっくりと宙を舞う。

夜風を、掻くように。

二つの月を、請うように。

彼女の唇が動いた。

何かが、聞こえた。

風の音？ 精霊の声？

耳を澄ませ、それを聞き取ろうとするまもなく、伸びた手が淡く光った。

「・・・・・・・・」

月の光が、落ちてきたのかと思った。

白く細い腕に、するすると光が絡みつく。

ゆっくりと、ゆっくりと・・・・・・・・

華奢な腕が、闇に溶け始めた。

「……………リンさま」

思わずこぼれた声は、震えていた。

理性では、目くらましか姿消しの魔法なのだろうとわかっていても。

高い場所から順に、ゆっくりと消えていく様は、とても恐ろしかった。

本当に、消えてしまうのではないか。

本当に、月明かりに解けて儚くなってしまったのではないか。

そう思うと、両手が震えた。

顔から、血の気が下がるのがわかった。

「カルエラ？」

やがて足先まで見事に溶けてしまった少女の声が、虚空から響いた。

はつと息を吐き出すと、ぎゅうと腕をつかまれた。

「……………どう？　ちゃんと消えてる？」

カルエラは、そろそろ手を上げて、確かめるように彼の人の姿を辿った。

触れる部分に、確かに感じる、温もり。

「前にしたとき、あっさり見つかったから。今回は念入りに消してみただけど」

指先に、さらりと柔らかな髪が触れた。

目を閉じずとも、瞼に浮かぶ。

豪華な金色の、波打つ御髪。

たっぷりとした分量は、手入れに相当の時間と労力を費やしているとわかる代物で……………

おそらく、高貴な身分の姫君なのだ。

神殿の奥深くに保護されて、子供を産むという義務からも長らく守られてきた、神の愛し子。

年の頃は恐らく14・5。普通ならば、とうに初床を済ませ、子

供のひとりでも腹に宿している年齢だ。

目もくらむばかりのこの容姿からいっても、身分の高い夫が5人、その候補が更に5人。

引く手あまたで、腹が休まる間もなく孕まされるだろう。

毎晩男に組み敷かれ、泣こうが叫ぼうが、月のものが上がるまで子種を植えつけられ続ける……

指先に触れる金糸の髪が、臥所に広がる様を思った。

今でもカルエラの剣の主である、帝国の若き皇帝。

あるいは、カルエラが見知る、各国の王たち。

彼らが交互に、彼女にいかかわしいことをする様が、まざまざと脳裏によぎった。

「カルエラ？」

指が震えた。

ありえないことに、膝まで震えていた。

「ちょ、ちよつと！ 大丈夫？」

がつくりと崩れ落ちる寸前、支えようとしてくれた細い腕にすがった。

見えない、その御姿を。

懇願するように、見下ろして。

「………大丈夫です」

ドレスに包まれた足を、なんとか踏ん張った。

「大丈夫」

それは自分に言っているのか、彼女に言い聞かせたいのか、わからなかった。

「そ、そう？」

不安そうな気配が、伝わってきた。

可愛らしいお声が、少し震えているように思えた。

必ず、お守りするのだ。

改めて胸に誓う。

どんな男の手も、触れさせはしない。

彼女が望まない相手の、寢所にやりはしない。

それがたとえ、己の剣の主であろうと。

この身が属する、組織の頭領であろうと。

「……素晴らしいお力です。わたくしの目にはお姿がまったく見えません」

「ああ、うん。ありがとう」

触れていると、はにかむ様子もわかった。

しかし、ずっとそうしていると不敬にあたるのだろうか。

もじもじとする彼女から、そっと手を離れた。

肌のぬくもりを感じなくなると、たちまち不安になる。

そこに、いらっしやるのか。

本当に、そこに？

「見えなさ過ぎて、はぐれないか心配です」

見えていないから、恥ずかしくないだろう。

カルエラはそっと、暖かな身体を抱き上げた。

ふわりと軽いその身体は、まるで羽根でできているかのようにだった。

腕に掛かる重みは、ほんの子供を抱いているかのように。

両手で抱かずとも、片手で事足りた。

「これで構いませんか？」

「う……うん」

狼狽する気配が伝わってきたが、やがてそっと、カルエラの肩にしがみついてくる。

小さな、小さな、奇跡。

無くしてしまわないよう、壊してしまわないよう、大切に大切に腕に囲った。

「私の姿も消せますか？」

「あー、うん」

「それでは、村に近づいたらお願いします。着替えと食べ物、できれば宿を探したい」

「わかった」

彼女が頷き、さらさらと長い髪が揺れる。

目に見えなくとも、まざまざと。

今確かに、この腕の中にいる、美しいひと。

カルエラは、眩暈がするような幸せに、頬を緩めた。

18 唄う2（後書き）

カルエラさん、賛美しすぎです。

彼にとつての倫太郎は、たぶん女神様なんでしょう。
足先にキスするのでも鼻血ブーしそうです（笑

19 子供たち1（前書き）

すいません〜今回は表現がイロイロとアレです。
若い方は深く考えずにスルーすることをお勧めします^^；

19 子供たち1

見えないというのは良いことだ。

倫太郎は、年もそれほど変らぬ男・・・・しかもドレス姿の・・・・に片手で抱き上げられた状態で、目を閉じた。

肉体が女に変わってしまったこととか、しかもそれが鏡を見るたびに仰け反りたくなる美少女だということとか、危うく男に手籠めにされそうになったこととか、いろいろ考えたくないことは山積みだったが。

とりあえず、足の裏の痛みがやわらぐことを歓迎した。

無駄なプライドなんだと思う。

少なくとも、精神以外のところは全て女の子なのだから、素直に助力を得れば良いのに。

カルエラは気付いていないと思うが、足の裏はかなりひどいことになっていた。

ほんの数十分歩いただけなのに。

擦り剥き、あちこち傷つけて、抱き上げられていてもズキズキヒリヒリする。

情けない。

己を「男」だと思うのに、心が折れそうになるたび「女になったのだ」と言い訳しそうになって。

悔しいというか、情けないというか、馬鹿みたいだというか。

抱かれて運ばれるのに抵抗はあっても、自分の姿が見えないのだと思うと、まあいいかという気持ちなる。

つまりは、いい格好しいなのだ。

誰の目もないのだと思うと、気が抜ける。

痛みを顔に出しても大丈夫。

泣きそうな顔を我慢する必要もない。

無駄に尾羽を膨らませて、弱っていることを隠そうとするオス鳥

のようだった。

周囲の目がなくなると、とたんに一回りも羽嵩を減らし、貧相に俯く。

倫太郎は、ひそかに溜息をついた。

カルエラの足運びは一定で、倫太郎というお荷物の存在を思えばありえないほど早足だった。

靴を履いているとはいえ、おそらくは室内履き。

裸足よりはましでも、このような岩場や舗装もされていない獣道
は歩きづらだろう。

しかし彼は、顔色も変えない。

苦しそうな表情どころか、どこか嬉しそうな顔をして。

ただひたすらに、道なき道を歩いていく。

「休憩しなくて大丈夫？」

「私のほうは問題ありません。リンさまがお疲れでしたら……」

「いや、うん、俺はいい」

むしろ快適なのだ。

適度な振動と、布を介して伝わってくるぬくもりで、眠気が襲つてきそうなほどに……

庇護され、大切に扱われるということが、これほど心地いいものだとは思ってもいなかった。

今さら15年もの時を遡って、何の疑問もなく両親に守られていた頃に戻ったかのような錯覚。

深い安堵とともに、罪悪感というか、申し訳なさというか、見た目はこんなですけど、実は中身は成人間近な男なんです！スイマセン！と、額を土にこすり付けて土下座したい気持ちというか……

再び溜息をつくの、堪えることができなかった。

カルエラがわずかに気遣わしげな表情をしたのが、また申し訳なく。

再々度こぼれそうになった吐息は、根性で飲み込んだ。

余計な重労働をさせている上に、更に気まで遣わせるわけにはいかない。

倫太郎は意識して動かないようにして、呼吸も極めて浅くした。小さなハミングを繰り返して、さり気なくカルエラに力を送り込み、少しでもこの強行軍に尽力しようとしてみる。

ハミング程度ではさほどのこともできないが、彼の疲労感の軽減にはなるだろう。

とにかく、早足で。

道なき道を、真っ直ぐに。

カルエラは、まるで何者かに追いかけられているかのような勢いで、村とやらがあがる方向に向かっていた。

この速さで歩かなければならないなら、倫太郎の貧相な足では到底朝までにたどり着くことは出来なかっただろう。

意地を張って、自分で歩くというものだから、カルエラにとっては迷惑だったのかもしれない。

へこみはじめた意識は、ますます深く掘り下がっていき、気分はすでに地べたを這っていた。

——今の俺、男としてどうよ？

同じ男……何度も言ってしまうが、ドレスを着ているけれども……に片手で運ばれて、眠気なんか感じている時点で終わっている。

——ああああ、情けねえ……

じんわりと涙が滲んだ。

足も痛いし、心も痛い。

本当ならかけなしのプライドをもって我慢するところなのだろうが、誰も見ていないのだと思えば素直に泣けた。

どれぐらいそうやっていただろうか。

時計がないので正確なところはわからないが、おそらく30分ほど抱かれて歩いたと思う。

不意に、カルエラが足を止めた。

それがあまりにも唐突だったので、倫太郎はひくりと嗚咽を洩らした。

ヤバイ、泣いているのを気付かれる！

そう思った気持ちを、どうにかする間もなく。

「・・・・・・なに？」

遠くから聞こえてくる気配に、全身を強張らせた。

どうして今まで気付かなかったのか。

どうしてこんな痛い音が聞こえなかったのか。

「ひっ！！」

ざわり、と森の木々が揺れた。

倫太郎は、こぼれそうになった悲鳴を、懸命に両手で抑えた。

「・・・・・・リンさま。どうか」

倫太郎を抱く手に力がこもった。

力強い腕。

たとえドレスを着ていようが、見たことないほどの美人であろうが、その腕は強く逞しい男のものだった。

「どうかお静かに」

カルエラの低い声が耳元で囁いたが、聞いてはいなかった。

ほんの、少し先なのだ。

「ぎやあああああっ！！！！」

耳に届くのは、凄まじい絶叫。

声無き声が伝えてくるのは、凄まじい恐怖心。

木々がうつそうと茂っているので、直接目では見えなかった。

しかし、とても恐ろしくおぞましい「何か」が起きていることは確かだった。

「な、ななななに？」

「・・・・・・」

思わずこぼれた声は、大きな手のひらで遮られた。

カルエラは、獣道から更に深い藪の中へと身を潜め、そこで身体

を低くして身を隠す。

「助けて！ 殺さないで！！」

子供の声だった。

「いやあああああつ」

とても嫌な音がした。

ぶちりと、何かが裂けるような……

「けっ！ 逃げようなんてするからだ」

「おいおい、大事な商品に傷つけるんじゃないやねえよ」

不意に、茂みの隙間から『見えた』。

「………っ！」

木々の向うに、10人ほどの子供たちがいる。

年齢はさまざま。

一番年長でも10歳ほどで、悲鳴を上げ続けているのは4歳ほどだろう。

10歳ぐらいの少年が、腕に何かを抱いている。

赤い、塊。

真っ赤な……血まみれの……

「どうせこの顔の傷じゃあ、客は取れねえ。コイツもここで始末しとくか？」

「もったいねえ」

太い男の指が、血まみれの子供を抱いた少年の顎を引っ張った。

「売りモンだと思って大事にしてやったのに」

その少年の顔半分も、血で濡れていた。

怪我をしているのだと気付いたとき、倫太郎は全身から血の気が引くを感じた。

——何だよ、これ……

恐怖で、足が震える。

「まあ、最後に使ってやるか？」

2人の男たちは、これまで殺気立っていた気配を、急に下卑たものに変えた。

手に持っていた大きな剣が、血のりを払い、鞘に戻され。

顎を掴んでいた手が、そのまま喉へと下りる。

びりり！と布が裂ける音がした。

少年のあらがう腕から、小さな亡骸が取り上げられて、それがまるで人形のように地面に落ちて何度か弾んだ。

「いやだっ！ はなせっ！！」

少年は、あつという間に裸にされて、屈強な男に組み伏せられていた。

「最後までいい役に立てよ。特別にデッカイのぶちこんでやるからさ」

「壊すなよ、俺にも回せ」

「おおっと、舌噛みやがったぜガキ」

「舌噛んだぐらいじゃすぐに死なねえよ、残念だな」

どうして、この男たちは笑っているのだ。

倫太郎は、ガタガタと震えながら、首を振った。

恐ろしかった。

怖くて、怖くて、声も出なかった。

簡素な鎧を身にまとった男たちが、ズボンの前をくつろげる。

少年の健康的に日焼けした、小麦色の両足がバタバタと揺れて・

・

「・・・・・・っ」

口を覆っていた手が、瞼の上に置かれた。

何とかしたかった。

動けない自分が情けなくて、悔しかった。

ぼろりとこぼれた涙に、姿は見えていなくとも手のひらで気付いたのだろう。

「ここで、動かないでください」

静かな声が、耳元で聞こえた。

19 子供たち1（後書き）

どちらかというとコミカル希望なんですが、男だらけという歪な形の異世界の現実を倫太郎くんに知ってもらおうかと・・・
彼は男の子なので、えぐえぐと泣きながらも頑張ります。
たちむかえゝ男ゝ倫太郎ゝ♪

20 子供たち2

倫太郎は呼吸を忘れた。

一緒に………瞬きも。

藪の中から葉すれの音も無くふらりと歩み出たカルエラの、場違いなドレス姿をじっと見つめ。

彼の無防備さを危ぶむよりも、目を閉ざしてはいけないのだと強く思った。

「ああ？なんだ？」

急に現れたカルエラに、子供を組み敷いていた下種野郎どもが気付く。

はじめは警戒していた男たちだが、現れたのがひと目でわかるほど高価なドレスを着た青年だと気付き、たちまちポカンと口をあけた。

「こ、こんなところでどうしたんだ？　べっぴんさん。旦那に捨てられたのか？」

「もつとこつちに来いよ。夜の森は寒かっただろう」

狼藉を働こうとしていた子供のことなど放り出して、気持ち悪いほど猫なで声で言う。

立ち上がった男は、まだ下半身を露にしたまだった。

その露骨に勃起した汚らしいモノに、カルエラの視線が向いたのかどうかは知らない。

倫太郎の場所からでも、奴らの表情が一瞬にして紅潮したのがわかった。

「お、男が欲しいのか？」

右側の男が、ゴクリ、とつばを飲み込む。

下半身を出しっぱなしにした左の男が、毛むくじゃらの手でソレを掴む。

薄暗い森に差す月明かりでは、くつきり見える、とまでは言えな

かったが。

カルエラを凝視したまま、その手を緩く上下に動かしているのを目にして、ひどい吐き気がこみ上げてくる。

「来なよ、可愛がつてやるぜ」

倫太郎は、じつとカルエラの美しい後姿を見つめた。

こんな場所には不釣り合いもいいところの、艶やかな後宮仕様のドレスがとてもよく似合っていた。

結い上げられた黒髪は、若干乱れ。

後れ毛が散る首筋が、夜目にも鮮やかに艶めき。

屈強な2人組を相手にするにはあまりにも儚げだった。

「・・・・・・・・下郎」

ビン・・・・・・・・と張り詰めた低音が、ざわめく夜の闇を縫って響く。

ぎくりとしたのは倫太郎だけではない。

悲鳴を上げ続けていた子供が黙り、無様な格好の男たちもポカんと口を開ける。

「ようも我が姫さまに見苦しいものをお見せしたな」

朗々とした声を、果たして彼らは最後まで聞いていたのだろうか。

「死んで償え」

ドレスの裾が翻ったのが、まるでモノクロ映像のようにはっきりと見えた。

白い太もも。

ガーターベルトが、夜目にもくつきりと黒い。

そしてそこには、服装に不釣り合いもいいところの、無骨な短刀の鞘があった。

本体は、ない。

すでにそれは、抜き放たれ、赤い血潮を吹き上げていた。下半身むき出しの男は、今際の声を上げる暇もなかった。

あっけに取られた表情で、首筋に手を当てたのが最期だった。

「・・・・・・・・ひっ」

残されたもうひとりも、恐怖に全身を凍りつかせ、引きつった声を上げる。

しかし、カルエラは振り向きもしなかった。

銀色の一闪が、闇の中できらびやかな光を放つ。

どしんと重い音がして、喉を切られた二つ目の死体が草の上に倒れ落ちた。

「・・・・・・・・っあ」

フリーズしている少年たちが、恐怖に震えながらカルエラを見上げた。

美しい、美しい男。

返り血の一滴も浴びず、鮮やかな腕で男たちを屠ったその姿は、さながら悪魔か死神か。

倫太郎は、始めて見る流血沙汰に、ずっと血の気が下がるのを感じていた。

恐怖・・・・・・・・もちろん怖いとも。

嫌悪・・・・・・・・それはカルエラに？ それとも少年を辱めていたゴロツキどもに？

平和な日本で育った倫太郎には、もちろん殺人への忌避は大きい。しかし、どんな極悪人にも人権があるし、正当な捌きを受ける権利がある・・・・・・・・というふうな、甘ったるい考えは浮かばなかった。

目の前で、小さな子供が死んでいる。

動かないその姿と、顔面を血だらけにして震えている少年を見てしまえば、男たちに対して憐憫など抱けない。

倫太郎は、思わず立ち上がった。

そして、服が破けるのも構わず走り出した。

足の裏が、また切れる。

その痛みすら、遠い。

涙が溢れて止まらなかった。

血まみれの少年。

半裸の彼が、這っている。

死んでしまった小さな亡骸に向かって。
必死で、這っている。

「…………え」

まだ温かい子供の死体と、ほぼ完全に裸にされている少年とを、
一度に腕に囲った。

「ごめんごめんごめんごめん」

情けない、と理性の半分が言っていた。

「ごめんっ……………」

しかし、涙は止まらなかった。

もう少しだけ、早ければ。

もう少しだけ、違う行動を取っていれば。

間に合ったかもしれない。

こんなひどい事にはならなかったのかもしれない。

そう思うと、後悔などと軽い言葉では済ませられないほどの悔い
があった。

いつの間にか、術が解けて。

キラキラと無駄に長い髪が、血の色に染まり。

顔面にひどい傷を負った少年が、限界まで目を見開いた。

ひどい怪我だった。もしかすると、致命傷かと思えるほどに。

そしてその片目は、開かない。

二度と、光を宿すことは無いのかもしれない。

倫太郎は、震える指を傷に這わせた。

一度負った怪我を、無かったことにはできない。

例えば死者を蘇らせることができないように。

なくした片腕を、生やすことが出来ないように。

——御願ひ奉る

唇から、滑らかに零れ落ちたのは『真言』。そして『呪音』。

古くから一族に伝わる旋律が、繊細で緻密な呪をくみ上げていく。
指先から、力がこぼれた。

周囲の濃厚な力場が、倫太郎の全身に集約し、それが華奢な白い指から放たれる。

何度も、何度も傷を撫でた。

唄が、長い呪を作り。

真の言葉が、それに方向性をつけて。

—— ああ、どうか、お願いだ。

倫太郎は、唄いながら泣いた。

少しでも、彼の痛みが和らぐように。

心の傷も、身体の傷も、全てをこの両手で抱え、癒そうと……

・

「……リンさま」

しばらくして、カルエラの手が倫太郎の肩に置かれた。

「もう大丈夫です」

「……っ」

大丈夫なわけがないだろう！

そう叫びたかった。

死んでしまった者は還って来ない。

二度と、還って来ないのだ。

「この者は、迷い無く神の御許にたどりつけたでしょう」

小さな、本当に小さな少年。

袈裟切りにされ、全身が真っ赤に染まっている。

こんなに幼い子供を、どうして殺める事が出来るのだ。

この子の人生は、こんなところで終わる為にあつたんじゃない。

もっと笑って、たくさん笑って、幸せに生きていくために生まれ

てきたはずなのだ。

ぼとり、と大粒の涙が、少年の小さな頬に落ちた。

涙で、血糊がにじむのが切なかった。

抱きしめていた亡骸が離れていく。

倫太郎は、嗚咽を堪えて俯いた。

ぎゅっと両手を握り締め、更に唇も噛み締めて。

どん！と草むらを叩いた。

どん！ともう一度、拳を叩きつけようとして、その手にそつと、小麦色の小さな手が重なった。

「……な、泣かないでください」

半裸の少年は、まだ血で真つ赤な顔のまま、倫太郎の目を覗き込んだ。

「弟は、最期にあなたの言祝ぎを得て喜んでいると思います」

傷はほぼ塞がっている。しかし、大きな傷が残るだろう。片方の目も、不自由なままかもしれない。

少年はまだ幼く、10歳になるかならぬかというところだろう。

こんな大怪我を生涯背負って行くなどと、彼が一体何をしたいのだ。

罪も無い者が、傷つけられ、あるいは殺されて。

そんな世界が目の前にある。

恐ろしくて。

悲しくて。

倫太郎は、くしゃりと顔を歪めた。

20 子供たち2（後書き）

難産でした><

21 皇帝の恋1

突如、上空にひしめいた翼竜の軍勢に、皇都トルージャンは騒然となった。

まだ深夜という時刻。

しかし、二つの月が燦然と光を放ち、闇は薄く。

天駆ける巨大な肉食獣の姿は、眠気眼の目を擦る誰の目にもはつきりと捉えられた。

竜に跨る騎士たちが身にまとうのは、白い法衣、銀色の鎧。

旗持ちが掲げるのは、巨大な深紅の禁軍旗。

その赤と白とのコントラストが、人々の驚愕を煽った。
なぜ、神殿の竜騎士が。

どうして、トルタ帝国に攻めて来るのだ。

逃げ出すより先にぽかんと口を開け、命の危機への本能よりも、
崇める神への畏怖に足をすくませる。

普段は国民の誇りである城が、数え切れないほどの翼竜に包囲されていた。

誰も、こんなにも沢山の騎竜や、神殿騎士を目にしたことはなかった。

竜に跨り、広大な街を見下ろす彼らは、普段は装飾的な穂鞘が被せられている槍をむき出しのまま手にしており、それが巷で言われているように見掛け倒しの張りぼてではないのだと知らしめていた。
月明かりに、銀色の穂先がキラキラと光る。

その鋭いきらめきに、尋常ではない事態なのだとも誰かが唾を飲んだ。

ひととき巨大な翼竜が上空をかすめ、そのあとから数騎の竜が続いた。

人々はがっくりと膝を折り、祈るように手を組んだ。

強大な帝国は、若い皇帝を戴き、この先100年200年大陸の

覇権を謳歌するものだと思っていた。

しかし、太陽神殿の怒りを買って、長き平穏などありえない。

もしこれが他国の侵略であったなら、果敢に武器を持って戦いもするだろう。

だが、この街の住民のほとんどが、敬虔なラーン神教の教徒なのだ。

誰も、向けるべき剣を持たなかった。

よもやこの世の終わりが来たのではと、涙をこぼす者までいた。

「將軍、包囲を完了しました」

倫太郎の護衛にあたっていた青年のひとりが、切りつけるような声で言った。

普段の温和な姿からは想像も付かない、激しい怒りを身にまといている。

苛々と穂先を揺らし、一刻でも早く戦いたいと、憎むべき相手の腸を突いてやりたいと、その胸のうかが聞こえてきそうなほどだった。

この禁軍の長として、最も巨大な翼竜の背に跨っていたウエルド・ラーグは、単騎用の小型翼竜に跨っている彼の顔をチラリと見下ろして、同じように怒りに捕らわれようとする思考をなんとか堪えた。できるなら、単身乗り込んでやりたい。

向かってくる敵を屠り、本能が赴くままに暴れてやりたい。

一度は捨てようと思った剣だった。

もしあの時にご降臨がなければ、次の月明けには二度と剣は持たないとの誓いを立てるはずであった。

もはや必要あるまいと思っていた愛剣が、早く抜き放てと声を上げている。

抑えようもない殺意が、湧き水のごとく溢れてくる。

脳裏に、はにかむように微笑む可憐な面影があった。

美しく波打つ黄金の髪。

澄んだ翠色の双眸。

薄く紅を差したばかりのような、愛くるしい唇。

恐れ多くもこの腕に抱き上げた時、両手で感じた温もり。

目を閉じれば、あまりにも鮮やかに蘇ってくるかの人に、ジリリと胸が焼けた。

今、どうされているのだろう。

無体な目に、あつてはいないだろうか。

恐ろしい思いを、していないだろうか。

ラーグは真っ白になるほど強く拳を握って、ギリリと奥歯を噛み締めた。

ここまで駆けつけるのに、時間が掛かりすぎている。

すでもう、汚らしい手があの方に触れたのではないか。

今頃後宮の奥深くで、屈辱に泣いているのではないか。

そう思うだけで、理性のたがが外れそうだった。

視界が赤く染まって、目に付く帝国兵をすべて袈裟切りにしてやりたい。

しかし、現在の彼の立場は、この禁軍を率いる將軍職なのだ。

行動ひとつで、神殿の行く末が決まってしまう。

一国を相手に戦争を仕掛けるような決断は、たやすくはできない。ウェルド・ラーグは、城の一番高い場所、祝事のあるときになどに旗が幾つも翻るテラスに翼竜を向けた。

早く、早くと心が急ぐ。

それを、懸命に抑えながら……

神の使徒を示すその武装は、夜目にもあざやかに際立っていた。

巨大な翼竜から降り立った男は、周囲の騎士たちと身なりは同じだったが、まとう気配が只者ではないと告げている。

二つの月を背に、テラスに立っているのは彼ひとり。

それはとても無防備な姿だといえるはずなのに……

背後の巨大な竜が、凄まじい存在感を放っている。

テラスに軽い地響きとともに降り立った翼竜は、のっそりその場で首を伸ばして伏せたが、大きな翼竜が一騎いるだけで、広いテラスが手狭に見えた。

「……………どういうおつもりか」

トルタ帝国の近衛将軍、黒の位を賜る壮年の男が、すさまじく強張った表情で声を張り上げた。

「神にお仕える神殿騎士が、何故にこのような無体な真似を！」

「無体はどちらだ」

ざつと羽ばたきの音がして、テラスの脇に小型の翼竜が姿を見せた。

バランスを取りながら滞空し、銀色の兜の隙間から見える目には凄まじい敵意。

彼らの手に握られている、深紅の大旗を目にして、黒の将軍ははつと息を飲んだ。

「……………禁軍か！」

「そうとも、ラザック将軍」

神殿騎士の地を這うような低い声に、黒髪の将軍ははじめて尋常ではないこの状況が飲み込めた。

「我らがお仕える御方を、返して頂こう」

「いや、そう申されても」

「一刻たりと猶予はやらぬ」

ラザックの言葉などまったく聞く耳持たぬとばかりに、長身の騎士が吐き捨てた。

「……………我らが長らくお待ちしていた御方に指一本触れてみよ、たとえ大トルタといえども塵ひとつ遺さず消し去ってくれる」

「ま、待て」

ラザック将軍とて、敬虔な教徒なのだ。

禁軍の意味も、ようやく現れたという御方の意味も、そして今のこの事態の意味まで、顔面から血の気がすべて失せてしまうほど理解できた。

「よ、よもや我が国の何者かが……その御方を」

「何者か、ではない」

騎士は静かに、しかし殺意すらこもった口調で言った。

「トルタ帝国の至高の君。紫の衣を身にまとい、赤き宝玉の冠を戴く皇帝アルカディウス」

ギリリ、と光った灰色の双眸が、まるで抜き身の刃のようで。

「身を守る術をもたれぬ我らが姫を、その意に反して拉致するとは……なんたる卑劣」

自らの主君を侮辱され、いきり立ってしかるべきなのに、何故かラザックは吞まれたように立ち尽くした。

「皇帝とは名ばかりの無頼が！」

銀色のきらめきが、月明かりを反射して翻る。

ラザックは熟練した剣士であり、正面からの攻撃を退けもせず棒立ちで見ているなど、本来の彼にはありえない態度だ。

しかし、どんなに反射神経が優れていようと、この精神的な衝撃の前では無意味だった。

「閣下！」

背後で、己の副官が悲鳴のような声を上げる。

側近たちが、大慌てで剣を抜く。

「待て！」

しかしラザックは、手を上げて彼らを制した。

目の前にいるのは、神の使徒。

主神ラーンによって選ばれた、神の騎士なのだ。

たとえこの命を召し上げられようと、向けるべき剣は持たない。

ラザックは、両手を広げて仁王立ちになった。

神の怒りを厳肅に受け止めようと、その騎士の刃の前に身をさらけ出す。

しかし鋭い剣戟が、彼を袈裟切りにすることはかった。

「大変申し訳ない、騎士どの」

赤髪の巨漢が、凄まじく巨大な剣を手に、ふたりの間に割り込ん

でいたのだ。

「その剣を引いてはくれないか」

「・・・・・・」

「陛下がお会いになるそうだ」

神殿騎士の双眸に、凄まじい殺意が過ぎった。

21 皇帝の恋1（後書き）

視点をラーグさん側と、帝国側に分けてみました。
・ ・ ・ 分けないほうがすっきり読めたかも。
すいません〜字ばかりで><

22 皇帝の恋2

皇帝アルカディウス。

彼を語るには、その両親と数多の異母兄弟について述べねばなるまい。

彼が皇帝の冠を戴いたのは2年前。

それ以前の聖トルタ帝国は、長い栄光の歴史にかけりをみせ、あらゆる意味で澱みの多い国であった。

市井には浮浪者があふれ。

近隣諸国との戦も絶えず。

経済は低迷し。

どこで生きていくのにも、賄賂や権力が必要な……文字通り、斜陽の国。

父メンデイルス先帝には、15人の子がいた。

アルカディウスはその5番目の皇子であった。

後宮には100人を超す側妃が居て、夜毎寢所をあたためる者は違っていたようだから、兄弟の多さも別段驚くべきことでもないのだろう。

しかし、ただでさえ少ない女性、しかも名だたる美女ばかりを独占していることへの不満は大きく、なおかつせいぜいひとりの男子しか設けることができない女同士の諍いも見過ごせないものだった。メンデイルス先帝の力が衰え始めた晩年、巨大な帝国の各地で兄弟たちが叛旗を翻し、内乱が勃発してしまった。

その派閥は、大きく分かれて3つ。

隣国マルータの王女を母に持つ皇太子ラヴィード。

セイラン国王妹の子供である第4子カイザード。

トルタ帝国内で最大門閥である公爵家の姫を生母にするローボルス。

母親の地位もそれほど高くなく、ほとんどノーマークだったアル

ード皇子（後のアルカディウス帝）は、皇太子の陣営に属し、当時はあまり目立つことなく、内乱の嵐を穏便に乗り切っていた。

彼の運命が大きく変わったのは、皇太子派がほぼ内乱を制してから数年後、まだ父が存命であるとき。

旗印である長兄が、何者かの手によって暗殺されてしまったのだ。そのとき皇太子派の陣営にいた皇子の中で、もともと皇位継承権が高かったのがアルード第5皇子であった。

そして、これ以上の無用の混乱を憂う父の手によって、その存命のうちに皇位が譲渡されたのだ。

10年以上の長い間、兄弟間で国土を焦がし、内乱に明け暮れていた皇国は、突如新しい皇帝を頂くことになった。

巷では、彼が兄を殺したのだとか、父に皇位の譲渡を強制したのだとか、醜聞は多い。

しかし実際のところ、彼の行政面での豪腕はかなりのもので、長く続く戦いに厭いていた民は諸手を挙げて新皇帝を支持した。

後世でよく語られるのは、彼の情報戦略の巧みさである。

アルカディウス帝が皇帝に立ったと知った兄弟たち、特に第2から第4の皇子まではいきり立った。

しかし、彼らが何か事を起こすより前に、いつのまにか身包みをはがれるように権勢を失い、その日の食い扶持にこまるほど困窮してしまったという。

内乱が起こりそうになれば、その気配がする前に火の粉をもみ消し。

治安や経済への挺入れも、徹底的に行われた。

長く贈賄に関わってきた者は、いつの間にか姿を消す。

処刑などという血なまぐさいことが内々に行われることはなかったが、アルカディウスが皇帝になってから忽然と所在がわからなくなる者が多発して、その多くが後から罪を告発されて裁判にかけられ、財を没収され、厳しい処罰を受けた。

皇帝アルカディウスは、温和な質ではない。

慈悲深いというよりも、冷酷。果断。

かつては持ち合わせていなかった剣が、届く範囲も広い。

今では兄弟たちはもとより、近隣諸国にまでも怖れられている存在だ。

そんな彼と神殿との関係は、良好的……とは言いかねた。神聖な職域であるはずの神官にも、贈賄にまみれた者は多く、しかし彼らに直接手を出すことはできなくて。

敬虔な信者と表向きは頭を垂れていても、その実神官らを総じて蔑ろにする言動が目立ち、帝国の新たな火種となりかけていたのだ。そんなときの、神の愛し子……新たなる現神人を拉致するという大事件である。

神は、お怒りになるに違いない。

たとえ、紫の衣をまとう皇帝であろうとも。

権力の象徴である、小さな冠を頭上に戴いていても。

テラスに現れた青年は、意外なほど優雅な容姿をしていた。

しかし、その肩に掛かっているのは紫色の長いマント。

紫は皇帝の色で、それ以外の者が身にまとうことはできないのだ。ラーグをはじめとする神殿騎士たちは、ひと目でそれが憎き誘拐犯だということを知った。

テラスで腹ばいになっていた巨竜が、地響きがするほど凄まじい咆哮を發した。

同時に、王城を取り囲む騎竜たちも口々に吼えはじめる。

テラスへの出口のところで一瞬足を止めた皇帝は、しかしそれ以上躊躇うことなく、滑らかな足取りで歩を進めた。

黄金に輝く、二つの満月。

降り注ぐその月の光を浴びて、静かに顔を上げた青年は、確かに威風漂う風貌だとは言えないかもしれないが、紛うことなくこの巨大な帝国の若き主であった。

少し首をかしげて、真っ直ぐにラーグを見つめる双眸は、月の光りのような琥珀。

優男風に伸びた髪は、若干巻き毛気味のこげ茶色。

色白で、武人というよりは文官らしい体躯の、中肉中背の青年だ。その至高の姿を目にして、躊躇った神殿騎士は一兵たりといなかった。

思いのほか大人しそうな青年だという理由ではなく、この若き皇帝が、恐れ多くも神が愛し給う御方を連れ去ったのだと、爆発寸前の怒りのほうが先に立つのだ。

むしろいきり立って剣を抜こうとする騎士たちの姿に、困惑していた近衛兵たちも己の主を守ろうと身構えた。

何かのきっかけでもあれば、即座に血の雨が降っただろう。

両陣ともに、戦闘に入るにはいささか近すぎる位置で向かい合い・

・・・

するり、とラーグが大剣を鞘から抜いたので、更にジリリと緊迫感が増した。

「あの方はどうされた。よもや」

挨拶も抜きに険しい言葉に、皇帝の家臣たちは怒りか違和感かを抱いたようだが、皇帝自身はほんの少し・・・笑っただけだった。

ラーグは、見間違いかと目を眇めた。

しかしこの緊迫感の中、皇帝は白い指を立ち襟の喉元に当て、かすかに・・・いや、かすかにというよりもっと明確に、唇をゆったりと綻ばせていた。

「姫は余の薔薇」

甘い、歌うような声だった。

「余の宝玉」

ラーグの眉間にしわが寄る。

「余の命だ」

戦装束ではない、鎧も身にまわっていない。

皇帝の証である長いマント以外は、ごく普通の服装である彼に、ラーグは思わず切りかかりそうになった。

その瞳は炯々と、巨大な帝国の主に臆さず輝き。

剣を持たぬ皇帝に、不敬というには生易しすぎる殺気を放つ。

「……………何をした」

巨大な剣の切っ先を、ぶらせもせず皇帝の喉下に向けた。

距離は少しあるとはいえ、神殿騎士の能力から言えば遠すぎるという距離ではない。

周囲の近衛兵たちは、それはもう顔色を真っ白にして、皇帝と騎士の間に飛び込もうと身構えた。

神の使徒に剣を向けたくはない。

しかし、剣の主を守らなくてはならない。

そのジレンマをどうやって果たそうかと逡巡している間に、彼らの主は更に……………微笑んだ。

「姫は余を縛り、余を足蹴にし……………余の心を支配した」

それを耳にした周囲の者たちは、ラーグを含め全員が凍りついた。聞き間違いだろうと誰もが思った。

あるいは、尊い身分の方の、良くわからぬ比喻なのだろう……………と。

「我が心は、かの姫のものだ」

若き皇帝はうつとりとした笑みを浮かべながら、指先を心臓の上に置いた。

「かくなる上は、これより誠心誠意口説くことにする。余の妻に……………唯一無二の伴侶になって欲しいと」

神殿騎士たちは、あまりも甘美なその声色に、身震いするほどの嫌悪感を抱いた。

彼らにとってのかの人は、神そのもの。

決して生臭い色恋沙汰の対象にするべき方ではない。

しかし、彼女が生涯独身の誓いを負っているわけでもなく、過去の現神人の中には幾人もの愛人を抱える方もいらしたという史実もあり、完全否定することもできないのだ。

「余は姫の騎士に向ける剣は持たぬ」

躊躇う神殿騎士たちに向かって、皇帝は穏やかな口調で言った。

「兵を引け、將軍」

ラーグは、腸の底からわき上がってくる怒りと、それを発散できない心の歪ひずみと、従わざるを得ないのだろうという未来予測とで、ギリリと奥歯を噛み締めた。

「姫の無事は保障する。．．．余の名誉に誓って」

今の状況では、これ以上望めないほどの誓約だった。

しかし、皇帝の名誉の掛かった誓いだといえども、所詮はたかが口約束だ。

「ならば誠意を持って、今、お返しいただくのか」

「あいわかった。そのかわり．．．明日にでもお詫びに上げる機会を」

ラーグの背後で、「とんでもない！」という声なき声が聞こえていたが、それを聞き入れることはできなかった。

とにかく今は、無事神殿にお戻りいただくこと。

それが第一なのだ。

「あの方次第だ」

苦虫を噛み潰したようなラーグの返答に、若き皇帝はにっこり．．．と、邪気のない笑みをこぼした。

いや、邪気がないなどありえない。

この黒き帝国を思うがままに支配している男が、純粋な恋などするものか。

何を狙っている。

あの方を利用しようというのか。

腸の底で怒りが渦巻き、臓腑を燃えつくしそうだったが、ラーグは努めてそれを押さえつけ、抜き放っていた剣を下げた。

「陛下！！」

そのとき、テラスの後方から甲高い声がした。

皆の意識がそちらに向き、転がり出てきた見目麗しい子供2人に視線が集中する。

「姫さまが！」

「姫さまがいらっしゃいませんっ！！」

ふたりは瓜二つの外見で、肌が透けるほどの薄絹を身にまとったきりだった。

むき出しの手足は寒そうで、一瞬ぶると震えたが、それはおそらく寒さのせいというよりも、この状況に慄いた為だろう。

明らかに、後宮勤めの子供たちだ。

その淫らがましい服装に、ラーグは再び剣の切っ先を振り上げた。欲求に駆られたが、それより先に、2人の言葉の意味に息を飲んだ。

あの方が、いらっしゃらない。

つまりは、捕らわれの状況から、どうにかして逃れたのか。

それよりもよもや、他の何者かの手に落ちたということはあるまいな……

ラーグは、振り返った皇帝の、強張った表情に気付いた。

再び沸き起こってきた感情は恐怖。

あの方を、失ってしまうかもしれない。

あの方を、奪われてしまうかもしれない。

考えただけで、全身から冷や汗が吹き出た。

22 皇帝の恋2（後書き）

文章が不本意な感じがするので、後日推敲入れるかもです。

・・・陛下の背後に薔薇の花びらを散らせてあげてください^^；

23 皇帝の恋3

その時、一翼の影が月光を遮った。

帝国の勇壮な牙城を見下ろす、巨大な翼竜。

緑色の巨軀に、月の光を浴びるのははまだ若い雌だ。

うるるるゝん

咆哮とはまったく違う、甘やかなその声に、神殿騎士を騎乗させた翼竜たちは一斉に耳をそばだてた。

ラーグは、このようなところまで飛来してきた野生の翼竜に、若干の驚きをもって顔を上げた。

竜にとって、人間の国など地上の些事に過ぎない。

神の使役として神殿に従っているものもいるが、多くは飼いならせない野生の獣。

国境も、富も、地位や権威などもあずかり知らぬ。

しかし、人間の多く住む場所は、彼らのテリトリーではなく、単独で姿を見せるなど、滅多にあることではないのだ。

るるるるるるゝ

まあるい声が、甘く、深く……殺伐としていた王城に響き渡る。

若い獣たちは、美しい雌の呼び声に恭しく耳を傾け。

その唄に、巨大な目をきらめかせた。

エメラルドグリーンの翼竜は、長い鬣を優美になびかせながら、塔の上をしばらく滑空していたが。

やがて、来たときと同じように、悠然とその場を去ろうとした。

ラーグは、のそりと身体を起こした己の騎獣を振り返った。

赤い大きな目が、じっとラーグを見下ろす。

言葉はない。

しかし、確かにそこに通じるものがあつた。

ラーグは、はっとした。

そして、遠ざかっていく野生の翼竜を目で追った。

「モリス！」

「………はっ！」

一番近くで旗持ちをしていた己の副官が、見事な操綱で翼竜から降りることなく距離を詰めてきた。

その距離は、ラーグが手を伸ばせば竜の頭に手が触れるほど。

自身の身長の数倍以上も大きな禁軍旗を持ち、ここまで建物に接近した状態で滞空させるなど、騎士はもちろん翼竜のほうにも相当な技量と互いへの信頼関係が必要だ。

ラーグは羽ばたきによる風圧に目をすがめ、もう一度、彼らの背後に遠ざかっていく野生の竜に視線を向けた。

とっさに、己自身で騎竜に飛び乗りたい欲求に駆られた。

本能在、そうしろと叫ぶ。

皇帝など、帝国軍のことなどすべて放り出して、夜空を駆けていく。

しかしラーグは、将たる責務を思い奥歯を噛み締めた。

「2個小隊で彼女を追尾」
あの竜

そつと、帝国側には聞き取れない音量で命令を発する。

癖のある栗色の髪を、きつちりと兜に押し込めた神殿騎士は、ちらりと遠い緑色の竜に目を向けた。

「見失うな」

「………」

「あの方が、いらつしやるかもしれない」

兜の下で、茶色い目が鋭く光るのが見えた。

「了解しました」

彼は常にもの静かで、周囲と争うことのない温和な質だと思われるが、ラーグは己の副官が強い信念と不屈の心の持ち主だということを知っている。

必ずや、こちらの信頼に応えてくれるだろう。

そつ、心の底から思っているというのに………

「申し訳ない、將軍。帶剣を預からせてもらってもかまわないだろうか」

帝国の赤の將軍に声を掛けられても、ラーグはすぐに返事をする事ができなかった。

遠ざかっていく副官たちの騎影を、じっと見送る眼差しには苦いものが含まれていた。

務めなど、知らぬ。

責任など、知らぬ。

すぐにも傍に佇む巨大な翼竜に飛び乗って、明るい満月の光を浴びて駆けたい。

あの方は、ご無事だろうか。

恐ろしい思いをしていないだろうか。

ラーグは直感的に、すでに倫太郎がこの城の中にはいないのだと知っていた。

あの若い雌竜は、あの方のことを知らせにきてくれたのだと察していた。

しかしそれを、恐ろしいほど血の気が薄い顔をしている皇帝に教えてやる気はなかった。

今は、この事態を引き起こしてくれた「落とし前」を、どう付けさせてもらうか……だ。

同じ機会があれば、目の前の紫衣を身にまとった青年は、また同じことを企むかもしれない。

二度とそんな気を起こさないよう、しっかりと話を付けておかなければ。

ラーグは薄闇に見えなくなった翼竜の一団から目を引き離れた。

「將軍？」

「お断りする」

彼は己が負った義務を、これまでにないほど重荷に思いながら、八つ当たりとばかりに目前の巨漢を睨んだ。

「言っておくが、此度の非はそちらにある」

内心のささくれ立った思い同様、ラーグの声は抜き身の刃のごとく冷淡だった。

「我らに向けて矢を放った後に、剣を捨てるとは如何に」

「………そ、それは」

「謝罪を受けるべきお方はおひとり。我らが主の許しなく、振り上げた剣をおろすわけにはいかぬ」

倫太郎なら間違いなく、当惑の表情で諫めてくるだろうとは思ってたが、彼女の無事な姿を見るまでは、この布陣を解くつもりも、警戒を緩めるつもりもなかった。

「………詳しい事情をお聞かせいただこうか」

後宮の子供たちに向かつて、何やら強張った表情で詰問していた皇帝が、ゆっくりとラーグを振り返った。

知らせに衝撃を受け、青ざめていた表情は、今なお血の気が薄い。しかしそれ以上に、温和そうな目じりの端に浮かぶ怒り。

穏やかな外面を剥ぎ落とした、あまりにも明瞭な激怒の色。

ラーグは改めて紫衣の青年への警戒心を強めながら、しかし彼の視線に怯むことはなかった。

「あのお方がいらっしゃらないとは、どういうことか」

とても強大な帝国の主に向けた口調ではなかったが、改める気はなかった。

「よもやトルタは、神殿と全面的に争うおつもりか」

周囲の帝国兵たちは、とんでもない！とばかりに息をつめた。

ラーン神殿は、この大陸を含む世界の大部分の人々の心に、信仰の対象として深く深く根付いている。

それを失うことは、魂の根底を揺さぶるようなものだ。

しかし若き皇帝は、ラーグからの「神の庇護を失うのか」という問いかけに、表情を変えることはなかった。

「………必ず無事に見つけ出す。髪の毛一筋とて、傷つけさせはせぬ」

むしろますます表情を怒りに染め、穏やかそうな造りの顔を、ま

まったく別物のように歪めていた。

「疑うのならば、剣はそのまま持っているがよい。翼竜の布陣を解く必要もない。……姫の騎士たちが、我らを傷つけることはない」と信じている」

「今の我々の間に、信義なるものがあるか？」

自力で脱出したのか、新たな何者かによつてこの城からさらわれて行ったのかは不明だが、倫太郎の無事な姿を見るまでは、目の前の男たちは敵だった。

そして、敵に向けて手を緩める理由などなく。

ますます困惑の色合いを強める帝国軍人たちの視線を、ラーグは平然と撥ね付けた。

激怒に顔をゆがめていた皇帝が、そんな彼をまっすぐに見据え。そして、琥珀色の双眸がすつつと細められる。

「……姫を、連れ出した者はわかつている」

「ほう」

「我が忠実な僕だと思っていたのだが……どこの首輪をつけられていたのか、調べる必要がある」

どうしても口先だけに聞こえるその言葉に、ラーグは小さく鼻を鳴らした。

「悠長なことだ」

「そなたの感情は理解する」

敵意には敵意を返されるかと思っていたが、目の前の青年はさすがに理性的だった。

内心どう思っているにせよ、神殿側と真正面から喧嘩をするつもりはないらしい。

「しかし、それにかまけて時間を余計に費やすわけにはいかぬ」

つまりは、黙ってみていると言いたい訳だ。

ラーグはますます冷やかな眼差しで、年若い皇帝を睨んだ。

「ならば急ぐことだ、紫衣の君。この一秒、一分の間に、あのお方に何者かが汚らしい手を触れぬとも限らない。そんなことがもし

あれば………」

「殺してやる」

おどろおどろしい、とても言いたくなる声色が、一見温和そうな青年の唇からこぼれるとは思わなかった。

青ざめた表情は硬く。

怒りに震える唇からは、ギリリと奥歯を噛み締める音が聞こえるほどで。

「たとえ神がお赦しになろうとも、余は許さぬ」

そんな彼を目にしたことがなかったのだろう、周囲の帝国人たちが、ぎよつとした表情で己の主人を見ていた。

「一族郎党、妊婦から赤子に至るまで、この手でバラバラに引き裂いてくれるわ」

これが、この男の素顔か。

幾分冷静さを取り戻したラーグは、無言で皇帝の凍て付くような怒りを眺めた。

穏やかで、優しい外見は、とすれば周りの人間を油断させる。しかし、単に優しいだけの人間が、この地位まで上り詰めることなどありえないのだ。

特に、凄惨だった兄弟間の争いを思えば、凡庸な男という仮面を纏った彼が、そのまま見た目どりの男であるはずもなかった。

ラーグは、怒りも露に踵を返した青年の後姿を、無言で見送った。あの若い皇帝は、真実、倫太郎の身を案じているのだろう。

しかし、彼がしでかした事を赦すつもりなどまったくないし、帝国側の調査を黙って見ているつもりもなかった。

「ホーエンハイム、ニコラス、ファルコ」

「………はっ」

上位騎士たちの名前を呼ぶと、即座に返事が返ってきた。

禁軍に配属される前からラーグの部下で、能力的にも申し分のない連中だ。

「アルカディウス帝のお役に立って来い」

「はっ」

ばさり、と小型の翼竜の羽ばたきが聞こえた。

竜の背から飛び降りてきて、テラスに降り立ったのは、ラーグがよく見知った男たち。

彼らは己の翼竜が高度を上げて遠ざかっていくのをチラリと見送って、改めてラーグに敬礼をした。

「……目と耳をよく開いておけ。我らを謀^{たばか}り、あの方を遠ざけようとするかもしれん」

「了解です」

ラーグは、彼らの姿が見えなくなるまで、じつとその背中を目で追った。

もしこれが謀略の類であるならば、いくら帯剣していたとしても、ホーエンハイムたちが無事にこの城から出てこれるとは思えない。

彼らに命を掛けさせるこの判断が、果たして正しかったのかと逡巡したもの、それ以上思い悩んでも仕方がなかった。

ラーグは己の翼竜に向き直り、その巨大な顔に手を乗せた。

今夜は、このテラスを本陣として待つしかなさそうだ。

それが仕事だと思いつつも、することがある連中をうらやむ気持ちがおさまらなかった。

23 皇帝の恋3（後書き）

面白くない。書いてる自分でも面白くない^^；
文章に潤いがないというか・・・
早く能天気なリンちゃんに会いたいです！

24 皇帝の恋4

彼女がいない。

いない。

いない。

皇帝アルカディウスは途方に暮れた表情で、乱れた寝所を見据えた。

巨大な天蓋付きのベッドには、鮮血。

かのひとが流したその印を、目に刻み込むように見つめる。

何度見回しても、いないものはいなくて。

ズキズキと、心臓が痛んだ。

喪失感で、動けなかった。

「・・・・・・血、ですね」

近習たちの咎める目をものともせず、後宮の奥深くまで土足で踏み込んできた神殿騎士が、感情を覗かせない淡々とした声で言った。3人のリーダー格らしき金髪の神殿騎士は、どちらかというと小柄で、騎士というよりも文官風の、穏やかで温厚そうな外見をしていた。

若い頃はさぞかし引く手数多だったろうと思える、端正な容貌。

猛々しいという言葉からは程遠い雰囲気ながらも、その青い目は抜き身の刃のように鋭く、冷やかで。

「あの方を、傷つけたのですか」

居心地悪そうに付き従っていた赤と黒の将軍が、騎士のそのひと言に息をつめた。

金髪の騎士の背後で、大柄な2人の騎士が腰の帯剣に手を掛ける。

「この血は、あの方のもの・・・・・・ですね？」

言葉遣いは丁寧でも、「何しやがったんだクソ野郎！」と思っていることがありありとわかる、剣呑な声色。

アルカディウスは、無意識のうちに立ち襟の喉元に手を当てた。

思い出す、甘い声。

鮮やかにきらめく、翠色の双眸。

触れた髪は柔らかく、恭しく押し抱いた小さな手は、思い返すだけでも心臓が高鳴るほどに、ほっそりと華奢で。

「余が傷つけるわけないであろう」

孤高の皇帝である彼を、ひと目で虜にした。

「愛しい薔薇」

愛らしく美しい見た目だけではなく、その声、言葉、眼差し。

「余の愛する小鳥」

そこに存在したのだ、という記憶だけで、大トルタの皇帝を完全に支配してしまう。

まるで鎖でがんじがらめにされたようだった。

息をすることさえままならない。

瞬きひとつにすら、許可を求めたい。

「唯一無二の……我が支配者だ」

忠実な家臣たちが驚愕に息を飲み、神殿騎士たちも意表を付かれたように目を大きくするのがわかった。

しかし、何を思われても構わなかった。

握り締めていた手を、離してしまった自分が悪い。

その足元にひれ伏し、つま先に口づけをし、永遠の愛と忠誠を誓えなかったことが悔まれてならない。

シクシクと痛む胸に、手のひらを押し当てた。

心臓を縛る鎖が、緩んでいくのを感じる。

彼女との距離が、開いているせいか。

あの術が、切れ掛かっているせいか。

アルカディウスは必死でその鎖の端を掴んだ。

離したくない。

離されたくない。

これがここにある限り、彼女と心がつながっている。
彼女の鎖で支配されている。

なんと・・・・・・・・心地よい感覚か。

「ザッハーク」

王室筆頭魔道士の名前を呟くと、傍らで空間がたわむのがわかった。

ここは、あらゆる魔法が効果を失う結界の内側である。

しかしそれにも例外があった。

後宮の主であるアルカディウスが、名前を呼んで許可した者。

あらかじめ通行手形となる宝具を身につけている者。

その二つの条件を満たした場合にのみ、結界内での魔法が効果を
持つのだ。

ふわりと、後宮の奥深くに現れた黒いフードの魔道士は、この場の異常な雰囲気に対し引いた様子だったが、滑らかな動作で膝を折った。

「・・・・・・・・我が君」

お呼びになりましたか？と囁く声は、かろつじて主に聞こえる程度の音量で。

性別が男であるということ意外、年齢も、容姿も、定かではない。

「カルエラが裏切った」

窓際に落ちていた長剣を差し出すと、魔道士は少し首をかしげてそれを受け取った。

「・・・・・・・・彼が、ですか？」

信じがたいのはアルカディウスも同様だった。

あれは、皇帝の剣だ。

幾度もその身を血に染めて、先代皇帝の代から揺るぎない忠誠を誓ってくれていた。

厳しい掟と、皇室への誓いに縛られた一族。

裏切りとは、一番遠い場所にいると信じ込んでいたが・・・・・・・・

「兄上の命令かもしれん」

黒將軍が、ひゅっと喉を鳴らして息を飲んだ。

彼の兄は、今もなお第4皇子カイザードに従っていて、セイラン

王国に亡命中なのだ。

「どの兄上さまでしょうか」

「……………それを調べるのがお前の仕事だ」

「かしこまりました」

「あれの先代を呼び出せ」

黒いフードで覆われた頭を深く下げ、ザッハークは姿を消した。

アルカディウスは、空気のように溶けていなくなった腹心を見送って、改めて傍で控えているふたりの後宮仕えたち目を向けた。

びくり、とふたりの華奢な体軀に震えが走る。

後宮に出仕しているだけあって、見目麗しい子供たちだ。

手打ちにされることも覚悟の上で、後宮を抜け出し、テラスまで駆けて来た心意気も良い。

しかし、そこに裏があるかもしれないと考える程度には、アルカディウスは用心深かった。

「誰に仕えている？」

「……………」

若いふたりは震え上がり、互いにすがるように寄り添った。

「お、黄金の姫さまに……………」

ようやく返した答えに、もちろん満足などできない。

「ならば何故、側を離れた。扉の前に控えているべきだろう」

「皇后さまに、御用を言い付けりました」

「ひ、姫さまについて、話せと申し付けました」

皇后……………ではなく、正確には皇太后だ。

先代皇帝の正妻で、いまなお後宮の主人然として居座っている。

もともとは隣国の王女で、死んでしまった長兄ラヴィードの生母でもある。

アルカディウスが帝位につくの尽力してくれた恩もあり、後宮で勢力を伸ばしているのを黙認してきたが……………

「なるほど」

子供たちが、「ひっ」と悲鳴をもらして震え上がった。

子供たちだけではない、彼に忠節を誓う將軍たちも、敵意を秘めた眼差しの神殿騎士たちも。

誰もが大人なり小なり驚愕の表情で、アルカディウスの顔を見ていた。

それまでは慎重に隠し、押さえつけてきた。

他者を油断させる穏やかな外見が、彼の武器のひとつでもあった。しかしそれをかなぐり捨てて、アルカディウスは酷薄さのままに薄く唇を歪めた。

もはや、外面の良い仮面を被っている余裕などなかった。

24 皇帝の恋4（後書き）

人の良い優しいお兄さん風な外見の陛下は、敵と定めたものには酷薄で、けっこう冷淡な性格のようです。

しかも………Mだし（笑

リンちゃん限定ですが、縛られたくて、支配されたくて、足蹴にされたくてたまらないようです^^;

次回、ようやくリンちゃん登場です。まだ森の中ですけど

25 森の中1

人買いどもが使っていた馬車は、遠からぬ水場の側に停められていて、そこにはいくらかの予備の衣類が積まれていた。

めかしこませる時用だとかで、意外と小奇麗なものがそろっている。

帽子から貫頭から、下着に靴下に靴まで。

少年用のそれらは、胸とか尻とか、いろいろと窮屈な部分もあったが、おおむね倫太郎が満足のいくシンプルで実用的なものだった。豪華さのかけらもない地味な装いに、カルエラは不満そうな顔をしている。

いつまでも後宮仕様のドレスを着続けるよりはマシだと思うのだが、上流階級の生活をしていた彼には、ゴワゴワする服はさぞかし着心地が悪いに違いない。

「に、似合ってるよ」

「……ありがとうございます」

「髪は、後でひとつにくくつたら？」

彼の眉間からシワが消えないのは、袖を通した服のあまりにも強烈なおいのせいだろう。

あの男たちの着古した衣類は、長期間洗われた形跡がなく、そばにいると思わず眉をしかめたくなるほどムツと濃い体臭がするのだ。着ている本人はもっと、鼻が曲がりそうにちがいない。

大人の男である彼には、もちろん子供用の衣類は小さすぎて、着替えられるものはそれぐらいしかなかったのだ。

「ほかのを洗って、キレイにしよう。明日中には乾くよきっと」

「いえ、お気使いなく」

何なら呪を使って、水分を飛ばしてもいい。

やったことがないので、下手をすると服を破いてしまったりするかもしれないが、これだけの枚数があるのだから、調整すればなん

とかなるだろう。

倫太郎は、あまりにも強烈な臭いに却下された服を腕に抱えた。顔が近くなると吐き気を催すほどだったが、息を止めてなんとか小川まで走ろうとした。

距離的には、荷台を降りて数十歩といったところだ。

真横といっても良い。

「リインさま！」

慌てたカルエラの制止も聞かず、倫太郎はとにかく腕に抱えた臭気のかたまりを何とかしたくて身を翻した。

思い思いのところに腰を下ろし、解放された安堵に放心していた少年たちが、幌馬車から飛び出してきた倫太郎にギクリと身を強張らせる。

「・・・・・・あ！」

怖がらなくても大丈夫だと、微笑みかけようとしたのだが、それに気をとられてゴツゴツとした岩に足を引っ掛けてしまった。

「リインさまっ」

まだ荷台にいたカルエラが、慌てて飛び降りてくるが、間に合わない。

倫太郎は、腕の中の臭い服を周囲にばらまきながら、顔面から岩肌につつまむしかなかった。

「・・・・・・っ」と

ぐい、と横から腕を引かれた。

思いのほか強い力で、体重の軽い倫太郎のバランスは保たれた。顔面衝突を免れたのだと悟ったのは、それから更に数秒経ってからだった。

「・・・・・・あ、ああ、びっくりした」

「大丈夫ですか？」

変声期もまだな、少年の声。

恐る恐る息を吐き出して、振り返ると、生々しくも痛ましい傷跡をさらした少年がそこにいた。

名前はカイル・バレンス。遠い田舎にある荘園の出だと言うが、売られるか攫われるかする前までは、きちんとした教育を受けてきたのだろう。

「う、うん」

こんな幼い、10歳になるかならにかの年なのに、につこりと笑う表情は男らしかった。

酷い傷跡を隠そうともせず堂々とむき出しにし、じっと倫太郎の顔を覗きこむ目の力は強い。

身長は倫太郎の胸の辺りほどしかなく、肩も腕もなにかも華奢で。

思わず守ってあげなければ！と思うような子供なのに、壮絶な顔の傷と強い眼差しが、周囲の少年たちと一線を画していた。

「よかった」

弟を亡くしたばかりだというのに、気丈だと思う。

もし自分が、弟の章太郎を目の前で失ったら、彼のように笑えない。

恐らく何日も、下手をするともっと長い期間、ふさぎ込むに違いないのだ。

少年は倫太郎の腕を掴んでいた手を放し、川原に散らばった衣類を集め始めた。

その横顔に、悲嘆にくれているようなところはまったく窥えなかった。

「あ、俺がするよ！」

「任せてください、得意ですから」

悲しみを感じさせない、穏やかな笑顔が、むしろ痛々しい。

倫太郎は年上として何とかしてやりたいと思ったが、気丈に振舞う彼に必要な以上の干渉は逆効果なのだろう。

冷たい水に足首までつけて、ジャブシャブと服を洗い始めた背中
は小さい。

倫太郎は、無言で靴と靴下を脱ぎ捨てて、その隣に並んだ。

「リインさま！」

背後で、カルエラの制止の声が聞こえた。

振り返ると、若干の違和感がある男装姿の彼が、盛大に顔を顰めながら駆けて来た。

「そんなことはなさらなくとも……足のお怪我を手当てしたばかりなのに」

ドレス姿のときは、服装に似合わぬ男性的口調がミスマッチだったが、本来の男の格好をしていても、柔らかな口調がなんだか妙な気がした。

「もう痛くないから」

「冷たい水でお体が冷えてしまいます」

「そうです、子供が産めなくなったらどうするんですか。川から上がって、温かくしていてください」

「子供が産めなくなる」というのは、この世界の女性にとっては一大事なのだろう。

おそらくは慣用句的な言いまわして、目の前の少年は深い意味を含ませて言ったのではない。

しかし倫太郎は、ひどく胸につまされる思いがした。

悲しいというか。

改めて、現実を突きつけられたというか……

「リインさま」

カルエラが、両手を伸ばして倫太郎を小川から引き上げた。

まるで子供のように、両脇を持たれて軽々運ばれて。

大きな岩の上に、そっと丁寧に置かれると、まだ名前も知らない大人しげな少年から毛布を渡された。

拒絶するのも今さらな気がして、倫太郎は「ありがとう」と小声で言っただけに羽織り、視線を濡れた足先に据えた。

華奢な足だ。

骨が細く、色も抜けるように白く。

自分の足のはずなのに、つま先に並んでいる貝殻のような小さな

爪が、まるで作り物のようだった。

跪いたカルエラが、どこから取り出した乾いた布で、そつと倫太郎の足を拭う。

ひどく擦りむいていた足裏が、ピリピリと痛んだ。

「もう一度、軟膏を塗っておきましょう」

この世界は、太古の濃厚な魔力で満ち溢れている。

しかし、多くの人間はそれを使う術を知らず、恩恵を預かつてはいない。

数少ない才能に恵まれた魔法使いか、生来の異能に恵まれた者が、その一角をほんの少し拝借しているにすぎない。

倫太郎は、真剣な表情で足裏の傷に薬を塗っている青年を見下ろしながら、カイルの顔の刀傷を癒した感覚を思い出す。

できるかもしれない。

わざわざ目を向けなくとも、圧迫感すら覚えるこの力。

いや、できるかもしれない……ではなく、できるのだ。

自分は、致死レベルの怪我であっても、治すことができる。

治す、というよりも、治癒時間を大幅に早送りする感覚。

人間が誰しも持つ、傷を塞ごう、生き延びようとする力に、魔力で後押しをする。

手のひらに残るこの感覚に、倫太郎はひどく怖ろしいものを感じた。

こんな力が、あってもいいのか。

人間が持つべきものではないのではないか。

「早く村に向かって、治療師を探しましょう。この程度なら小銭を出せば即座に治せます」

「……いいよ。自分でもできるし」

明らかに気落ちした倫太郎の声色に、カルエラは心配そうに顔を上げた。

「大した怪我じゃないから」

そう言いつつも、自分で自分の怪我を治そうとは思わなかった。

改めて、溢れかえる力の奔流に恐怖を覚える。

たった一人で、一族から引き離されて。

両親も、弟もいない。

生意気でかましい従姉妹たちも、頼れる師匠もいない。

ほとんど手付かずの、吸う空気にすら含まれる濃厚な魔力。

まるで、この惑星すら吹き飛ばせる火薬庫の前に、ひとり立って
いるかのような感覚だった。

心細くて。

寂しくて。

無意識のうちに小さく震え、自身の肩を抱きしめた。

25 森の中1（後書き）

ドジっ子リンちゃん。

26 森の中2（前書き）

ぼちぼち再開します。

26 森の中2

とはいえ、倫太郎には深く悩んでいるほどの時間はなかった。

人買いたちがこのような深い森に踏み入っていたのは、そこが街道だからでも、抜け道だからでもない。

あろうことが、間抜けな商隊からこっそり売り物の少年たちを盗み出し、逃亡中だったというのだ。

もちろんいくら間抜けだからといっても、これだけの人数の少年たちを盗まれて、その商人が黙っている訳がない。

カイル少年によると、追っ手がこちらを見つけ出すのも時間の問題だということだった。

「もうすぐ日が昇ります。急ぎましょう」

カルエラは最初、少年たちと一緒に連れて行くことを渋った。

しかし倫太郎には、年端も行かない子供たちを森の中に放置するなどできなかった。

そろって整った容貌をしている彼らが売られていく先が、娼館だと想像がつくだけになおさら。

「……………ごめんね」

「あなたが謝ることではありません」

「うん、でも……………カルエラには迷惑だよ」

「あなたからの頼みを、迷惑だなどと思いませんよ」

ゆるやかに眦を緩める彼は、男前だと思う。

まあ多少女性的な雰囲気はあるものの、持ち前の美貌がそういうのもアリかも……………な雰囲気には仕上げている。

長い髪を、しっかりと首筋で結わえ。

長剣を腰に佩いている姿は一種独特の雰囲気だ。

つまりは宝塚の男役みたいな、きらきらしい美男な感じとでも言うか。

「……………馬車は捨てて行く。各自荷物をまとめて、準備を」

「はい」

カルエラの指示に、カイルがリーダーシップを取って動き始めた。元々それほどの私物はなかったのだろう。

やがて少年たちは旅装束のマントを身にまとい、各自集まってくる。

「行きましょう」

そして当然のように倫太郎はカルエラに抱き上げられた。

自分で！と言いそうになったが、靴すら履いていない足を見て唇を閉ざす。

カイルが腕に持っているのが、先ほど洗っていた濡れた服だと気付き、申し訳なく思ったが、それを口にするより先に、にっこりと微笑まれた。

「靴をお持ちしますね」

小柄な少年には荷が勝ちすぎる大きさの荷物の上には、なんとか見繕っていた倫太郎用の靴がちょこんと置かれている。

倫太郎ははるか年下の少年に氣を使われたことを情けなく感じながら、眉尻を下げた。

「濡れた服は置いていこうよ」

「乾けば皆の着替えになります」

「そんな余計な荷物を持って、森を歩けるの？」

「皆で手分けしますから」

肌寒い気候なので、濡れた服はさぞかし冷たいだろう。

「せっかく洗ってくれたのに悪いけど、邪魔なものは置いていこう？」

倫太郎は手を伸ばして、少年の頭に触れた。

小麦色の肌に似合う赤茶色の髪は、彼自身の血がまだ完全には落ちていないのだろう、若干ごわついていた。

それでも、子供らしい体温の高さと、柔らかな髪質だった。

一瞬ピクリとカイルの頭が揺れる。

倫太郎がそれでもなおそっと撫でていると、やがて諦めたように

小さく上下した。

「わかりました。ですが、靴は僕が」

足元に濡れた服を置いた少年が、上に乗っていた靴を大切そうに両手で持った。

「さあ、行きましょう」

カルエラが、ずっとカイルから離れて歩き始めた。

倫太郎は、離れてしまった子供の温もりを惜しみながらも、小さく頷く。

「とりあえず西に向かいます。サヴァンの街がここから徒歩で2・3日のところにあるはずです。あまり街道には近づかないほうがいい。小さな村にも。商隊の者は血眼になって彼らを探しているはずです」

「………うん」

「彼らのことは、サヴァンの修道院に託しましょう。あそこには有徳だと評判の枢機卿がいらっしやいます」

「それで、また売られたりとかしないのかな」

「修道院は俗世に権限がまったくない代わりに、神殿よりもさらに不可侵とされる領域です。いかな娼館でも有力な商人でも、犯罪者や逃亡奴隷であろうとも、いったん保護下に入ったものは守られるはずです」

「は、犯罪者でも？」

「修道院で保護すると決定が下されれば」

倫太郎は目を瞬かせた。

法治国家で生まれ育った身には、奴隷や娼館ですら現実味が薄いのだ。

犯罪者ですら守るという修道院とやらは、完全に理解の範疇から外れていた。

だがなんとなく、中世のヨーロッパのようなイメージで、断崖絶壁の上に立つ古びた城を連想し、そこに住まう清貧を旨とする修道士たちを想像する。

「その……修道院に行けば、彼らは娼館に売られずに済む？」

「リンさまが直々に枢機卿に託せば、必ずや」

倫太郎はなんとか納得して、頷いた。

どのみち、土地勘もツテも何もないので、どうすればいいかなどわからないのだ。

カルエラを信じるしかなかった。

「……みんなも、それでいい？」

修道院などと、倫太郎の価値観からいえば凄まじく辺鄙で閉塞的なイメージで、若い少年たちを預ける場所に相応しいようには思えなかったが、将来に渡ってずっと倫太郎が面倒を見るわけにもいかないのだ。

「姫さまのお心遣いに感謝いたします」

「好き好んで娼館に就職したいヤツなんていませんから」

比較的としかさの、それでも10になるかならぬかの黒髪の少年が、半ば涙ぐみながら言った。

「俺、オヤジに売られたんです」

カルエラの腕に抱かれたまま、倫太郎は傍らを歩く少年を見下ろした。

ひよろりとした印象で、カイルよりも背が高く、艶やかに整えられた髪は背中まである。

「オヤジは俺の異父妹を引き取りたくて、金を作る為に俺を」

「妹さんがいるの？」

「父親違いなので、会ったことはありません。その子の実父が戦争で死んで……後見役になれば、将来も安泰だって」

少年はクスンと鼻を鳴らした。

「競争率が激しいから、金が要るそうです」

歩きながら、ぽつりぽつりと聞かされる身の上は、平和な日本で育ってきた倫太郎には非現実的で、遠い物語のようだった。

だが、目の前にいる少年たちにとっては、夢でも物語でもなくて

もない。

現実に関に起こったことで、倫太郎に出会わなければもつと悪い事態に転がったに違いない事実だった。

目を背けてはいけない。

倫太郎は、そつと震える氣を吐いた。

このままこの世界で生きていくならば、ありのままの事實を受け入れなければいけない。

辛いことも、汚いことも。

ちゃんと真正面から見つめなければ。

綺麗なモノばかりを見て、安穩と誰かに守られて暮らしていくわけには行かないのだ。

「………そつか」

倫太郎は、黒髪を青年をじつと見つめて、小さく微笑みかけた。

勇氣付けるように。

何もできない自分だが、励まし応援する者がいるのだと、分かってもらえるように。

涙ぐんでいた彼は、倫太郎と目があうと、慌てた様子で涙を拭い、俯いた。

その顔は、ほんの少し赤らんで見えた。

「君も、妹さんも………幸せになれるといいね」

偽善的だと思う。

何も出来ないのに。

根本的に、何かをしてあげることなどできないのに。

「………あ、ありがとうございます」

真つ赤になった少年が、聞き取れないほどの小声で呟く。

倫太郎は、泣いたことが恥ずかしかったのだらうと思ひながら、もう一度、少年に笑みを向けた。

「ごめんね」

何もできなくて。

何の力も持つていなくて。

「…………姫さまが謝られることはありません」

倫太郎の身体を包むカルエラの腕に、力が入る。

「これは社会の仕組みです。根本的な問題の解決がなされない限り、どんな権力者にもどうしようもありません」

たとえひとりを救ったとしても、他の誰かが同じような悲劇に見舞われてしまう。

この少年たちが男娼として働くことがなくなっても、他の誰かがその仕事を強制されるのだろう。

「需要がある限り、男娼の仕事はなくなりません」

「……………うん」

倫太郎は思う。

もし自分が、こんな姿ではなく、日本で生まれ育ったままの状態
でこの世界に来ていたら。

貴重な「女」として大切に扱われることもなく、男娼として売ら
れるような目にあっていたかもしれない。

男である自分が、男の性の対象としては働かなければならない・

……

考えるだけでも、怖気が走る。

そう、望んでそんな仕事に付きたい者など、いないはずだ。

「……………全部救えるなんて思わないよ」

倫太郎は、カルエラにしか聞こえないほどの小さな声で囁いた。

「でも、この手の届く範囲。守れる範囲の小さいものたちを、不幸
な目にあわせたくないって思う」

カルエラの腕に守られている立場で、恥ずかしいことこの上ない
台詞だ。

羞恥心に駆られて目を閉じ、顔を伏せた。

臉の裏側に涙が滲んだのは、カルエラの服に残る凄まじい悪臭と、
ほのかに漂う香水の匂いが混ざって気分が悪くなったせいに違いな
かった。

「……………そうですね」

なので、そつと降ってきた声を聞き損ねそうになった。

目を開けて、自分を抱いて歩いている青年の顔を見上げたが、彼は何事もない表情で前を見ているだけだ。

しかし、聞き間違いではなかったのだと思う。

何故ならカルエラは、それから数日の旅の間、疲れ切ってる少年たちにそれとなく配慮してあげていたからだ。

歩く速度や、休憩や食事。

わかりにくいが確かなその優しさに、感謝したのは倫太郎だけではない。
はあるまい。

サヴァンの街に到着するまでの3日。

それは倫太郎にとっても、忘れがたい経験になった。

26 森の中2（後書き）

長らくお待たせして申しわけありません。
連載を再開します。

次、神殿騎士さまたちが出てくる・・・予定です。

27 森の中3（前書き）

再開と言った割に更新遅れてスイマセン><
更にもうひとつ、騎士さまたちはまだ出てきませんでしたTT

27 森の中3

それが夢だということは、すぐにわかった。

ふわふわと微妙に揺れる視界。

強制的に何かを『見せられている』感覚。

誰かの意図、というよりも、何かの意味が含まれた夢なのだということが、大した疑問もなくストンと胸のうちに落ちた。

焦点の合いにくい視線の先には、輪郭の定まらない『何か』が見える。

しかし、はつきりと『何』であるのかはわからない。

ぼんやりと見えるのは、暗い灰色の石のようなものと、それに囲まれた空間の中にいる人間らしき誰か。

倫太郎は夢の中で、そのぼやけた視界をなんとかしようと試みた。目を眇め。

首を振り。

ゴシゴシと擦ったりもしてみたが、重度の疲労時のような視界はまったくもってばやけたままだ。

そこにあるものに意味があるなら、見なくてはいけない。どうしても、それが『何』なのか知らなくてはならない。

倫太郎は居ても立ってもいられぬ焦燥感に駆られて、更に目をこじ開けて身を乗り出した。

そして次の瞬間。

ふっと、視界に鋭い裂け目が入った。

夢だとわかっていても、倫太郎は本能的に身をよじって避けた。長い長い金色の髪が、視界いっぱいひろがって。

ぱさりと聞こえた乾いた音。

あ………

きらめいた輝きが、落ちた。

っ！！

そして、見開いた視線の先には、紫色をした凍りつくような双眸が目が合った！・・・・・・と背筋が冷えた瞬間。ぐいっと腕を引かれるリアルな感覚。

「・・・・・・・・さま！」

落ちる！と、とつさに手を伸ばす。

本能的にすぐるものを求めて両手を差し伸べ、手に当たったものをギュウと握った。

「リインさま！！」

耳元で囁く声は美声だ。

程よく低音で、響きが良く、女であれば聞きほれるであろう色気を纏っている。

「御髪が！」

背中に回った腕で、強く抱き込まれた。

「何者がこのようなっ」

すっぱり包まれてぼんやりと感じるのは、安堵。

やはり夢だったのか、という思いと。

必死に守ろうとしてくれる腕の温もり。

「カルエラ・・・・・・・・あれ？」

倫太郎が現実に戻ってくるまで、たつぷり10秒はかかった。

ここが森の中の野营地であること、子供たちを連れて深い獣道を辿っていることなどを思い出すのに、更に10秒。

そして、足元に渦巻く長い毛の束に視線が落ちる。

「え？ 夢じゃなかった？」

髪になど特に思い入れのない倫太郎は、女の命ともいわれる髪を切られた衝撃などむろん感じるわけもなく、それよりも夢だと思っていた出来事が目覚めた後まで追ってきたことに驚愕した。

「ああ、守りが手薄であったことをお許しください。何者か知らぬが夢路を使うとは卑劣な！」

夢路。

倫太郎は、握り締めていたカルエラの服から手を離し、切り落と

されて短くなつた部分に触れた。

長すぎる髪は無造作にひとつに結わえ、フードの中に押し込んでいたのだが、いつの間にか紐が切れて肩から膝下までを無駄に豪奢に覆っている。

その一部が。

『夢』の中で切られた。

あくまでも、『夢』だと思っていたのに……………。

「……………夢、じゃない？」

いや、これは知っている。

他人の夢を媒介にして、思うが俥に力を振るう術なら知識として知っている。

もしかして……………一族の技と同じことをされたのか？

倫太郎は、恐怖を感じるより先に、興味を抱いた。

そう、この世界には一族と同じような能力者が存在するのだ。

濃厚なこの力を生まれたときから浴びるように吸い、魔法という術式を駆使して操る者たちが……………

どんな人々なのだろう。

どんな知識と技術を持っているのだろう。

「リインさま？ 大丈夫ですか？」

「え？」

どこか現実味に薄く、危機感のない返事をする倫太郎に、カルエラは気遣わしげな顔を向けた。

「とにかく場所を移しましょう。結界石を温存しておくべきではありませんでした」

街まではあと1日ほどかかる。

もう一泊分夜があるかないかの距離だということだ。

妖獣の群れや追っ手が迫ってきたときの為に、姿や気配を消してくれる結界の石をとっておいたらいいのだが……………

「失礼致します」

低く一声掛けられてから、ひょいと抱き上げられた。

倫太郎は、その移動手段に慣れてきた己に若干遠い目をしつつも、黙って身体のを抜いた。

とある部分（胸）以外はやたらと華奢で小作りなこの肉体は、元男の倫太郎にとっては怖ろしいほどに脆弱だった。

周囲の子供たちと同じように獣道を歩くことにすら息が切れ、鼓動が乱れる。

皆と荷物を分け合って持とうともしてみたのだが、すぐに腕がブルブル震えて使い物にもならなかった。

「出立だ、急げ！」

カルエラの指示に、この数日共に旅をしてきた少年たちは私語もなく素早く従った。

こんな風に、小走りにデコボコ道を走るなど、この体力では到底無理な話だ。

さほど筋骨隆々としていないわけでもないのに、倫太郎ひとりの重さなど苦にもせず走るカルエラの顔を見上げて、小さく溜息をついた。

まず最初にするべきなのは、体力づくりか。

やや冷たい風が吹く夜の森を抜けながら、倫太郎は流れていく景色に目を向けた。

抱かれて走るだけでも結構な疲労感を覚える。

こんな様では………駄目だ。

安全や平和とは程遠いこの世界で、生きていくための根本が欠けている気がする。

「………必ずお守りします」

物憂げな倫太郎の表情をどう読んだのか、カルエラが小さな声で言った。

「この命に代えましても必ず」

倫太郎は、伏せかけていた目を開けて、黒々とした森を見据えて走る青年を見上げた。

美しい男だ。

艶やかな黒髪が闇に溶け、真っ直ぐ前を見据える双眸は切れ長の奥二重。

暗い森の中で輝くその瞳は、灰色というよりも銀色に見えた。まるで……そう、月のような。

綺麗な光。

きらきらと、わずかな光源を反射してきらめく。

無意識のうちに、見惚れていた。

同性の美醜になどこれまでさほど関心を抱いたことはなかったが、ここまで綺麗だと芸術品を見ている気になってくる。

その時。

「……っ!!」

倫太郎を抱いていたカルエラの腕が、ぞわりと鳥肌を立てた。

本能的な仕草で振り返り、来た道の方を見る。

同じように反応したのは、子供たちのうちの何人か。

倫太郎も、彼らを感じ取った『何か』が神経に障ったような気がしていたが、はつきりとその原因まではわからなかった。

「来ます」

倫太郎は、カルエラの声が一段と低くトーンを下げるのを聞き、思わず不安になってその腕を掴んだ。

「……お前らは下がれ。カイル、前に話したとおりにリインさまを」

「はい」

いつの間にか岩陰に下されていた。

低い位置から手を握られて、見下ろすと毅然とした表情の少年。

小麦色の肌の隻眼の少年は、何事も問題はないとも言つように、につこりと微笑んだ。

「結界石を使います。子供たちと一緒に一塊になって座ってください」

カルエラは、穏やかに呟いだ声で言った。

静かな声。

あまりにも穏やかなその口調に、倫太郎はますます不安になってカルエラの腕を強く握った。

「カルエラは」

「大丈夫です」

「・・・・・・一緒に！」

「カイル、急げ」

丁寧に、しかし毅然とした態度で腕を払われた。

倫太郎はなおも言い募ろうとしたが、小さな少年たちに腕を引かれて視線を揺らした。

そして再び目を戻したとき。

そこに、夜を具現したかのような黒髪の青年の姿はなかった。

27 森の中3（後書き）

カルエラ、カッコイ（オリエントラジオ風に・笑

28 森の中4（前書き）

戦闘シーンは苦手ですね。

映像は浮かぶけれど、文字にすればどうしても迫力に欠けてしまいます。

いつになったらそれを表現できる文筆力がつくんでしょうかね。

・・・・・・一生無理かも^^；

28 森の中4

カルエラは、ひそやかに息を吐いた。

すがつてくる細い腕。

揺れる翠の双眸。

正体も定かではない敵が相手だ、充分に気を引き締めて掛からなければならぬというのに、心の半分がかの姫の元から離れない。

文字通り後ろ髪を引かれる思いで、夜の森を駆けた。

しかし距離が開くたびに、心臓が妙な具合に軋む。

魂の奥底から、「離れるのは嫌だ！」という思いが溢れる。

こんなにも誰かに縛られてしまうなど、思ってもいなかった。

たったひとりの、少女だ。

たとえ心臓が驚？みにされるほどの容姿であれ、小さな、ほんとうに小さな女性なのだ。

「……リンさま」

我が姫。

その微笑を思い浮かべるだけで、温かなものが胸に満ちる。

氷のようだった自分が。

剣の主である皇帝にすら、義務としての忠誠しか捧げなかった自分が。

走りながら、魂が揺さぶられるほどのこの感情を、深く味わうように息を吸い。

薄く、嗤う。

「あの方の御髪おくしに無礼な真似をしてくれた御礼をしなくては」

カルエラは剣だ。

主の為にひそかに砥あがれた、一振りの剣だ。

その命令を受ければ、どんなことでもするし、どんな相手にでも刃を向ける。

主の身を脅かすものは、徹底的に排除する。

もはや抵抗する気も起きないほどに、細切れに切り刻んでやる。
目前に、敵。

カルエラは走る速度を緩めることなく、うつとりと唇に笑みを乗せながら剣を抜いた。

さあ………どれから始末しようか。

相手もカルエラの来襲を察していたのだろう、4人の男たちが戦闘態勢でこちらを向いている。

定石通りに一番厄介そうな相手から消していくことにして、端に立つ細身の男にまっしぐらに突進したのだが。

ふっと、視界をかすめたのは金色。

リーダーらしき中背の男が手にした、目にもまばゆい輝き。

それが何か、一瞬でわかった。

脳がそれを理解した瞬間、沸騰する怒りに意識が飛んだ。

「………下郎」

カルエラの唇からこぼれたのは、これまで出したこともないような低音。

「薄汚い手で触れるな！」

切りつけると同時に、避けられることがわかった。

それだけでも強敵だというのに、一番に屠るべき敵を見逃したが為に、嫌な気配が本能を焼く。

素早く飛びのき、森の茂みに肌を切られるのと、魔法の気配がカルエラの黒髪を巻き上げるのとは同時だった。

魔道士。

戦闘に特化した熟練度の高い術士はごく少数だ。

少数なだけに、敵に回すと厄介極まりない。

カルエラは、己の下手に小さく顔を顰めた。

一斉に襲ってくる殺気をいなしながら、やはり真っ先にこの男を殺すべきだったと、標的を細身の魔道士に切り替える。

「どこ見てるんだ、美人の兄ちゃん」

あの方の黄金の御髪を手にしていた灰色の髪の方が、ニヤニヤと

嫌な表情で言った。

「俺の相手をしてくれるんじゃないのか？」

「……へえ、マジっぴんさんじゃねえか」

ひよろりと長身の、赤茶色の髪の方が言った。

「娼館でも滅多とお目にかかれないレベルだな」

近い！

素早く距離を取るが、思いのほか手練れの一団だ。

これは手間取るかもしれないと、頭の片隅が警報を発する。

普段のカルエラであれば、引いたであろう。

撤退は恥ではない。

負ければ即死へとつながる世界では、生き延びることがもつとも大切なことから。

しかし、背後に守るものがある今は、一歩たりとも下がるわけにはいかない。

断じて、ここから先に通すわけにはいかない。

慣れない重さの剣を振りながら、慎重に敵との距離を測る。

ふつと脳裏に過ぎるのは、潤んだ翠色の双玉。

「………つと」

にやにやと笑っていた赤茶色の髪の方が、赤い筋のついた腕に顔を顰めた。

「意外と強えぞ」

「回り込め、俺が仕留める」

金髪のがつしりとした体格の男が、低いしわがれ声で言った。

カルエラは、その聞き覚えのある声にはっとして、魔道士から金

髪の方へと視線を向けた。

傭兵らしき、薄汚れた旅装の男。

顔を斜めに縦断する、醜い刃物傷。

しかし、その青い双眸は知っている。

直接の知己ではないが、日ごろ近くでよく見てきた一族特有の色合いだ。

「……ルファード卿」

やがて到達したその名前に、振り下ろされた重い剣の軌跡が如実にブレた。

「貴様」

「やはりそうか、落ちぶれたものだな」

カルエラは意図的に侮蔑の声色を作って嗤った。

「かつては帝国一の剣士と謳われた男が、人買いの手伝いか？」

「なんだよ、知り合い？」

凍りついたダイン・ルファードの脇から、長身の剣士が切りつけてくる。

カルエラは素早く避けて、動かないかつての近衛隊長の急所めがけて切っ先を振るった。

「何ぼんやりしてんだ！」

灰色と赤茶が2人係りでそれを防止しようとしたが、ダインはまだ動けず。

大きな標的は、カルエラにとって狙いやすい獲物だった。

「……ッー！」

利き腕の腱を絶つつもりの一撃は、若干それたものの深々とその肩を切り裂いた。

「チッ！ ジェロルド！ まだか！？」

灰色の髪の男が、フードを被った魔道士に視線を向ける。

もちろんカルエラも、魔道士の存在を忘れていたわけではない。剣を握っていないほうの手で、素早く短剣を投げる。

しかし一瞬遅く、なにやら術が発動していた。

魔道士を中心に、青白い光。

魔方阵がその足元に輝き、彼の腕の動きに合わせて次第にその輝きが増す。

カルエラは、即座に両腕で視界をガードした。

四方から飛んでくる氷の粒。

己に集中する魔法の刃が肉を削いでいくのを感じつつも、ここで

動きを止めれば死ぬのは自分だとわかっていた。

「ジェロルド！」

カルエラは、血まみれになりながらも魔道士を攻撃できる圏内まで踏み込んだ。

敵が仲間の魔道士に注意を促すが・・・遅い。

一瞬で、カルエラの剣が黒フードの男を袈裟切りにしていた。

いや、確かに避けられる距離ではなかったのだ。

「・・・・・・・・」

魔道士は、予想外の動きでカルエラの一撃をかわしていた。

正確に言えば、魔道士らしくない機敏な動きで真後ろに飛びのいただけだ。

無言のまま剣をかわした黒フードは、そのままススッと滑るように身を引いた。

迷わず追ったカルエラだが、仲間たちが間に割り込んでくる。

中年に差し掛かった年齢の、灰色の髪の男。

まだ青年と呼べる年齢の、赤茶色の髪の男。

前者は無精ひげの無法者風で、後者は人好きのするお兄さん風だ。どちらもカルエラの目には優れた剣士に見えたし、実際に打ち合ってみればまがい物ではない腕なのだと知れる。

魔道士である黒フードといい、かつては高名な騎士であったダイン・ルファードといい、一介の商人が囲い込んでいるにはレベルが高すぎる一団だった。

おそらくは、商品である少年たちを奪回する為に、雇ったのだ。

公的なギルドに依頼したのであればまだいい。

もっと質の悪いギルドである可能性も高い。

ふいに、カルエラはとつもない恐怖に見舞われた。

ギルドが少年たちの奪回を請け負ったのであれば、追っ手は彼らだけではないのかもしれない。

「・・・・・・・・ひとつ聞く」

切り結びながら、カルエラは灰色の双眸をギリリと覗き込んだ。

「夢路を辿ってきたのはその魔道士か？」

「……夢路だあ？」

3人の視線が魔道士のほうに向いた。

ぐぐぐ……と剣で押されながら、カルエラは黒フードがかすかに、しかし確かに横に振られるのを見た。

カルエラは素早く飛びのき、4人との距離を充分に取って再度尋ねた。

「夢路を辿って、その御髪を断つたのはお前たちではないというのか？」

「御髪って……コレか？」

短い灰色の髪の方が、懷に手をつ込んで、紙で挟まれた黄金の髪をつかみ出した。

無造作に……というよりも、ぞんざいに。

再びカルエラは激しい怒りと殺意を覚えた。

しかし、それを形にするより早く。

「……その話は、私も聞きたいですね」

唐突に、第三者の声が割り込んできた。

気配はなかったと断言できる。

カルエラだけではない、雇われの4人も同様に、ギョツとした様子で身構えている。

夜の闇の中から歩み出てきたのは、目にも鮮やかな白銀の鎧。

ささやかな明かりしかなくとも、目が痛くなるほどの白の法衣。

隠密とか、気配を殺すとか、そういう言葉とは真逆であるのに、何故気付かなかったのか。

「……なんでこんなところに神殿騎士が」

あつけにとられた赤茶色の男の台詞が皮切りだった。

森の中に、複数の気配。

しかもそれは、油断ならない存在感でもって、こちらを包囲しているのがわかる。

灰色の髪の方が、小さく嘆息しながら剣を落とした。

そしてしずかに両手を挙げる。

「神殿騎士がこんなにデキるなんて聞いてねえよ」

白い鎧の騎士はにっこりと微笑む。

栗色の髪と同じ色調の双眸は優しげで、誰もが神殿騎士と聞いて連想するであろう神の使徒の要素をすべて兼ね備えている。

しかし。

その穏やかで清廉とした外見にそぐわぬ、このゾワゾワとする気配は何なのだろう。

微笑を浮かべる双眸の奥に垣間見える、近づきたくない何か。

それが「怒り」なのだと思付いたとき、カルエラは死を覚悟した。

28 森の中4（後書き）

キャラクターが増殖しております^^；
自分でも覚え切れません（お馬鹿です><

29 森の中5

視覚が捕らえる印象と、双眸の奥の色合いとの違和感。

それに背筋を冷やした一瞬。

カルエラが逃れようと身を翻す間もなく、一気に意識が飛ぶほどの重圧がかかった。

それは物理的なものではなく、精神を圧迫し。

カルエラを含む5人はたまらず膝を付き、頭を抱えて呻いた。ビリビリと、頭の骨がきしむ。

上下の感覚も麻痺するほどに、凄まじい酩酊感で身体をまっすぐに保つことさえ困難だ。

光属性の魔法。

これがそうなのだと理解したのは、目がくらみそうなほどの聖なる気配が、こじ開けた視界いっぱいを支配していたからだ。

氷の刃で散々に刻まれた傷に、更に大量の塩をすり込んだような激痛が走る。

神殿の僧侶が好んで学ぶ属性だが、ここまで攻撃的なものがあるとは知らなかった。

軽く銀色の手甲を宙に伸ばし、特に長い呪文を唱えたわけでもないのに、発動した魔方阵は広範囲で、かつカルエラら5人を一度に膝を折らせる威力があった。

身体を丸くして痙攣する男が、カルエラの足元でくぐもった悲鳴を上げた。

灰色の髪の子。

恐らくは、この魔法展開の焦点なのだ。

カルエラは、かろうじて保った意識を繋ぎつつ、手が届く範囲に放り出された黄金の毛束をそつと両手で拾い上げた。

この魔法の主の怒りが、一際大きく膨れ上がる。

カルエラに、これまでも増して強い重圧がかかる。

神殿騎士が、この御髪に執着しているのだと頭で理解はしたが、灰色の髪の男のように、ささやかな重みすら感じない柔らかな黄金を手放すことはできなかった。

ぎゅっと目を閉じて、懷に大切に抱き込む。

脳裏に浮かぶのは、翠色の大きな瞳。

豊かに全身を覆う、豪華な輝き。

これは、あの方の一部だ。

神殿騎士とはいえ、敵か味方が判別しきれない状況で、やすやすと渡してしまうわけにはいかなかった。

「……………捕縛せよ」

朦朧とした意識で、そう命令する騎士の声が聞こえた。

圧倒的な聖魔法の印象とはかけ離れた、温和な声色だった。

ぼんやりと見開いた視界に、白衣の者たちが動き回る姿が映る。

やがて一際鮮やかな白銀の装束の騎士が、目前に膝を付くのが見えた。

「あのお方は？」

倒れている場合ではないと、一気に意識が浮上してきたが、身体が言うことを聞いてくれない。

「……………ご無事だろうか？」

神殿騎士の薄茶色の双眸が、真っ直ぐにカルエラの目を射た。

理由などない。

しかしカルエラは、この男は大丈夫だと思った。

人間の穢れたところなど飽きるほど見てきた。外面だけで判断するような甘さは、もっと若い頃に捨ててきた。

しかしこの数日で、理由のない直感が何度カルエラを揺り動かしただろうか。

美しい翠色の至玉。

そして実直な栗色の眼差し。

「……………この先の岩場で、結界石を」

視線が合って、ほんの僅かに顰められた眼差しが、カルエラの小

さな声を拾い上げて険しさを増した。

「子供たちが」

「子供？」

「その傭兵たちが追っているのは……人買いから逃れた子供たちです」

ぐつと腕をつかまれ、引き起こされた。

近づいた神殿騎士の容貌はごく凡庸なものだったが、浮かぶ眼光は強い。

「早く……お助けしてください」

カルエラは、再び意識が落ちそうになるのを必死で堪えた。

「夢路を使つて、御髪を削がれました。……別の追っ手がいる可能性が」

ヌルリとしたものが額を伝って落ちた。

それが血だとわかったのは、神殿騎士の白い手甲に赤い染みがついたからだ。

真っ白な装束が血で汚れるのにも頓着せず、栗毛の騎士はカルエラを抱え起こしたまま視線を他所に向けた。

カルエラは、両手で胸に押し抱いた髪を、更にぎゅうと握り締めた。

どうか、ご無事で……と。

ろくに信じたこともない神にすぎる。

そうするしか術のない己が不甲斐なく、口惜しい。

「お守りすると……誓ったのです」

先ほどで負った傷からの出血が夥しい。

「……どうか」

「任せろ」

穏やかで安定感のある声色だった。

カルエラは幾らかの安堵を感じつつも、爪を指に食い込ませて意識を喪うまいと戦った。

「すまんが、回復魔法は苦手だ」

「・・・・・・・・私のことよりも、あの方を」

「承知」

カルエラは、まだ若い神殿兵に身柄を預けられた。

慌しく去っていく白衣の騎士の背中を、見えなくなるまでじっと見送る。

——リインさま

カルエラの意識に最後に浮かんだのは、大きな双眸に浮かぶ涙。

怒ったように唇を震わせ、何か言いたげな黄金の姫君。

どうして怒っているのだろう・・・と、どこか緊張感の薄い戸惑いが、失神した彼の最後の思考だった。

遠くで幼子おさないが泣いている。

赤子のような本能に基づいた号泣ではない。

悲しそうに。

しゃくりあげる小さな声。

はっと目を開けたカルエラは、自らの身体に展開されている回復魔法に、全身が総毛立つのを感じた。

避けた皮膚が塞がり、血管が閉じていく。

生ぬるいというよりも、むず痒い。まるで・・・・・・・・皮膚の下に虫でも這っているかのような。

幼い頃からの馴染みのある感覚だった。

しかし、何時までたっても慣れない。

一瞬にして意識が戻って来ると同時に、泣き声は聞こえなくなった。

幻聴かと呼気を整え、首を振る。

それと同時に、現状を思い出して跳ね起きた。

「——ッ」

「傷はそれほど深くありませんが、出血が多すぎました。しばらくは安静に」

少年のようにまだ若い神殿兵が、カルエラの美貌から気恥ずかしそうに目をそらせながら言った。

「すいません、僕はまだ見習いで、ここまでぐらいいしか治療できません。傷跡は残らないと思いますけど……………」

「あの方は?!」

「主上さまですね。今モリスさまが……………」

主上さま、という呼称に疑問と違和感を覚えた。

話の流れから言って、リンさまのことなのだろうと思うが、神殿兵があの方を『主』や『上』などという敬称をもって呼ぶ理由がわからない。

しかし、カルエラがそれを言葉にして尋ねるより先に、慌しい気配が近づいてきた。

複数の、穏やかならざる足音が迫ってくるのを聞いて、身構えたのは少年兵も同様で。

2人して茂みのほうを注視していると、栗毛の神殿騎士が年かさの部下を左右に従えて現れた。

「もう一度聞く、あの方は岩場にいらつしやると言っただな?」

理知的で生真面目そうな神殿騎士が、眉間に深くしわを寄せながら言った。

その、尋常ならざる雰囲気、カルエラは顔面から血の気が引くのを感じた。

「……………まさか」

いらつしやらないのか?

カイルらと一緒に、結界石に守られ身を潜めているはずなのに。

「ま、まだ起き上がられては……………」

立ち上がるとしたカルエラに、神殿兵が制止の手を伸ばす。

案の定凄まじい眩暈に見舞われ、意識が揺れた。

ぐらりと傾いだ身体を支えたのは、その少年兵ではなく栗毛の神殿騎士だった。

その薄い色合いの双眸を、カルエラは焦りを隠せぬ表情で見上げ

た。

「私がお探します。大勢の気配に隠れていらっしゃるのかも」

しばらく無言で探るような目をしていた騎士は、やがて難しい表情のまま頷いた。

29 森の中5（後書き）

面白くないターンなのでサクサク書きました。
書き直したくないぐらいつまらん雰囲気です（ダメじゃん><

30 森の中6

その頃の倫太郎は、子供たちに腕を引かれて必死に走っていた。いざ結界石を使おうとしたところで、何者かに襲撃されたからだ。……いや、正直に言おう。

突如として繁みの奥から姿を見せたのは、黒か緑か茶色が判別しにくい色合いの巨大なイノシシ。

ボタボタとヨダレをこぼしながら、ヒタと美味そうな獲物を見る目で見据えられて、倫太郎は震え上がった。

「力、カノコ豚」

小さな象ほどもありそうな巨体を見るなり、子供たちは恐怖に慄き、引きつった悲鳴を上げた。

なんとも可愛い名前だと頭の片隅で思ったが、その凶暴さは教えられるまでもなくわかる。

鋭い牙。

獰猛な唸り声。

倫太郎が動物園やテレビで見た事のあるイノシシと、サイズはまるで違ったが、後ろ足で地面を掻く仕草は一緒で……

「に、逃げたほうがいい……よね？」

結界石を使えば回避できるのかもしれない。

しかし、怯えて逃げの体勢に入っている子供たちを、全員一箇所に集めて座らせるのは、巨大イノシシの餌食にしてください！と言っているようなものだった。

「姫さま」

ぐい、と腕を引かれて、目線だけで下を見下ろすと、カイルより少し背の高い茶色の髪の少年が、真っ青な顔で猛獣を見据えていた。「カノコ豚は、群れで暮らしています。きつとあと10匹ほど近くにいます」

「……じゅッ」

10匹？ アレが10匹もいるって？

「お、俺は猟師のせがれです。オヤジたちがカノコ豚を狩っているのを何度か見ています。俺が囿になりますから姫さまは」

「だ、ダメだよ！」

「獲物を定めたら突進してきます。何もしないと誰かが食われます」
倫太郎は躊躇った。

「ここで何もしないまま怯えていても、確かに子供たちは守れない。
「……………キミは？」

「みんなと違う方向に誘導して、充分距離をとってから逃げます」
「やっぱりダメ」

倫太郎は、ギリギリと距離を詰めてくる巨体から、少年を守るように後に下げた。

いくら見た目が女の子になっっているからといっても、幼い子供に守られているようでは倫太郎の男が廃る。

考えろ、考えろと、動きの鈍い頭を叱咤する。

こんな小さな子供たちを。

震えて泣きそうなのに我慢している彼らを。

いい年をした男が守らずにどうするのだ！

「カイル、結界石は？」

「ここにありません」

守るようにぴったりと、倫太郎に背中を張り付けたカイルが、締めた小さな握り拳をわずかに上げた。

倫太郎は、その拳をそつと手のひらで包んだ。

ビクリと震えたカイルが、驚いたようにこちらを振り仰ぐのと。

巨大イノシシが、一際獰猛に咆哮するのはほぼ同時。

倫太郎は、カイルの拳越しに、結界石に込められている魔法を探った。

そして一瞬。

石に秘められた魔法を細かく分析している時間などなく、本能的に必要と思われる修正を加える。

「・・・・・・・・・・投げて！」

「え？」

「早く！！！」

再び振り返ったカイルが、目をぱちくりと見開いた。

その背後に、まっすぐ倫太郎のほうをめがけて巨影が跳躍する。

わけもわからぬまま、カイルは倫太郎の指示に従った。

虎の子の、石だ。

それがあれば、安全に夜を越せる。

どんな敵の目も、獣からも、身を潜めて。

カイルは投げた瞬間、「しまった！」という表情でイノシシを見た。

同時に、イノシシの鼻先にその石がぶつかった。

バシン！！

何か、目に見えない壁のようなものに、巨大なイノシシが衝突した。

凶暴な牙がそり立つ口から、ギャン！！と、見た目に反する甲高い悲鳴。

「みんな走れ！」

倫太郎は、何かに衝突して転がっている巨獣から身を翻し、びっくりして固まっている子供たちの腕を引いた。

「急いで！！！」

はっと我に返った少年たちは、転がるように斜面を下った。

倫太郎は、2本の手で最も幼い子供たちを引っ張り、可能な限りの必死さで駆けた。

足が痛い。

息が苦しい。

心臓が口から飛び出してきそう。

途中から、小さな手で逆に引っ張られた。

道ともいえない道を必死で駆ける。

動きの悪い足だが、奇跡的に転んだりはしなかった。

繁みの葉が、小枝が、柔らかな皮膚を切る。
履き慣れない靴が、ひどく痛い。

懸命に沢を下り、岩の数が少なくなってきた。

倫太郎は、涙交じりに喘いだ。

彼らを守りたかった。

小さな子供たち。

まだあどけない、小学生か、それより幼い年齢の子供もいる。

全員を救いたかったが、守るというよりも我先にと遁走している。

無事に逃げ出せたのか。

遅れている子はいないか。

年長者らしく気を配らなければならないのに、倫太郎は一目散に
怖ろしい獣から逃げることにしか出来なかった。

情けない。

泣きたい。

………というか、もう泣いてる。

倫太郎は、上手く吸えない息でしゃくりあげ、ボロリとこぼれた
涙で頬を濡らしながら奥歯を噛み締めた。

とうとうもう走ることが出来なくなつて、倫太郎は両手を引く少
年たちと小石が敷き詰められた河原に身を投げ出した。

比較的背の高い水草が群生していて、体力の限界まで来ている倫
太郎の目には身を隠せそうな最適な場所に見えたのだ。

腕の中の子供たちを、ぎゅっと抱きしめる。

身を強張らせた幼い少年たちの、柔らかな肢体を身体の下に抱き
込み。

荒い息を、なんとかひそめて……………

「ひ、姫さま」

「しッ！」

倫太郎は、不安そうな少年たちを黙らせ、ぎゅっと目を閉じ、息
を殺して、静まり返った夜の森に耳を済ませた。

聞こえるのは、自分たちの息遣いと、浅い水瀬にぶつかるせせら

ぎの音。

大人が数歩で跨げそうな小川は、どこから届く明かりを反射してキラキラ光っている。

倫太郎は、瞬きすることも出来ず、怖ろしい闇を見据えながら、抱きこんだ二人の鼓動と息遣いをただ聞いていた。

30 森の中6（後書き）

カノコ豚は食べると美味だそうです。

31 森の中7（前書き）

パソコンの調子が悪いです><
テンキーが連打しないと有効になりません~~~~~TT

31 森の中7

ガサリ……と砂利を踏みしめる音がした。

倫太郎は「ヒッ」と悲鳴を上げそうになって、慌てて奥歯を噛み締めて堪えた。

近づいてくる足音。

人間のものだと思うが、動物と人間の足音を聞き分けるような技能は持っていない。

喉から心臓が飛び出してきそうだった。

怖い……怖い！

今にも恐怖で胸が張り裂け、叫び出してしまいそうだった。

男なのに情けないとか、しっかりしないと腕の中の子供たちを守れないぞとか、そんな理性は確かにあったが、それよりも本能に根付いた恐怖のほうが大きい。

あんな化け物など、見たこともなかった。

人間を喰らうような猛獣など、倫太郎が生きてきた環境にはいなかった。

言葉も通じず、ただ食欲を満たす為に殺意を露に追ってくる。

生臭い息。

ボタボタとしたたるヨダレ。

ぎゅっと閉ざした視界に蘇るあの巨獣の姿に、倫太郎は理性など追いつけないほどの恐怖に縮こまってしまった。

「……ああ、よかった」

頭上から、小さな溜息交じりの声が聞こえた。

それがアルフのものだと気付くまで、倫太郎の心臓は狂ったように脈打ち、全身がガタガタと震えていた。

「……っあ」

そっと肩に手を置かれ、ビクリと震えた。

「大丈夫ですか？ お怪我は？」

耳に覚えがある声なのに、状況をすぐには理解できない。

我ながら情けないほど恐怖に震え上がりながら、おずおずと視線が泳ぐ。

瞬きするのも怖い。

視界が閉ざされた一瞬で、急所を咬み裂かれてしまうのではと。

荒い呼吸音を洩らすのも怖い。

あの怖ろしい猛獣に、襲い掛かるチャンスを与えるのではと。

「姫さま？」

恐怖で潤んだ視線がようやく定まり、随分と年下の少年の顔がはつきりと誰かわかり、安堵の息を吐き出すまでにたつぷり30秒はかった。

「……だ、大丈夫」

体格からは想像もつかないほど力強く腕を引かれ、倫太郎はようやく半身を起こした。

抱き潰していた少年たちも、ビクビクしながら周囲を見回している。

「みんなは？」

倫太郎の声は、明らかに震えていた。

それを恥じる間もなく、恐怖に慄いていた少年たちのことを思い出す。

あの獣から、逃げ出せただろうか。

この夜の森を、転ばずちゃんと走れただろうか。

「確認できたのは6人です。3人は逆方向に逃げたので、無事かどうかわかりません」

倫太郎は不甲斐ない己に齒噛みしながら、なんとか立ち上がろうと片膝を立てた。

「さ、探さないと……」

10歳にも満たない幼い少年たちなのだ。

「きつと怖い思いをしてる」

夜の森の闇は深い。

しかも、猛獣にいつ襲われるか知れないとなれば、恐怖でパニックを起こしているかもしれない。

「群れがいる森に分け入るのは危険です。せめて明るくなるまで待つて……」

「その危険な森で、小さな子供が怖がっているのに放っておけないよ！」

「そこに、誰がいるのかね？」

不意に耳に届いた低い声に、倫太郎はギクリと押し黙り、アルフが素早く倫太郎の前に回った。

ふわり、と柔らかな光が視界を打った。

それはランプの弱い明かりだったが、長らく暗闇の中にいた倫太郎には目を射んばかりの輝きに見えた。

「こんな時間に、こんなところで子供が何を……おお神よ」
アルフが倫太郎を隠そうと身を乗り出すが、小さな少年が遮れるものはごくわずかだった。

ランプを掲げたその人物は、倫太郎たちを見るなり低い声で「神」への祈りを呟いた。

よく見れば、特徴的な装束。

神殿に居たひとたちとは違う、もつとくすんだ色合いのシンプルな衣服ながらも、それが神職にある者が纏うものだひと目でわかった。

髪はごま塩混じりの白髪で、顔のしわも深く、老齢と言えるであろう容貌をしていたが、体格は屈強でよく鍛えられているとわかる。「神の僕の助けは必要かね？」

優しい深い声。

尖ったところなどまるでないその声色に、倫太郎は安堵のあまり腰を抜かしてしまった。

しかし。

「……それ以上近づかないでください」

保護者を見つけた子供のようにホッと息を吐いた倫太郎と違い、

すくと仁王立ちになったアルフは警戒心に満ちた声色で言った。

「貴方は何者ですか？ どうしてここに？」

「……あ、ああだね？」

ランプを掲げた老人は、半ば唇を開けたまま驚愕の表情で倫太郎を見つめている。

「このような森の中で、修道士さまは何をしておいででしたか？ とお聞きしています」

アルフのその声色は、ギョツとするほどの鋭さと敵意があった。

相手の怒りなど斟酌せずに、きっぱりと言い切るその口調は、幼い少年は発するには随分と尖ったものだ。

倫太郎は、修道士であるらしい老人と、目の前に立つ隻眼の少年とを交互に見た。

どうして彼がそんな態度をしているのかと訝しく思うと同時に、今の場所が、およそ誰かと出会うに対応しい場所ではないのだと改めて思い当たった。

深い深い森なのだ。

お互いに探しあっている人間ですら、見つけ出すのが難しいほどに。

それなのに会った。

奇跡的なその確率を神の僥倖と言すべきか、何か他の意図があると考えるか。

アルフは即座に後者を疑ったのだろう。

年上の自分が呆けている場合ではないと、倫太郎は改めて息を整えた。

目の前の人物が人買いどもの追っ手のようには見えないが、外見で判断して幼い少年たちを悲惨な身の上に舞い戻らせる訳にはいかない。

倫太郎が立ち上がると、老修道士の視線もそのままゆっくりと移動した。

その凝視の先にあるのはあきらかに、男物の服では押さえ切れな

い胸のふくらみだ。

倫太郎は羞恥を覚えるより先に、「そりゃ見るよな」と共感しそうになったが、アルフのみならず年少の2少年もがキツと敵意をむき出しにするのを見て、慌ててマントで身体を覆った。

「私はこの先の修道院で神に身を捧げているしがない老人だ。そう警戒してくれるな」

修道士の老人が慌てて手を振ったが、幾分朱に染まった顔が夜目にもはつきりと見て取れる。

「それよりも、女性がこのような森の中で夜を過ごすなど……身体を冷やすとよくない。是非我が修道院へお越しくだされ」

「お氣遣いなく」

アルフはきつぱりとそう言って、倫太郎を川の上流の方向へと押した。

「連れがおりますので」

「失礼ながら」

老人は一気に小川を横切り、距離を詰めてきた。

倫太郎が身構える間もなく。

アルフが、その伸ばされた手を退ける間もなく。

「………っ」

「ああやはり、足に怪我を」

倫太郎は腕を引かれて、よろめいた。

その修道士は、老人とはとても思えない屈強な体つきをしていた。まるでそう……武人のような。

「失礼」

ずっと抱き上げられて（しかも所謂お姫様だっこ）、多少の驚きつつも「慣れたなあこれ」と思ってしまう自分に非常に複雑で情けない気分になった。

「姫さまを下ろせ、無礼者!!」

アルフが興奮状態で飛び掛ってきたが、老人の身体は揺るぎもない。

どうせ替わるなら、こんな貧弱な女ではなく、たとえばこの老人のような遅い身体がよかった。

小さな子供なら5人は余裕で抱えれそうな。

誰もが守りたくなるような……ではなく、誰をも守れるような。

そんな、強さが欲しかった。

「我が院へお運びする許可を、美しい方」

どっしりとした低音が、幾分おずおずとした口調でそう言って。

倫太郎は「もう運んでるじゃないか」とは言えず、小さく溜息をついた。

老修道士がどうしてこんな所にいるのかと言う理由は、すぐにかかった。

この小川が、彼の住まいである修道院の裏手にあるからだ。

小川の水でお清めをしたり、日々の生活用水としても使っているらしい。

抱き上げられて運ばれたのはほんの5分ほど。

川を渡って、蛇行する流れ沿いに進むとすぐ石の建物の屋根が見えた。

「残りの子供たちも、朝までには捜させましょう。ご心配には及びませんよ」

「……はあ」

倫太郎はやる気のない返事をしながら、ちらりと遅い腕の主を見上げた。

見れば見るほど……ジジイだ。

年輪を刻んだ皺や、元々は黒かったのだろうが9割がた白くなっ
てしまった髪。それ以上に真っ白な髭。

明らかに、倫太郎が祖父と呼んでもいいであろう年齢のはずなのに、なんだろうこの力強さというか、マッチョな感じというか……

・・・お肌のピチピチ感は。

首から下だけ見ていると、とても老人だなどと呼べない。
筋張った逞しい腕に続くのは、非常に鍛え上げられているのだろ
うとわかる肉体。

その硬く張った筋肉の動きを感じるたびに、倫太郎は非常な違和
感と、理由のわからぬ困惑に見舞われた。

「・・・あの、下ろしていただけませんか」

何故だかこのまま運ばれるのが、非常にマズイ気がした。

老修道士に対しての危機感があつたわけではない。

ただ、直感的に何かがダメだと思つたのだ。

「ご遠慮なさいますな」

につこりと、目じりに刻まれた皺は深く。

例えるなら近所の人のいい爺さんのような温和な声色だつたが。

まっすぐに視線があつて、倫太郎はその水色の双眸の奥にあるも
のに違和感を覚えた。

それが何かなど、言葉では言い表せない。

強いて言えば、笑っていない目の奥の光か。

「・・・」

「ああ、お疲れですな」

それを形にするより先に、上半身を支えていた腕がずりりと深く
なり、さらに老人と身体が密着する。

「お眠りなされ、美しい方」

伸ばされた手が、す・・・と林太郎の視界を覆った。

大きな手のひらが両目の上に乗ったとたん、凄まじい恐怖で、肝
が冷えた。

とつさに身体が強張つたが、強く抱きこまれているので身動きひ
とつ出来ない。

大きな暖かい手のひらの隙間から、どっしりとした古い石造りの
建物が見えた。

——ダメだ！

倫太郎は「ひゅっ」と喉を鳴らした。

角度を変えた一瞬で目にしたものは、本能的に危ないと、危険だと感じずにはいられない気配。

紫色のくすんだ色合いの、強い魔法の布陣。

それは建物を取り巻く、強固な鎖。

鉄壁な封印。

そこに……何がある？

「姫さま!？」

異常を感じたらしいアルフの声が、やけに遠くに聞こえた。

ああ、ダメだ。

守らなければいけないのに。

あそこに行つてはいけない。

あの建物に入つてはいけない。

声に出してそう言いたかったが、すでにそれは不可能だった。

意識が遠ざかっていく。

最後に倫太郎は、老人の筋肉質の腕に爪を立てた。

できたのは……それだけだった。

31 森の中7（後書き）

いぶし銀なジューさまって大好物です（笑

32 森の修道院1（前書き）

ほぼ一ヶ月ぶりの更新です。お待たせしました。
若干構成を変えて、この一話を挿入しています。
隻眼のアルフ少年視点です。

32 森の修道院1

華奢な……子供である自分の目から見ても華奢な腕が、
ダラリと宙に垂れた。

白い手首。

肉付きの薄い、人形のような手指。

それを目にした瞬間、アルフは大柄な老修道士の背中に、何か別のものを見てしまったような錯覚を抱いた。

言うなれば、恐怖。

憎悪にも絶望にも似た、口では表現しがたい感情。

何故か一瞬にして、『駄目だ』と思った。

このまま行かせてはいけない。

ついて行つてはならない。

しかし本能がそう警告を発しても、如何せんこの両手は非力で、
とっさにどういう行動に出ればいいのか分からず、息を詰めた。

この老人は、敵だ。

見た目善良そうな修道士に抱くには、自分でも首を傾げなくなる
ほどの嫌悪感。

アルフは顔をうつむけ、あふれ出す感情を押さえ込んだ。

思いに蓋をするのは慣れている。

まるで騙まし討ちのように、実父に売られたときにも。

最愛の弟の命が、この手から滑り落ちてしまったときにも。

子供らしく感情を爆発させるのは状況が許さないこともあったし、
彼自身の気質がそれを促していたからでもあったが、決して何も感
じないわけではないのだ。

アルフは懸命に、渦巻く負の感情を飲み込んだ。

そうすることで、相手からの警戒心を必要以上に浴びないよう努
めた。

「……………」

そして、数歩後を歩く自分よりも少しだけ背の高い少年の腕をつかむ。

はっと息を飲んだ彼が、アルフの無言の行為をどう受け取ったかは知らない。

自然と並んだ彼の歩幅が緩み、一秒より少し長い間だけ視線が重なって。

『行け』と無言で小さく顎をしゃくると、獵師の倅であるジェイスはわざとらしくない程度に蹴躓き、柔らかな下草の生えた草むらに転がった。

「ん？ どうした？」

「姫さまをどうするつもりだ！」

さすがに子供がひとり転んだことに気付いた老人が振り返ったが、アルフが子犬のように噛み付くと困惑したように首を振る。

「どうするもなにも……」

「まさか不埒な真似を！」

「しないしない」

追い立てるように責めると、老人は『邪まな感情などあるはずないだろう』と言いた気な顔をして首を振った。

幸いにも、子供がひとり減ったことには気付いていないようで、続くアルフの口舌に辟易と目を逸らせる。

それからさほど時間をかけずたどり着いた修道院は、このような森の中にあるにしては場違いなほど立派な建物だった。

目に見えてなにかよくないものがあるわけではない。

下手な街にあるものよりも大きく、頑強そうな石造り。

神殿などに感じる静謐な空気が漂い、そこが紛れもなく神に身を捧げるものたちの住まいなのだとしめていた。

それなのに何故。

これまで以上に強く、その建物に入りたくないと思うのだろう。まるで牢獄のようだと、そんな第一印象を抱いてしまったのだろう。

「こんな深い森の中で女性や子供が夜を過ごすなどありえん、遠慮せず入りなさい」

思わず足を止めてしまったアルフに、老人が優しく口調で言う。
「暖かいベッドと、何か食べるものを用意させよう」

アルフが足を止めたので、自動的にその背後に続く少年たちもひとかたまりに立ち止まり、不安そうに互いに擦り寄った。

彼らが若干の安堵の表情を浮かべているのは、無理もないと思う。自分を含め、年端もいかない子供たちなのだ。

アルフは、老人に抱き上げられている小柄な女性を見上げた。
きらきらと。

美しい黄金の髪。

血の気を喪った白い頬。

そしてその足は、胸が痛むほどに土で汚れてしまっている。

「………お湯を貸してください」

「ん？」

「せめておみ足だけでも、お清めしてさしあげなければ」

「ああ、そうだな。誰かに湯殿の用意をさせよう」

「とんでもない！」

アルフは老人の言葉を強く遮り、尖った目線で遙か年長の修道士を見上げた。

「………たとえ修道士であろうとも、許しなく女性に触れるなど許されません」

数が激減し、その身と同じ重さの金よりも貴重となった女性は、子供を産む、という行為さえ怠らなければ下手な貴族よりも優遇される存在なのだ。

2人以上同じ相手の子供を産まない、という暗黙の了解さえクリアすれば、子供の父親を選ぶ権利は女性のほうにある（王侯貴族相手ではその限りではないが）。

どんな下層民の女であろうとも、意識のないまま好きに触れることなど許されはしない。

「それとも、ここに修道女あるいは宦官がいらつしやるのですか？」

「その論理で言つと、お主もだろう」

そう、アルフとて男子。

見た目幼い子供であろうとも、10歳を越えた男である以上、本来であれば女性に触れることなど許されはしない。

「私は姫さまの身の回りのお世話を許されています」

しかしアルフはしれつとそう言い切り、何か文句があるのか、と老人を睨んだ。

「見も知らぬ男の手で湯浴みなど、姫さまの同意もなく許されることではありません」

建物の奥から出てきた男衆たちが、不安そうな少年たちを宥めながら別室に連れて行く。

彼らの不躰な目が美しい黄金の髪に釘付けになり、次いで小さな形の良い顔かんはせに息を飲み、小柄だが魅惑的な凹凸を持つ肢体を舐めるように見つめる。

アルフはこみ上げてくる怒りに奥歯を噛み締めて、ギツと年経た修道士を見上げた。

「姫さまのお世話は私が。手伝いは必要ありません」

頑とした口調で、黄金の姫を誰の手にもゆだねる気はないことを示す。

「……まあ、どうしてもというのなら」

老修道士は渋々という感じで同意し、廊下の奥まった場所にある部屋まで彼女を抱いたまま歩いた。

「ベッドにお運びすることは許してくれるだろうな、いと若き騎士どの」

非力なお前には無理だろうと見下された気がしたが、事実であるので聞こえない振りをした。

「お湯と、清潔な布を」

「すぐに用意させる」

アルフは案内された部屋をぐるりと見回した。

内装のあまりない、質素な部屋だ。

小さな窓がふたつ。

子供ならまだしも、大柄な男では通れないであろうサイズだ。決して、居心地が悪そうなわけではない。

この修道院の、主寝室が主客室とも言うべき部屋なのだろう。しかし。

老人が退室すると同時に背後で扉が閉められる。

閉じ込められたと、そんな感覚に捕らわれてしまうのは、あなたが間違った判断ではないのかもしれない。

アルフはまだ慣れない片側だけの視界で、じつくりと慎重に室内を観察した。

出入り口はひとつ。

装飾のないベッド以外にあるのは、2人掛けのソファとその前のテーブル。

ベッドの後ろも覗いてみたが、何者かが身を潜めるような場所はない。

納得するまで室内の様子を観察してから、アルフはようやく長い息を吐いた。

「……………姫さま」

いまだ気を失ったままの美しいひと。

ベッドに横たわるその儚げな姿に、ドキリと心臓が大きく脈打つ。恐る恐る近づいて、無意識のうちに乾いた唇を舐めた。

こんなに関近で女性の寝顔を見たことなどない。

父親に売られてしまうまでは女性の身のお世話をする小姓として働いてきたが、私的な会話をするほどに近く女性と接したことはなかったのだ。

少年はそつと、頬に張り付いた金系の髪を払った。

女性とは、こんなにも小さく、柔らかく、優しい生き物なのか。

アルフにとってこの美しい姫は、命の恩人であり、弟の死に涙し言祝ぎを与えてくれた得がたきひとだった。

まるで天使のようで。

優しく暖かい、聖母のようで。

—— 守らなければ

これまで以上の強い決意を心に刻む。

その服のあちらこちらに泥がこびりついていることに気付き、顔をしかめた。

着替えさせて差し上げたい。

この方には、粗末な衣類など似合わない。

最上級の絹のドレス。

指先まで香油で手入れし、髪も美しく編み込み、なにかも最高のもので包まれるべきひとだ。

「……はい」

ドアのノックの男に立ち上がりながら、アルフはどうやって着替えを調達しようかと、素早く思いを巡らせた。

32 森の修道院1（後書き）

アルフ少年、男の子ですねえ。将来有望です^^b

33 森の修道院2（前書き）

少し編集したので、お話が前後しています、
視点が変わりすぎて読みにくくないといいいのですが、>
<

33 森の修道院2

「お連れしましたよ」

石の扉越しに、老修道士は声を掛けた。

強固に封印を施された扉の向うに、彼が主と仰ぐ存在が居る。

その部屋とつながっているのは、食事や日用品を差し入れるための小さな窓だけで、もはや年数もわからないほどの長い月日、この扉が開くことはなかった。

「とてもお美しい姫さまです」

「……………眠らせたまま奪え。目を覚ますと厄介だ」

扉越しに聞こえてきたのは、耳を澄ませていないと聞こえないほどに小さな声。

「あのですね、わしはもう干からびた老人なんです。いくら別嬪の姫さまだといえ、無理ですよ」

「……………」

「まあ、閨を共にすることは可能だとしても、役立つ種があるかどうか」

「ならば下男どもでもいい、女を孕ませろ」

「……………はあ」

「確か4人の見張りがいたな。新たな男衆も何人かいるのだろうか？ そいつらに下げ渡せ。好きにしろとな」

「何もそんな事までしなくとも、話し合いをされてはいかが？ 強姦と強姦では意味合いが違……………」

「カイウス」

分厚い扉越しの声が、一段低くなった。

「お前は事の重大さがわかってしているのか」

「……………ジェロルドさま」

老修道士は眉間に深く皺を寄せ、溜息をついた。

「子を孕ませ、力を相続させてから殺せ。世界が滅びる前に」

「・・・・・・・・」

「50年前にもできたことだ、今回も出来るはずだ」
石の扉を見据える老人の目に、暗い色が灯る。

50年前。

若き日の彼が行ったことは、年老いてもなおその胸を苛み、後悔と慟哭と諦めと憐憫を同時にもたらす。

あの日、まだ体液まみれの赤子を抱いて走った。
命じられたとおりに。

それが世界を救う為なのだと、使命感のみを頼りに。

「これ以上の歪みは、人の世の理ことわりが耐え切れない」

主の言葉を噛み締めて、うな垂れる。

また同じ事をするのかと。

同じ罪を犯すのかと。

激しい胸の痛みを飲み込み、ゆっくりと顔を上げた。

穏やかに老いていく日々の末に、まだこんな試練が待ち構えているとは思ってもいなかった。

しかし、これこそが生き恥をさらしてきた己の最後の仕事なのだろう。

「・・・・・・・・承知しました」

老修道士は低くはつきりした声で言った。

「ただし手段はお任せください。一年後には赤子を生まれ、あの方の最期を見届けます」

「同情などするな。ただの子供を産む道具だと思え」

「ジェロルドさま」

「現神人がヒトであるものか。ただの石の像が魔法で動いているだけだ」

老修道士は無言で頭を下げてから、ゆっくりと扉に背を向けた。
成人の年に自ら封印の間に身を沈めた主の、暗い閉ざされた生涯を思う。

真相を知ったときの絶望した眼差し。

そしてその後の長い時間、彼は一人、孤独に身を封じただけで生きている。

己の宿命を恨んでいるだろう。

愛した娘との誓いも、これからだった人生も、なにもかも捨てなければいけないことを悔いているだろう。

それが誰の罪なのかと問われても、答えはない。

強いて言うなら神か。

無力な人間ごときに戯れに宿命を投げかけてくる、神こそが敵か。老修道士は、ことさらにゆっくりと階段を上った。

今から自分がなすべきこと。

それは罪ではないのかと……自問しながら。

腕に抱いた、まるで羽根のように軽い美しい少女。

闇の中にあっても、まばゆいほどに輝いていた。

その神々しいまでの存在感を思うと同時に、たった一度まみえた、

別の現神人が脳裏に蘇る。

出産直後の気だるげな、青ざめた顔。

己を見上げた、濡れたような黒い瞳。

数多の愛人を侍らせ、贅沢の極みを尽くし、複数の大国の国政にまで口を挟み。

大陸を戦乱の渦にたたき落とし、一説には女性の数がこんなにも少なくなってしまった原因なのだとされている。

前代の、現神人。

ジェロルドの生母。

彼はある意味、神の力を色濃く受け継ぐ、この壊れかけた世界の支点であった。

現神人がその長き御世を全うしなくとも、世界が崩壊することはないのだ、という証明でもあった。

彼は新たな現神人が、己の母親のように世界を壊してしまう前に、次代の支点を産ませてから神の御許にお引取り願おうと考えているのだ。

はたしてそれは、許されることなのか。

老修道士は、階段を上る己の足をじっと見下ろす。

いやもとより、己の罪は深く、神も決して赦しはしないだろう。

今さらもうひとつ罪状が増えたところで、同じこと。

後悔など、する資格はない。

「カイウスさま」

階段を上った先は、修道院の一階のミサ室だった。

その祈りの間で待っていたのは、姫を見張れと命じていたパウル

修道士だ。

「着替えが欲しいと言っていますが、どうしますか」

「着替えか……女性の服がないのは仕方がない。少年用の修道服で我慢していただく」

「次に食料を仕入れに行くのは明後日です」

「そうだな、ドレスは目立つ。女性修道士用の服なら、疑問を持たれる事もあるまい」

「わかりました」

老修道士は、己の半分ほどの年若い修道士の、従順に上下する頭を見下ろした。

「……どうされている？」

「姫ですか？」

ほんの少し、常に冷静沈着な彼の表情が明るくなった。

「まだお休みです。よほどお疲れだったでしょう」

世俗から遠い、清貧を旨とする生活に自ら好んで飛び込んだ彼でも、若く美しい女性を目にして浮き足立っている。

それに幾ばくかの危機感を抱きながらも、カイウス自身、普段とは違うこの空気が不快ではなかった。

「目を覚ましたら、すぐに知らせてくれ。彼女に話がある……」

・大事な、話だ」

「わかりました」

パウルは色素の薄い目で老修道士を見上げ、深く礼をしてから足

早にミサ室を去った。

祭壇の前に取り残された老修道士は、そつと両目を閉ざし膝を折った。

慣れた仕草で祈りを捧げながら、罪を詫びる。

神に。

己が弑した前現神人に。

そして、今から死へ導こうとしている黄金の姫君に……

この祈りが届くことはないのはわかっている。

罪にまみれた叛逆者の言い訳など、神の耳朵にも触れないに違いないのだ。

しかし、祈る。

祈らずにはいられない。

辛い人生を積み重ねている主の為に。

再び生み出される、その継承者の為に。

33 森の修道院2（後書き）

ジェロルド氏、30年以上閉じこもった究極のヒッキーです。
風呂やトイレは魔法式自動。
掃除も同じく。

・・・じゃないと不潔すぎて作者的に表現がムリ^^；

34 森の修道院3（前書き）

前回の更新で、33話の前に1話入れています。更新分に気付かなかった！とのご指摘がありましたので、念のため。

34 森の修道院3

ちやぶ……

静かな室内に響くのは、湯の跳ねる小さな音。

アルフはぎゅっと布を絞り、丁寧はその皺を伸ばした。

ベッドの上に横たわるのは、これまで見たこともないほどに美しい女性。

無防備に目を閉じるその姿に、ドキドキと鼓動が早まる。

しかしそれ以上の動揺は胸の奥に押しとどめて、少年はゆっくりと彼女のつま先に手を伸ばした。

泥を吸って汚れた靴を、そっと脱がせにかかる。

丁寧に。

起こさないように。

大きな目の靴なのに、少し引つ張ったくらいでは脱げなかった。

泥で密着してしまっているのだろう。

しばらく悪戦苦闘したが、やがてスポツと片方が外れて。

そして表れたのは、真っ白な素足。

アルフはひゅっと鋭く息を吸い込み、瞬き数回分、呼吸を止めた。気を取り直して、もう片方も脱がせる。

現れた足の色は白いが、泥水で斑に汚れてしまっていた。

いろいろな意味を含んだ溜息を付きながら、アルフは汚れた靴を床に置いた。

なんという、美しい人だろう。

子供の特権で、何人かの女性のお世話をしたことがある。

どの方もそれはもう美しく、いい匂いがして、柔らかなその手肌や声色にうっとりとしたものだが。

そんなものとは、まったく別格だった。

年齢的には、夫がいて、初産を済ませていてもおかしくない。

いやそれどころか、2番目3番目の夫の子供を授かっている年頃

だろう。

なのに、どこかが違う。

雰囲気が……そう、「女性」を感じさせない。

まるで、同じ少年のような。

無邪気な子供のような。

アルフはそこまで考え、首を振った。

この人を「子供」だなどと思う者は、いないだろう。

誰もがひと目見るなり、見惚れる。

その黄金の髪に。

滑らかな白磁の肌。

そして……

思わず視線が向いたのは、豪華な黄金の髪が渦巻く上半身。

仰向けに横たわっていてもはつきりと主張している、豊かなふく

らみ。

まるで、赤子を生んだばかりの母親のような。

童心に返って、すがりつきたくなるような。

アルフはそのままずっと視線を天井のほうへと逸らせて、誰が見

ているわけでもないのに、周囲を見回した。

そして改めて、汚れの激しい足首から丁寧に拭い始める。

赤らんでしまった顔を、俯けるようにして。

幾ばくかの、焦りを誤魔化すように。

その白い足は、女性のものというよりも、やはり幼い子供のもの

のようだった。

肉付きの薄い、華奢な足首。

くつきりと丸い、可憐な踝。

足の甲は低く、幅が狭い。

指は心もとないほどに細く、先端の爪は宝石のように小粒だ。

それら一つ一つを確かめるように、そっと、丁寧に拭いていく。

柔らかい足裏の皮膚は、ピンク色。

慣れない歩きのせいだろう、靴ズレができてるのが痛々しい。

泥汚れを落とすために少し強めに擦っても、美しい黄金の姫の意識が戻ることはなかった。

アルフは無心を心がけつつ、真剣な表情で足を拭き続ける。爪の先に食い込んだ泥が、なかなか落ちない。

狭い指と指の間から、足首の少し上まで。

念入りに。

・・・多少念入りすぎるほどに。

やがて満足のいく清潔さになるまで手を動かし続け、汚れた布を桶ですすぐ。

代わりに乾いた布で、ほっこりと湿った足を包み。

次は、手だ。

足ほどではないが、土や草で汚れた両手を、細心の注意を払って清めていく。

アルフは平均的な同年代の少年よりは小柄だ。

そんな自分の目から見ても、姫の手はとても小さく映る。

日焼けなどしたこともなさそうな白い肌。

シミも黒子も見当たらず、形の良いピンク色の爪がきれいに磨かれている。

手入れの行き届いた長い黄金の髪といい、キラキラと薄く塗りものをされた手足の爪といい、この美しい人がアルフの身近にいたどんな女性よりも大切に扱われてきのだとわかる。

地方の村の女とは違う。

庄屋や豪族の妻とも違う。

面識はないが、遠くからお言葉を賜った貴族たちの奥方が、いやそれよりもっと丁寧な扱いをされてしかるべき身分なのだろう。

貴族の女性か。

あるいはもつと高貴な・・・

コンコン

一心不乱に手の汚れを拭っていたアルフは、乾いた木の扉を叩く音にはっとした。

「・・・・・・・・はい」

「お着替えをお持ちしました」

ベッドの脇に跪いていたアルフは呼吸一回分、何の変哲もないドアを睨む。

いや、邪魔をされたとかそんな事を考えたわけではない。

子供の自分でさえ魅了してしまう美しい女性が、聖職者といえ大人の男にどういう目で見られるかと思うと、来訪者に対する警戒心と敵意を抑えることができなかったのだ。

アルフは立ち上がり、側の毛布で無防備な肢体を隠した。

「どうぞ」

返答をしてすぐに扉は開いた。

現れたのは、淡い栗毛の若い修道士だった。

薄暗い室内でも、その色素の薄い白っぽい双眸が目立つ。

「・・・・・・・・まだお休みですか？」

「着替えはそちらですか？」

アルフは己の身体で相手の視界を遮るように歩み寄りながら、不躰な視線をベッドに向ける修道士に不機嫌な声で言った。

「お預かりします」

「着替えの手助けが必要なら私が・・・・・・・・」

「いえ、それは姫さまがお目覚めになられてから」

アルフはきつぱりと青年の申し出を遮って、「早く出て行け」とばかりに相手を見上げた。

隻眼の少年の、痛々しいばかりの傷跡を目にした修道士が、若干の怯みと同情の眼差しを向けてくる。それに煩わしさを感じ、目つきが更に悪くなっていくのが自分でもわかった。

「ここは女性の部屋です。一夜の宿をお借りしている身で言うことではないのかもしれませんが、修道士さまといえども男性、夫でもない方と同室にあるのは姫さまのご名誉に障ります。申しわけありませんが・・・・・・・・」

「あ、いえそんなつもりでは！」

おそらく気質的には善良な青年なのだろう。

アルフは僅かに頬を赤らめた修道士を表情のない眼差しで見上げて、彼がしどろもどろに言い訳をしながら退室するまで警戒し続けた。

自分は、子供だ。

年齢の割にも小柄だし、戦闘についても魔法についても何も知らない。

ひよろりとしているとはいえ大人である相手が「その気」になれば、自分を排斥するなど簡単だろう。

アルフは、戦うことを学んでこなかったのを悔いていた。

こんな小さな手では、何も出来ない。

この美しい人を、興味本位な視線から守ることすらできない。

アルフは閉ざされたドアをじっと見つめた。

この先起こるかもしれない最悪の事態を想定しつつ、どうすればそれを回避できるのか、必死になって考え続けた。

34 森の修道院3（後書き）

少年アルフくん・・・有望そうではありますが、将来の方向性が若干不安かも（笑）
粘着質とみました！ たぶんね^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0177m/>

遥かなる唄声

2011年10月30日13時15分発行